4
成田良悟
Narita Ryohgo
イラスト／森井しづき
原作／TYPE-MOON
Illustration:Morii Siduki
Original Planning:TYPE-MOON
Fate strange Fake
フェイト／ストレンジ フェイク
電撃文庫

CONTENTS

諦めましょう、諦めるのよ。
貴方あなた、あの子はもう私達の手に負えない。
あの子は私達の一族の魔ま術じゅつを進展なんてさせない。みんなみんな壊してしまう！
２０００年近く続いて、ただ続いただけと時と計けい塔とうに揶や揄ゆされてきた末路があの子だとでも言うの？　確かに時と計けい塔とうは手の平を返すかもしれない、だけど、その手で握り潰されるのが目に見えてる。でも、きっとあの子だけは生き残るのよ。

ねえ、どうしてあんな子が生まれたの？
本当にあの子は私達の……いえ、そうね。ごめんなさい。
可能な限りの検証はしたわよね。科学的にも魔ま術じゅつ的てきにも、あの子は間違い無く私達二人の間に生まれた子だって証明された……それは解わかってる！
でも、それでも私には信じられない！
現代にまだ妖精が残っていて、チェンジリング取り替え子に巻き込まれたと言われた方が納得できるわ。
貴方あなたも解わかっているでしょう？
私達の一族が３００年前に取り組んで、結果的に『不可能だ』と判断されて死蔵されていたあの研究を、あの子はたった８歳で完成させたのよ！　言語化も再現性もない、ただ、あの子が感覚的に弄いじっただけで！　……ええ、そうね。再現性がなければ完成とは言えないわよね……。解わかってる、解わかってるわ、貴方あなた。でも、だけど。

私は怖い。あの子が怖い。
あの子が優秀な魔ま術じゆつ師しであったのならば、私も貴方あなたも誇りに思えた筈はずよ。
でも、違う、違うの。
あの子は犠牲を出さない、魔ま術じゆつ師しに不要な優しさを持っている欠陥品だと私も最初は思っていたわ。だけど、アレは欠陥品ですらない。魔ま術じゆつ師しとはそもそも用途が違う。望遠鏡だと思っていた筒が大砲の砲身だったようなものよ。違う何か、違う何かなのよ。
だから、ねえ、貴方あなた。私は思うの。あの子を終わらせる事が、私達に与えられた魔ま術じゆつ師しとしての使命なんじゃないかって。エスカルドス家の魔ま術じゆつの果てはあの子を終わらせる事にあるんじゃないかと思うの。
ねえ、貴方あなた。
覚悟を決める時が来たのよ。
あの子は、私達の子なんかじゃない。
どこか他の世界から紛れ込んだ、誰でもない、何者でもない、ただの現象よ。
私達は、ただ、それを息子だなんて勘違いして名前をつけただけ……。
フラットなんて子供は最初から存在しない。
意味の解わからない落書きが描かれた、ただの平坦フラツトな広がりだったのよ……そうでしょう？

×　×

フラット・エスカルドス。
彼の存在とその『特異性』を知った時、奇くしくも二人の男が全く同じ感想を口にした。
一人は、財界の魔ま王おうと呼ばれる古き魔ま術じゆつ師し。

一人は、宝石に彩いろどられた万まん華げ鏡きようの空を征ゆく魔ま法ほう使つかい。
　別々の場所と時間にも拘かかわらず、彼らは同じ言葉で少年本人ではなく、その祖先を賞賛した。

『そうか。やっと成ったか』
『子孫未来にすら忘れられた、エスカルドス家１８００年の大望過去が』

『続いて天気予報です。ラスベガス西部に発生した低気圧は──』

　テレビから流れるのは、いつも通りの情報だ。
　街の人々はそんな天気の今後を見て一喜一憂しながら、それぞれの仕事に出向いていく。
　スノーフィールドの街はまだ、パニックを起こしてはいない。
　魔ま術じゅつ師し達やアメリカ軍の非公式部隊、あるいは聖堂教会のエージェントなどが多数入り乱れ、十三柱の英えい霊れい達が揃そろった瞬間から始まった、『七日間限定』の聖せい杯はい戦せん争そう。
　その二日目の朝を迎えた彼らは、まだ世界から与えられた平穏を享受していた。
　もっとも、綻ほころびは既に明確な形となって現れ始めている。
　砂漠地帯におけるガスのパイプラインの爆発事故。
　動物病院に次々と持ち込まれる、謎の病にかかったペットの数々。
　家族の手によって病院の精神科に連れ込まれる、『街から出たくない』と訴える者達。
　歴史あるオペラハウスの崩壊。
　拘留されている犯罪者の奪還を目的としたと思われる、警察署へのテロ行為。
　更には隣接するホテルへの余波。
　そして街の北部から中央部に位置する高層ビル、クリスタル・ヒルまで駆け抜けた謎の突風。
　様々な事件が街の中で巻き起こっていたが、直接それらに遭遇した事の無い者達の間では、それらはまだ、連綿と続く日常を崩壊させる

程の出来事ではなかった。
　これまでの生活で積み上げてきた『常識』は、時に彼らの感覚を麻ま痺ひさせる。
　パニックを起こす手前で、その常識は薄い膜となって日常を覆い、辛かろうじて人々に迫る狂乱の火種を見えないようにしていた。
　あるいは、人々の多くは既に気付いていたのだが、その膜に包まれているという見せかけの安心感に縋すがろうとしていたのかもしれない。

　まだ。
　　まだ大丈夫だ。
　　　　まだ壊れていない。
　　　　　　　　　　まだ街は壊れていない。
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　――日常は、きっとすぐに戻ってくる。

　何一つ保証のない、「そうであれ」と積み重ねられた願望が、膜の中に充満していく。
　そんな状態だからこそ、『なんとなく、どことなく』というレベルで異常を感じている人々は、不安では無く幸せを感じていた。
　自分はまだ満たされた空間にいる。
　自分はまだ正常と異常を分ける境界線のこちら側にいるのだと。

　これは、スノーフィールドの人々がとりわけ楽天的だったわけではない。
　80年かけ、偽りの聖せい杯はい戦せん争そうの為ために創られた都市の各所には、それとなく記された暗示がかけられていた。
　公共施設や道の配置、街の看板や街路樹など、それら一つ一つでは並の魔ま術じゆつ師しが見ても単なる記号としか映らない魔ま術じゆつ。あるいは、特定の心理効果を誘発する科学的領域の配色など、何

重もの要素を重ね合わせた時に初めて発動する、あるいは住人達の身に染しみこむ暗示である。
　魔ま術じゆつと魔ま術じゆつならざるものの双方の組み合わせで生まれるその暗示を正確に計測するには、優秀な観測技術を持った魔ま術じゆつ師しと、ロード・エルメロイII世のような『万象より手がかりを組み合わせる』技能を持った者を揃そろえる必要があった。
　だからこそ、今日まで『黒幕達』は隠し通す事が可能だったのである。
　通りすがりの魔ま術じゆつ師し達にも、街の急激な発展に疑念を抱いた社会学者達にも、実際にそこに居を構え、人生を営み続ける住民達にも。
　このスノーフィールドという街には、このような事態を踏まえ、ある程度まではパニックを防ぐ巨大で曖あい昧まいな暗示が掛けられていたという事を。
　だからこそ、数多あまたの動物達が病に倒れても、『それが人間に感染するかもしれない』という疑念と狂乱が最小限に抑えられたのだという事を。
　そして、やはり住民達は何も知る事のないまま、二日目の朝を迎えた。
　彼ら自身が──
　あるいはこの街そのものが、偽りの聖せい杯はいに捧ささげられる壮大な生いけ贄にえであるという事さえも。

　だが、暗示は暗示に過ぎない。
　暗示によって貼られた『安あん堵ど感かん』という膜も、張り詰めればいずれ限界を迎えるだろう。
　黒幕達にとっては、それで構わなかった。
　その『暗示の膜』が破れるほどの事態となれば、既にただの住人達の力では何一つ抗あらがえないだろうと推測していたからであり、黒幕の中でも魔ま術じゆつを秘匿したい層からすれば、緩やかに騒ぎが

大きくなるよりは、一瞬で花火のように消え去った方が良いいとすら考えられていた。
　要するに、街の住民達は、パニックを起こす事すら許されていなかったのである。

　テレビから流れる情報を聞きつつ、その事実を改めて目まの当あたりした警察署長──オーランド・リーヴは、忌いま々いましげに目を細めながら独りごちた。
「……魔ま術じゅつ師しらしい魔ま術じゅつ師しというのは、汚職に勤いそしむ悪徳政治家と変わらんな」
　言った後で、自分はどうか、と考える。
　民衆からすれば、汚職が表沙汰にならない限りは、悪徳政治家と優良な政治家の見分けをつける事は難しい。
　ならば、最初から民衆の目にすら映っていない魔ま術じゅつ師し達など、それこそ一ひと纏まとめにされてしかるべきだろう。
　例外もいるが、一般人から見た場合、魔ま術じゅつ師しというものは総じて人でなしだ。
　自分もその『例外』ではないという事を自覚しつつ、オーランドは署長室備え付けのテレビから流れる声を聞き続けた。
　スノーフィールドに本拠を置く、地元ケーブルテレビ局の報道番組。
　次なる闘いへと挑む僅かな暇いとま、警察署長でもある黒幕側の魔ま術じゅつ師しは、静かに流れゆく情報に耳を傾け続けた。
　いずれは破綻するであろう、アナウンサーの平静な声を惜しむかのように。

『続いてのニュースです。スノーフィールド南部でのガス爆発による環境への影響は──』

気が付くと、アヤカ・サジョウの意識は遠い景色の中にいた。

　物珍しいものが転がっているわけでもなく、遠くに森が見える平原の中を走っている。
　どうやら自分は馬に乗っているようで、手綱を握る鎧よろいを纏まとった手が見えた。
　□□？
　──夢？
　手綱を握る腕が自分のものではない事に気付き、続いて、身体からだの自由が利かない事に気付く。
　しかし、視界は目まぐるしく動いており、自分がどうやら何処どこかの誰かと同じ視点を共有しているのではという推測に思い至った。
　そういう夢もあるのだろう。
　アヤカはそう考えようとしたが、それにしてはやけにリアルな夢に思える。
「リチャード、おい、リチャード！」
　声を掛けられて、視界がグルリと移動する。
　すると、背後には十数名の鎧よろいを纏まとった男達が馬に跨またがっており、そのうちの一人がこちらに馬を近づけてくる。
　視界の中で馬が歩みを止めると、鎧よろい姿すがたの若者が言った。
「リチャード、言われるままについては来たが、まさか本気で探すつもりなのか？　アーサー王の遺産なんてものを」
　男の問いに、リチャードと呼ばれた自分が答える。
　アヤカは何も口にしていないのだが、己おのれの口から言葉が滑り

出す奇妙な感覚を味わった。
『もちろんだ。やっと手にした手がかりだぞ？』
「酒に酔った吟遊詩人の与太話だろう？」
『だからだよ。吟遊詩人が素面しらふで紡つむぐ歌は、その最さい奥おうに巧妙に真実が隠されている。だが、俺はそういうのを読み解くのは苦手だ。正気を失くした時に彼らが口にした事の方がずっとずっと分かりやすい』
　無茶苦茶な理屈だ。
　自分の口からそんなデタラメが流れる事にアヤカは呆あきれたが、その物言いから、彼女は完全に理解した。
　──ああ、これは……。
　──リチャードと呼ばれてる私は……あのセイバーになっているのか？
　ようやく事態を理解したアヤカは、なんという奇妙な夢だと溜ため息いきを吐きたくなる。
　しかし、そんな彼女の感情を余所よそに、会話が淡々と進んでいく。
「アーサー王ゆかりの品があるってだけで、具体的に何があるのかも解わからんのだぞ？　俺達は暇な身の上だから別にいいが、王族のお前がそこまでして何を欲しがるっていうんだ？」
『なんでもいいさ』
「はぁ？」
『エクスカリバーなら最高だが、カリバーンでもロンゴミニアドでも、魔ま猫びよう退治に使ったという盾でも構わない。最後にはアヴァロンの入口を探し当てて、偉大なる祖王本人か魔ま術じゆつ師し殿の姿でもひと目見られたなら、それだけで俺は自分が生まれて来た事に納得できる』
　無邪気な声を響かせるリチャードらしき男に対し、隣に並ぶ若者が苦笑した。
「伝承通りなら、エクスカリバーは湖の乙女ヴィヴィアンに抱かれて

湖の底だろう？」
『なら、湖の乙女を探して仲良くなればいいだろう。かのペレアス卿きようは湖の乙女の一人と契ちぎりを交わし、カムランの丘からも生き延びたと言われているぞ？』
「円えん卓たくにすら数えられていないハグレ騎士だろう？　上手うまいこと逃げただけさ。そもそも、本当にいたのかどうかも解わからん英雄の遺産を探すなど、王族たるお前が自らやる事じゃない」
『偉大な伝説に憧れる事に、王族も平民も関係ないだろ？』
　子供じみた事を言う。
　━なんだろう。
　━どことなく、普段のセイバーあいつより子供じみている気がする。
　王族などと言われていたが、周りの人間達の態度は臣下というよりも親しい友人に対するものだ。
　そして、そのような事など欠片かけらも気にせぬ調子でリチャードの声が響く。
『もしもアーサー王の宝を見つける事ができたなら、あの数々の伝説が全て真実だったという事だぞ？　あのめくるめく冒ぼう険けん譚たんが、俺達の立つ大地の上で実際にあった事だと証明できるんだ！　俺達は、かの騎士王達が駆け巡った大地を受け継いで生きている！　それだけで俺は、自分の運命を全て受け入れる事ができる！』
「実在してなきゃ受け入れないのか？　相変わらず素っ頓狂な事ばかり言うな、お前は」
　呆あきれた様子の友人は、馬上で肩を竦すくめながら続けた。
「ならばどうする？　いっそ俺達で聖せい杯はい探たん索さくでもするか？」
『それは、無駄足になるかもしれないぞ？』
「何故なぜだ？　エクスカリバーやロンゴミニアドと何が違う？」
『クレティアン先生が前に俺に言ったんだ。聖せい杯はいは求めるだけで手に入るものじゃない。聖せい杯はいが持ち主を呼ぶものだと。

聖せい杯はいを追った円えん卓たくの騎士達は、聖せい杯はいという運命の流れに求められたからこそ辿たどり着つく事ができたんだってな。だから、俺は自分から聖せい杯はいは求めない。きっと俺が騎士の栄光を追い続ければ、何いずれ然しかるべき理由が訪れる筈はずだ』

　真面目な調子で御お伽とぎ噺ばなしを語るリチャード。

　そこで出て来た固有名詞に対し、友人らしき男が意味深に口を開いた。

「クレティアンか。噂うわさでは、過去を見通すドルイドの成れの果てという話だが」

『ああ、確かに彼やヴァースみたいな一部の詩人は、かの騎士王と円えん卓たくの物語を、まるで自分で見て来たかのように生々しく、そしてどこか懐なつかしむように歌い上げていたからな。たとえ１０００年生きる精霊だと言われても驚かないさ』

「まあ、どうだっていい事だ。結局アーサー王の遺物の手がかりはクレティアンじゃあなく、街の酒場にいた名前すら知らん酔っ払いの詩人から漏れ出たわけだからな。本当に、そんな与太話を信じるお前の気が知れんよ」

『どんな手がかりでもいいさ。まだ俺は王じゃない。自由な内に、真なる騎士王の足跡を学ぶ事も大事だろ？』

　アヤカの視点からは見えないが、恐らくリチャードは目を輝かせているのだろう。

　子供のような表情が目に浮かぶようだと思いながら、アヤカもそんなリチャードの視点に合わせて平原に意識を向け──

　そこで、奇妙なものを見た。

「自由な内にって、お前は今もほぼアキテーヌの領主みたいなもん……。……ん、どうした？　リチャード」

『……何か、来る』

　それは、平原に存在する一つの点。

　しかしながら、徐々にその点の背後に土煙が立っている事に気付

き、『それ』がこちらに向かって走って来ている何かであるという事が理解できた。
　最初は荒野を疾走する馬かと思ったが、大きさが違う。
　やがて、それが発していると思おぼしき轟ごう音おんがこちらまで届くようになり、周りの騎士達が慌て始める。
「なんだありゃ、大イノシシか!?」
「馬車……？　違う、馬がいない……。見た事がない……足があるのかあれは？　どうやって走ってる!?　獣けものだとしても、あんな嘶いななきは聞いた事がない！」
「おい、こっちに来るぞ！」
「なんて速さだ！　逃げろリチャード！」
　馬の手綱を握り始める周囲を余所よそに、リチャードの落ち着いた声が聞こえてきた。
『面白い……もしかしたらトゥルッフ・トゥルウィスの末まつ裔えいかもしれないぞ』
　──また、知らない単語だ。
　だが、アヤカはそれほど不安な気持ちにはなっていない。
　リチャードの声に余裕があった事もあるのだが──
　こちらに近づいて来るものは、アヤカの知っているものだったからだ。
　彼女の知る現存の物とは些いささかフォルムが異なるそれは、リチャードに近づくにつれ、徐々に速度を落とし始める。
　そして、獣けものの咆ほう哮こうのような爆音を数度周囲に響かせた後、リチャードの数メートル先で完全に動きを停止させた。
「なんだ……これは？」
　いざとなればリチャードと『それ』の間に割り込もうとしていたのだろう。
　最後まで側に残っていた男が、訝いぶかしげに『それ』を見つめる。
「……鉄で出来た馬車……？」

『にしては、車輪が分厚いな。あの黒いのはなんだ？　何かの革か？』
　好奇心に満ちた声を響かせるリチャードの言葉を聞き、アヤカはハッと思い至る。
　──ああ、そうか。
　──これって、リチャードの生きてた時代……なのかな？
　だとするならば、リチャード達の奇妙な物言いも理解できる。
　そして、やはり自分が見ているのがただの夢なのだとアヤカは考えた。
　──本当に変な夢だ。
　──みんな日本語で喋しやべってるし。
　もしも本当にここが過去の世界ならば、決してありえないものが目の前にあるからだ。
　本体をスチームパンク的な歯車やゴシックめいた雰囲気の鉄棘などでゴテゴテに飾り付けた、とにかく派手で歪いびつなフォルムの『それ』が、リチャード達の前に鎮座している。
　アヤカは、それを何と呼ぶか知っていた。

　──自動車。
　──……いや、改造車かな。

　アクション映画にでも出て来そうなその自動車を前に、アヤカは『こんな夢を見る私はどういう精神状態なんだろう』と考える。
　──まあ、砂漠を越えてスノーフィールドに来た瞬間に、騎士だの王様だのってのに巻き込まれたから、色々な時代がごっちゃになってるのかな……。
　そう考えるアヤカの視界の中で、状況が動き始める。
　ガン、ガン、と、何度も自動車の扉の内側から打撃音が響き始め、周囲の騎士達が剣を抜いて警戒し、その周囲を取り囲んだ。
　次の瞬間、立て付けが悪かったと思おぼしきドアが勢い良く蹴り破

られ──内側から、一人の男がその姿を現す。
　すると、その『自動車』の窓が次々と開き、中から様々な『楽器のような物』が現れ、ペコポコと歪いびつな音楽を奏で騒いだ。
　そして、騒音めいた音を背景に陽気な声が響き渡る。
「やあやあ！　アキテーヌの若き世話人殿と面白愉快な仲間達諸君！　元気かな？　私は元気だが降参だ、お手上げという奴やつだよ。だからここは一つ、その剣を鞘さやに収めてはくれないか？」
　飄ひよう々ひようとした口調でそう語りつつ、両手を上げながら出て来たその男は──乗っていた自動車に負けず劣らず、あるいはそれ以上に奇妙な出いで立たちの男だった。
　王族というよりも道化を思わせるような配色の派手な貴族服を身に纏まとい、頭の上には奇妙な帽子。どういう仕組みなのか、手にしたステッキの装飾品である歯車が歪ゆがんだ音を立てて動いている。
　アヤカはその男を見て、『ああ、やはりこれは夢なのだ』と確信した。
　これまでの視界に映る景色は確かに統一された世界観に思え、それこそ騎士達が馬上で戦っていた時代の風景を見ているのではないかと考えたが、唐突に現れた男がその世界観を一瞬で台無しにした事が理不尽とすら感じたのである。
　その奇妙な男は、尚なおも剣を下ろさない者達に言葉を続けた。
「おやおや、君達は愛と平和という単語を知らないのかな？　両手を上げるのは降参の印だよ。……というのはこの時代の文化ではどうだったかな。なんなら白い旗を掲げてもいいが、まあいいさ。とにかく私は丸腰だ。敵意はない。寧むしろ私が仕込んだ罠わなをなんの疑いもなく受け入れ、わざわざこの平原くんだりまでやってきた君達に敬意を表している！」
「罠わなだと！」
「あ、しまった。酒場の酔いどれ詩人が私の仕込みだという事を自らバラしてしまったが、まあ何も問題はないな。何しろ君達は実際ここに現れたのだから計画は成功だ！　やったな！」

男の言葉に、騎士達は剣を握り直し、徐々に包囲を狭めていく。
しかし、道化じみた男は肩を竦すくめ、ステッキでポンポンと己おのれの肩を叩たたきながら言った。
「まあ待ちたまえ、もう少し心を広く持とうじゃないか。かのアレキサンダー三世は、私のように未知で奇抜で頓狂な存在が目の前に現れた時、まずは状況を楽しんだぞ？」
「ええい、わけのわからん事を！」
『待て』
いきり立つ騎士達を、アヤカの視界の中に映るリチャードの腕が止める。
『……アレキサンダー大王がどうしたって？』
「おい、リチャード！　こんな怪しい奴やつの話を聞く事は……」
止めようとする仲間を手で制しながら、リチャードは奇抜な男に語りかけた。
『俺が敬愛している騎士王じゃないが、かの偉大なる征服王の名を出されて比較しようというのなら、例え如何いかなる与太話だろうと耳を傾けざるをえない。そうだろ？』
そしてリチャードは、奇妙な男の前で腕を組み、堂々とした調子で語りかける。
『話を続けてくれ。まず、あんたは一体何者なんだ？』
すると、謎の男は楽しげに口を歪ゆがませ、改造自動車の上によじ登り──こちらを見下ろす形で朗々と自らの名を唱うたいあげた。
「よくぞ聞いてくれた！　私の名はサン・ジェルマン！　サン・ジェルマンだ！　サンで区切ってくれても構わないが、気軽に繋つなげてサンジェルマンと呼んでくれたまえ。そう、サンジェルマンだ！　サンジェルマンという名の享楽主義者が今、未来の偉大なる王の前に現れた！　これは記念すべき事だよ？　私にとってだがね！」
「貴様！　リチャードが王族と知ってこちらを見下ろす場に立つか！」
リチャードの仲間の一部がそう言うが、激げき昂こうという程では

ない。
　おそらく、リチャードが身分の上下差をあまり気にしないという事を彼らも理解しているのだろう。
　──まあ、周りの騎士達もタメ口だったしね……。
　そんな事を考えるアヤカの耳に、車の上に立って演説する男を見上げているリチャードの呟つぶやきが漏れ聞こえる。
『ほう……あれは中々絵になる姿だな』
　□□……。
　パトカーの上に乗って演説を始めたリチャードの姿を思い出し、アヤカは『あの素っ頓狂な行為の印象が強くてこのような夢を見ているのだろう』と納得した。
　だが、そんな納得をした所で夢は醒さめず、リチャードの声がハッキリと鼓膜に響き渡る。
『それで？　サンジェルマンは俺にとってどんな存在なんだ？』
　すると、再び「よくぞ聞いてくれた！」と叫び、サンジェルマンと名乗った男は仰々しいポーズをとって口を開いた。
「私は過去の英えい雄ゆう譚たんをなぞろうとする君の道みち標しるべであり、破滅を匂わせる警告者であり、終わりを告げる予言者であり、時には希望の枝を咥くわえた鳩はととなる事もあるだろう。それが君にとってのサンジェルマンという男の役割だ」
『欲張りすぎだな。要は宮きゅう廷てい魔ま術じゅつ師しという奴やつか？』
「残念ながら、私は魔ま術じゅつ師しではない。妖精でも夢む魔までも吸血種でも時間逆行者でもなければ、世界を渡る魔ま法ほう使つかいというわけでもない。たかが貴族に過ぎず、ただの詐欺師だ」
　サンジェルマンと名乗った男は、ステッキを華麗に回しながら言葉を続ける。
「だから私の名前など覚える必要はないし、すぐに忘れて貰もらって構わない。もう一度自己紹介しておこう。サンジェルマンだ。名前は忘れてくれていい、サンジェルマン……そう！　サンジェルマン

だ！　サンジェルマン……名前は重要ではない、それがサンジェルマンという男だ。サン？　オア、ジェルマン？」
「おい、とっとと黙らせようぜリチャード」
　再び剣を構える仲間達を余所よそに、リチャードは動かない。
『待て。詐欺師なら、俺をどう騙だますのか聞いてみたい』
　アヤカはなんとなく理解した。
　自分から見る事はできないが、リチャードは今、子供のように目を輝かせているのだろうと。
「ハハ、君を騙だますのは私じゃあない。これから君が足を踏み入れる世界……アーサー王を生み出した神秘の数々を前に、君自身が君を騙だまそうとするだろう。私はその壮大なペテンを手助けするだけだ。まあ、何はともあれ宜よろしくという話さ。君が伝説の中に足を踏み入れる、この記念すべき瞬間に乾杯だ」
　サンジェルマンは自動車の上から降りて恭うやうやしく跪ひざまずき、リチャードの顔を下からジットリと睨ねめあげる。
　目が合ったアヤカが何か考えるよりも先に──サンジェルマンの口が動く。

「瞳の奥の君も、末永く宜しく」

　ゾクリ、とアヤカの背が震えた。
　本能が、理解した。
　今のこの男の言葉が、リチャードではなく、視点を重ねているアヤカ自身に向けられたものであると。
　そして、それを証明するかのように、サンジェルマンはアヤカ以外には意味が通じぬであろう言葉を吐き出した。

「恐らくは遠い未来から覗のぞき見みしている、人生の迷い子よ」

×　×

そこで、アヤカは目を醒さます。
　灰色の天井が目に映り、アヤカは自分がベッドの上に横たわっている事に気が付いた。
　背中と手の平にうっすらと汗を掻いており、心臓の鼓動が早くなっているのを感じる。
「お。起きたのかアヤカ。眼鏡をかけたまま寝るなんて、よっぽど疲れてたんだな君は」
　聞き慣れた声に目を向けると、ベッドの横の椅子に腰をかけて本を読んでいるセイバーの姿が目に映った。
　彼の前の机には、横にある棚から抜き出したと思おぼしき様々な本が置かれている。
　現在手にしていたのは『The Life and Death of King Johnジヨン王の生と死』というタイトルの本だが、アヤカはさして気にせず不機嫌そうな顔で言った。
「昨日は誰かさんに散々振り回されたからね」
「憎まれ口が叩たたけるまで回復したなら安心だな！　でも、念の為ためにもう少し休むといい。まだ夜明け前だしな」
「……ありがとう。あと、ごめん。愚痴を言うつもりはなかった」
　色々と助けてくれた相手に対して皮肉を言ってしまった自分に嫌気が差すアヤカに、セイバーはカラリとした笑顔で答える。
「謝る事はないぞ？　振り回したのは事実なんだし、これからも振り回すかもしれない。それに、寝起きは機嫌が悪い子の方が可か愛わいいもんさ」
「……前向きだね」
　そこでアヤカは、今しがた見ていた『夢』を思い出した。
　夢にしては、随分とハッキリと記憶している。
　──本当に、ただの夢？
　違う、と彼女の本能は告げるが、それを確認するのも恐ろしい気がした。

「しかしまあ、この屋や敷しきは本が山ほどあるな。地下は魔ま術じゅつ書しよめいたのばかりだが、二階には歴史書や小説が山ほどある。英えい雄ゆう譚たんも多くて退屈しないぞ」
　一晩中本を読んでいたのだろうか、やや興奮したように目を輝かせているセイバーを見て、アヤカは思わず口を開く。
「あのさ」
「ん？　どうした？」
　──サンジェルマンって知ってる？
　そう尋ねかけたアヤカだが、直前で身体からだを強こわばらせた。
　夢の最後に見たあの奇妙な男の瞳を思い出し、ここで直接名前を出す事に怖おそれを感じてしまったのである。
　そこで、代わりに夢に出て来た別の固有名詞を口にした。
　アヤカが知らない人物名だったし、それをセイバーが知っているかどうかで、あれがただの夢なのかどうかハッキリすると考えたのである。
「ねえ……クレティ……アンだったかな……。そういう名前の人は知ってる？」
「クレティアン・ド・トロワ先生か？　懐なつかしいな、マリー姉さんの城で雇われてた宮廷の吟遊詩人だ。聖せい杯はい伝でん説せつを嫌という程聞かされたよ。……悪い。嘘うそをついたつもりはないが、間違った事を言った。俺は彼に何百回も聖せい杯はい探たん索さくの歌をせがんだが、別に嫌にはならなかった」
「それは……相手の方が嫌だっただろうね……」
　すんなりと話が通じてしまった事への驚きよりも先に、いつも通りのセイバーに対して呆あきれ半分の感想を口にした。
「でも、よくクレティアン先生を知ってたな？　あ、もしかしてアヤカも円えん卓たくの騎士達のファンなのか？　いいよな、円えん卓たくの騎士！　クレティアン先生は騎士としてはともかく人としての歪ゆがみがどうこう言ってたけど、それも含めて、円えん卓たくは最高の騎士団だ！」

単語に関してはかすかな記憶にはあるものの、円えん卓たくの騎士については全く詳しくない。
だが、目の前のセイバーが楽しげに語るのを見る限り、実際に凄すごい英雄達なのだろうとアヤカはすんなり受け入れた。
そして、それを契機として、アヤカは冷静に思考を巡らせる。
──つまり、さっきのはただの夢じゃなかった……って事だよね。
確かに、今思えばあの感覚は夢というよりも、誰かの視点で紡つむがれる映画のワンシーンを見せられているかのようだった。
だとするならば、何かの魔ま術じゆつ的てきな働きがあったのだろうか？
それを確認するために、彼女は今しがた見た『夢』の話をセイバーに相談しようと考えたのだが──
タイミング悪く、そこで部屋の扉からノックの音が響き渡る。
それを聞いたセイバーが、本を閉じると同時にアヤカに問い掛けた。
「アヤカ、入れても大丈夫か？」
「……セイバーの判断に任せるよ、私はそれを信じるしかないし」
ドアの外を警戒しつつ、セイバーに委ねるアヤカ。
セイバーはそんな彼女の顔をマジマジと観察して頷うなずいた。
「見たところ、寝癖も目ヤニも無いし服の着崩れも無さそうだ。よし、大丈夫だな！」
「え？　あ……うん、大丈夫……だと思う」
「そうか。おーい、入っていいぞ」
セイバーが扉の外にそう呼び掛けると、ドアノブが回転し、古風なデザインの扉がゆっくりと押し開かれた。
「……少しは、眠れた？」
そこに立っていたのは、まだ少年と呼んでもよい顔立ちをしている青年だ。
首から下には黒を基調とした特殊部隊の制服のようなものを纏まとっており、幼い顔立ちとのギャップが見る者を困惑させる。

アヤカはそんな青年を見て、相手の名前を告げながら問い掛けた。
「ええと……シグマ君……だったっけ？」
彼のホルスターに下げられた銃器やナイフを警戒しつつ尋ねると、青年はその質問に直接答える代わりに、淡々と一つの事実を口にする。

「この屋や敷しき……もう、囲まれてるよ」

× ×

同時刻　安モーテル内

車通りの少ない道に作られた一軒のモーテル。
遠目に中心街の高層ビル群が見られるが、この周囲にはモーテル以外の建物らしい建物は疎まばらであり、放置された資材置き場などが散見されるような場所だ。
だが、それを踏まえても──更には夜明け前という時間を考慮したとしても、あまりにも人や車の姿が見受けられない。
まるでそこだけ時間が止まったかのような静寂の空間の中、闇から染しみ出だすように複数の人影が現れた。
このような場所には似付かわしくない、地味なスーツを纏まとった九人の男女。
そのうちの一人が、集団の中央にいた男に対して報告する。
「術式確認終了しました。周囲に結界は存在せず、魔ま術じゆつ行こう使しの痕跡なし、魔ま力りよくの乱れた様子もありません」
「……本当に、ここなのか？」
リーダー格と思おぼしき男は、部下の報告に訝いぶかしんだ。
事前の情報が正しいならば、ここを拠点としているのは『時と計けい塔とう』の魔ま窟くつと言われる現げん代だい魔ま術じゆつ科か──通称『エルメロイ教室』に所属する魔ま術じゆつ師しである。

聖せい杯はい戦せん争そうのマスターに選ばれた程の人物が、結界一つ張らずにのうのうとしている事などありえるだろうか？
相手は魔ま術じゆつ師しの暗示でスパイに仕立て上げられた哀れな一般人などではなく、魔ま術じゆつ師しそのものである筈はずだ。
戦闘部隊として長年の経験を得たリーダー格の男は、何かの罠わなである可能性を考慮し、慎重に作戦を練り直す。
自分達『ツークツワンク』の名の下に、完かん璧ぺきなる結果をもたらすために。

ツークツワンクは、東欧のエインスカヤ家が生み出した魔ま術じゆつ集しゆう団だんである。
元々はユグドミレニアというルーマニアを拠点としていた門閥の配下であり、数百年に渡ってその君主たる一族の周囲を嗅ぎ回る害虫を始末する早期処理部隊としての任務を請け負ってきた。
だが、半世紀以上前にそのユグドミレニアの力が衰退し、門閥が解体された現在、ツークツワンクはフリーの魔ま術じゆつ集しゆう団だんとして様々な後ろ暗い仕事を請け負う組織へと変化している。
魔ま術じゆつ師しとしての腕はそこそこだが、その無駄もなければ容赦もない仕事ぶりが評価され、魔ま術じゆつ師しの一派や魔ま術じゆつせせ界かいの事を知らない政治家、財界人に至るまで、様々な依頼を受ける事でかろうじて糊こ口こうを凌しのいでいた。
そう、かろうじて、だ。
始末屋としての報酬は高いのだが、彼らも魔ま術じゆつ師しであり、生半可な報酬では贅ぜい沢たくができよう筈はずもない。
そんな彼らに訪れた好機。
これまでの仕事とは桁違いの報酬を示され、魔ま術じゆつ師しとしても非常に興味深い仕事の依頼が舞い込んだのである。
『マスターの権限を奪い取り、スノーフィールドの聖せい杯はい戦せん争そうに参加せよ』
最初は訝いぶかしんでいたツークツワンクだったが、依頼主である

金満家の魔ま術じゆつ師しから見せられた使つかい魔まのヴィジョン──二柱の英えい霊れいの戦いと、その結果生まれた巨大なクレーターを見ては信じざるを得なかった。
　この土地で、魔ま術じゆつ世せ界かいを揺るがしかねない大きなうねりが巻き起こっているのだと。
　危険ではあるが、好機でもある。
　そこで彼らは一日で町に情報網を張り巡らせ、ついに一人のマスターの潜伏先に辿たどり着ついたのである。

　彼らは知らなかった。
　自分達の能力で掴つかんだと思えたそのマスターの情報は、一足先に情報を掴つかんだファルデウスという男によって意図的にリークされたものであると。
　黒幕側の人間達によって、対象のマスター、フラット・エスカルドスの力量を量るために押し当てられた嚙かませ犬いぬ。
　それが自分達であるという事も気付かぬまま、『ツークツワンク』は今、静かに地獄へと足を踏み入れようとしていた。

「……まずは対象の正確な位置を確認する。ポーン１から３はモーテル二階を、ポーン４から６は一階を当たれ。ポーン７と８は俺とモーテルの管理人室を押さえる。管理人は暗示で情報を聞き出した後に始末する。目撃者も同様だ」
　魔ま術じゆつ師し達が一族で受け継ぐ魔ま術じゆつ刻こく印いん。
　彼らはそれを敢あえて分割し、半分は『王キング』と呼ばれるリーダーが、残り半分は『兵士』と呼ばれる部下達が更に八つに分ける形で身体からだの中に埋め込んでいる。
　通常ならばそこまで分割された魔ま術じゆつ刻こく印いんなど、ほんの僅かな魔ま力りよく強きよう化かの効果を与えるに過ぎないのだが──『王キング』を起点として全員の刻印を同調させ、『兵士』達から魔ま術じゆつ回かい路ろの汎用性と寿命そのものを大幅に削る事を

代償に、彼らの能力を強制的に『王キング』と同じ位階に引き上げるという特殊な魔ま術じゆつだった。
　正にそれを起動すべく、『王キング』の男は自らの腕に焼き付けられた魔ま術じゆつ刻こく印いんを出そうとして──『それ』を見た。

「腕の魔ま術じゆつ刻こく印いんを出せ。いつも通り、俺の位階にまでお前達を引き上げる」

　自分と全く同じ顔をした男が、自分がいつも言っている台詞を吐き出して集団の中心にいるという光景を。
「なッ……!?」
　声をあげるが、『兵士』達はだれもこちらに目を向けない。
　何か魔ま術じゆつ的てきな妨害をされているのか、こちらの存在に気付いてすらいないようだ。
　自分が幽体離脱でもしたとしか思えぬ光景の中、自分と同じ顔をした男は、自分と寸分違たがわぬ動作で兵士達と腕を重ね合わせ──
　──まずい。
　──やめろ、お前達！　そいつと腕を重ねるな！
『王キング』が僅かな魔ま力りよくの流れに気付いたが、警告の叫びは間に合わなかった。
　いや、果たして叫び声を上げていた所で、自分の声は『兵士』達に伝わっていただろうか？
　そんな疑問が瞬時に思い浮かぶ中──自分と同じ顔の男は、その言葉を口にする。

「３、２、１──集約開始」

「がッ……」「きゃぁッ!?」「うぐッ……」
　刹せつ那な、彼と腕を重ねていた八人の『兵士』達は雷に打たれたかのように全身を痙けい攣れんさせ、そのまま白しろ目めを剝むいて

モーテルの入口前に倒たおれ臥ふした。
　全員が同調させるタイミングで、本物の『王キング』の魔ま術じゆつ刻こく印いんからの波長を装よそおい、強力な呪のろいを直接身体からだの内部に撃ち込まれた。『王キング』はそう判断し、瞬時に自分達が窮地に陥った事を理解する。
　だが、その時には既に遅く、自分の顔をした男はその姿を消していた。
　そして、自分の後頭部に誰かの指が当たる感覚を覚え──気付けば、彼もまた地面へと倒たおれ臥ふしてしまっていたのである。
　ツークツワンクのリーダーである『王キング』は意識こそ失わなかったが、朦もう朧ろうとした感覚の中、自分が敗北しつつあるという事を理解するのに数秒かかった。
　冷たいアスファルトに押しつけられた右耳が冷え、空を向いた反対側の耳には淡々とした男の声が聞こえてくる。
「なるほど、君は面白い魔ま術じゆつを使うのだな。まさか魔ま術じゆつ刻こく印いんを割譲し、自ら群体の王になるとは。これも一つの奇縁と言うべきか……」
　すると、奇妙な事を呟つぶやく男の背後から、張り詰めた空気を緩ませる暢のん気きな声が木こ魂だました。
「大丈夫でした？　うわあ、本当にソックリになれるんですね」
「記憶まで完全にコピーするのは難しいが、表層的なものや長年染しみついたルーティンワークぐらいなら読み取れる。この程度の魔ま術じゆつ師しであれば、技術は１００％再現できるがな」
「ジャ……バーサーカーさん、本人の前で『この程度』なんて失礼ですよ」
「む……すまんな。この男の性格はやや傲慢らしい。というか今、真しん名めいを言いかけなかったか？」
　バーサーカー。
　少年と言っても良い年頃の青年が紡つむいだその単語を聞いて、暗殺者魔術師は理解する。

どうやらそれが、自分達『ツークツワンク』を一網打尽にした存在であり、聖せい杯はい戦せん争そうという儀式において『英えい霊れい』と呼ばれる存在であると。
そして、この少年が恐らくは対象である魔術師、フラット・エスカルドスなのだろうと『王キング』は判断した。
──完敗だ。
──これが、英えい霊れいというものか。状況を開始する事すら許されないとは。
同時に、自分の命運もここに尽きたのだと悟る。
ここから逆転の目は何かあるだろうか。魔ま術じゆつ師しとして、あるいは数々の仕事を熟こなしてきた暗殺者として様々な手段を考慮するが、呪のろいに全身を蝕むしばまれ、命乞いの声すら上げられない現在の状況では何もできない事は明白だ。
好機があるとすれば、自分に対して雇い主などについて尋問する時だろう。だが、『兵士』を失った状態で、この英えい霊れいを従えた魔ま術じゆつ師し相手に何ができるというのだろうか？
──なるほど、聖せい杯はい戦せん争そうか……。ここまでの大だい魔ま術じゆつの糧かてとなるならば、魔ま術じゆつ師しとして良しとすべきかもしれんな。
自決すらできない状況の中、できる限り苦しまずに死ねる事を祈っていた『王キング』だったが──次の瞬間、妙にのんびりとした会話を聞く事となる。
「それで、どうするのだマスター？」
「ええ、とりあえず縄で縛って、追加で借りたモーテルの部屋に投げ込んでおきましょう。それにしてもこれで九人追加かぁ……もう一部屋借りた方がいいですかね？」
「詰め込めば充分だろう。運ぶから暫しばし待ちたまえ」
「大丈夫ですよ、人払いの結界は、この人達が張ったのをそのまま補強して使いますから」
世間話のような調子で話すマスターとサーヴァント。

『王キング』はわけもわからぬまま、なんとか動く眼球を必死に上に向けると──そこには、まだ年若い金髪の青年の姿と、自分と同じ姿をした男がいた。
　だが、自分の顔をした男の姿が掻かき消えたかと思うと、次の瞬間、そこには身長２メートルを超す筋肉質な巨漢が現れる。
　そして『兵士』達を八人纏まとめて担かつぎ上あげた巨漢の手が自分にも伸ばされ、そのまま部下達と十じつ把ぱ一ひと絡からげで運搬される結果となった。

　数分後。
　モーテルの一室に押し込められた『ツークツワンク』の『王キング』だが、彼はそこで『兵士』達が一人も死んでいない事を確認した。
　──……？　兵士を生かす理由とはなんだ？
　──拷問して情報を引き出すならば、数人残せば充分だろう。
　──ま、まさか、スクラディオ・ファミリーがやっているという『人体の魔ま術じゆつ結けつ晶しよう化か』を？
　噂うわさに聞いた非人道的な魔術機構システムを思い出し、『王キング』は冷や汗を滲にじませる。
　見ると、自分達の他にも数名の魔ま術じゆつ師し達が部屋の中に転がされていた。
　彼らも自分と同じような諜ちよう報ほうや暗殺を主とした魔ま術じゆつ師しだろうと考えていると、金髪の少年がパンパンと手を叩たたく音が聞こえてくる。

「はい！　えーと、皆さん、手荒な真似まねしてすいませんでした！　なんだか皆さん殺気だってたので、とりあえずバーサーカーさんに捕まえて貰もらいました！　もしもただの通りすがりの魔ま術じゆつ師しさんとかだったら、その、ゴメンなさい！」
「……」

魔ま術じゆつ師し達が訝いぶかしげにこちらを見るのを見て、フラット・エスカルドスは困ったように横にいた大男へと声を掛ける。
「どうしましょうバーサーカーさん。みんな警戒してるみたいですよ。何か警戒を解くような人に変身して下さいよ。子供とかピエロとか……」
「ふむ……」
　そう呟つぶやいた大男──バーサーカージヤツク・ザ・リツパーの姿が掻かき消きえ、その場に幼い少女の姿が現れた。
「わわッ！　だから！　なんで子供になるとそんな水着みたいになるんですか！」
　慌てて手近にあったベッドのシーツを被かぶせるフラットに、少女の姿をしたバーサーカーが答える。
「やっぱり何度やってもこうなる。この子だと、なんだか安心するの。でも、なんだか色々解体したくなっちゃうから、まずいとおもう」
「欠片かけらも安心できないじゃないですか！　解体したり警察に見られる前に早く戻って下さい！　ほら！　なんかみんな変な目で見てますし！」
　見ると、魔ま術じゆつ的てきな封印処理を施したガムテープで縛られた魔ま術じゆつ師し達は、少女の姿を取ったバーサーカーを見てカタカタと震えている。本人達も意味が解わからぬまま、何か本能的、根源的な恐怖に震えているかのようだった。
「むー」
　そんな子供らしい唸うなり声ごえを上げた後、バーサーカーは再び姿を消し、続いて如何いかにも英国貴族といった面持ちの青年が現れた。
（これでどうかね。当時の英国貴族に連なる者だ。ふむ。これもまた先刻の少女の姿と同じように安心できる。あるいは私の正体の有力な説の一つなのかもしれんな。ふむ、こちらは解体したいというよりも魂そのものを穢けがしたいという欲求があるようだ）

念話で話しかけてくるバーサーカーに、フラットはなるほど、と頷うなずきながら念話を返した。
（もしかしたら、ジャックさんの正体の有力な説とかに変身すると安定するのかもしれませんね。でも、そういう欲求に引っ張られないようにして下さいよ？）
（そこまで理性が失われれば、恐らく霊基そのものが変わり、私はバーサーカーではなくなるだろう。もしもそうなった時は、令れい呪じゆを使って私を自害させるんだ。いいね）
（ジャックさん……）
（これは私からのささやかな頼みだ、マスター。中ちゆう途と半はん端ぱな形で私の正体を決めつけられたくは無いのだよ）
　そんな念話を交わした後、フラットはその願いを了承も拒絶もせず、話を逸そらすかのように魔ま術じゆつ師し達へと語りかけた。
「ええと、御紹介しておきますね。そのシャワーの前に転がっているのが、レクサームさん。冷蔵庫の前にいるのがコッチェフさん。ソファの前がディケイルさん。隅にいる黒髪を金髪に染めた人がサガラさん。それで今、九人纏まとめて来てくれたのが……ええと？」
　フラットがバーサーカーに尋ねると、彼は読み取った表層の記憶から答える。
「ツークツワンク。彼らは九人で一つの塊だ。そう呼ぶといい」
「はい！　じゃあ、ツークツワンクさんですね！　ええと、俺達はもうこのモーテルを離れますけど、皆さんの封印は今日の夕方ぐらいに一斉に解けるようにしておきます。その途端に殺し合いとかされても困るんで、魔ま術じゆつ回かい路ろはあと三日ぐらい封じておきますね」
　魔ま術じゆつ回かい路ろを封じる。
　物もの凄すごく軽い調子で紡つむいだその言葉に、意識のある魔ま術じゆつ師し達が眉を顰しかめた。
　同時に、自分達を殺そうとしない少年の態度に対しても。
「ふむ。マスターよ。それではツークツワンクが九人いるから有利で

はないか？」
「あ、そうか。じゃあ、他の四人は俺達が元から使ってた部屋の方に入れて、30秒早く解けるようにしておきますね。30秒差があれば、まあ、逃げるなりなんなりできると思いますし」
　朗らかな調子で言うフラットの声を聞き、眉を顰しかめていた魔ま術じゆつ師しの何人かは、寧むしろ腹を立てているかのようだった。
　魔ま術じゆつ師しとしての覚悟が何一つできていないような存在が、英えい霊れいという武器を身につけただけであっさりと自分達を無力化したという現実に。
　しかし、その感情は、すぐに反転する事となる。
　フラットを睨にらみ付つける魔ま術じゆつ師し達を見たバーサーカーが、顎をさすりながらマスターに問い掛けた。
「マスターよ。本当に彼らを始末しなくて良いのかね？」
「そんなに殺したいんですか？」
「いや……確かに彼らとは殺し合う運命……寧むしろ既に過去に幾度も殺してきたかのような感覚もあるが、恐らくは異なる位相の世界での話か、世界の揺らぎの一種だろう。私はマスターに従うまでだが、殺さない理由も無いのではないかね？」
「殺しませんよ。ジャックさん。人の命は地球より重いんですよ？」
　魔ま術じゆつ師しからすれば呆あきれるような言葉が吐き出され、それを聞いた虜囚達は怒りに身を震わせかけたのだが──
　次の言葉が、きっかけだった。
　これまでフラットの魔ま術じゆつ的てき才さい能のうは認めつつも、『魔ま術じゆつ師しの気質のない魔ま力りよく回かい路ろだけのボンボン』『人としての甘さすら消せない欠けつ陥かん魔ま術じゆつ師し』と考えていた者達が、一斉にその考えを改めたのは、彼の発した言葉と、その瞬間の彼の瞳の色だった。
「人の命は、この人達も含めて地球を飛び越えるための大事な部品パーツなんです」
　目。

そう言った時のフラットの目は、魔ま術じゆつ師しの目でも、ただの人間の目でもなかった。
何かがぽっかりと抜け落ちたような、あるいは全ての者を見通しているかのような、満たされた虚ろ。
そんな今までに感じた事のない気配を感じ取り、魔ま術じゆつ師し達は一斉に理解したのである。
目の前に立つこの少年は、魔ま術じゆつ師しではない。
だが、魔ま物ものや人形の類たぐいかというとそうではなく、身体からだも心も確かに人間そのものだ。
しかし、見ている『先』が違うと魔ま術じゆつ師し達の本能が告げる。
このフラット・エスカルドスという男が何を見ているのか、彼らはついぞ理解する事ができなかったのだ。
バーサーカーもそれはここ数日の付き合いで感じてはいたのだが、敢あえて口には出さない。
彼が善なる者か悪あしき者か、そうした範はん疇ちゆうで語れる存在ではないと感じ取っていたからだ。
それを証明するかのように、悪意や善意が欠片かけらもない調子で、フラットは言葉の続きを口にする。

「簡単に殺しちゃったりしたら、可哀相だし勿体ないじゃないですか」

怖おそれに強こわばる魔ま術じゆつ師し達の前で、やはりバーサーカーだけが気付く。
そう呟つぶやいたフラットの顔に、一抹の寂しさのようなものが浮かんでいたという事に。

――――――ジャックが宝具を――るまで、残り20時間。

×　　　　×

同時刻　スノーフィールド都市部　裏路地

「人間って、今は随分と命を粗末にしてるのね。なんだか可哀かわい相そう」
　高層ビル街からやや離れた所にある、夜明け前の路地裏。
　人通りはそれなりにあるが、決して治安が良いとは言えない雰囲気の裏通りの中で、周囲を見ながらフィリア──正確には、フィリアの身体からだに取とり憑ついた『何か』がそう呟つぶやいた。
「……粗末、ですか」
　それに答えたのは、フィリアの背後について歩く、気の弱そうな女性の魔ま術じゆつ師しだった。
　恐る恐るといった調子の彼女に対し、フィリアは軽く肩を竦すくめて言葉を続ける。
「そ。粗末にしてるっていうか生き急いでるっていうか。刹那せつなの快楽に浸るのはいいんだけれど、だったらその一瞬をどうして色濃く楽しまないのかしら？」
　フィリアの視線の先にあるのは、泥でい酔すいして暴れる男達や、裏路地に似合うような厳いかついチンピラの面々だ。
「あの子は変な薬草の煙を身体からだに入れてるし、あっちの子達からは下品な返り血の臭いがするし、頽たい廃はいに酔って命を散らすのは構わないけど、どうせならもっと綺き麗れいに散ればいいのに」
　そんな事を口にするフィリアは、この路地裏の中では相当に目立つ格好をしている。
　透き通るような白銀の髪を靡なびかせ、雪のように白い肌の中で赤い瞳が爛らん々らんと輝いていた。
　まるで人工物であるかのように整い過ぎた顔立ちだが、今、彼女の身体からだを動かしているものの影響だろうか、その顔は生き生きとした感情によって人間らしく彩いろどられている。

「よう、姉ちゃん達、こんな時間にこんな所に来るたあアバボボアァアァボボボ」
「邪じや魔まよ、汚い言葉は耳に入らなかったから許してあげる。だから失うせるか死になさい？」
　先刻から何度もチンピラ風の男達に声をかけられるのだが、彼女が視線を向けただけで泡を吹いて倒れていった。
　後ろを歩いていた魔ま術じゆつ師しの少女は、彼らが倒れた理由を知っている。
　フィリアの纏まとう余りにも濃密な魔ま力りよくが、魔ま力りよく回かい路ろを持たない一般人にも感じられるレベルで集束し、チンピラ達の脳を直接揺さぶったのだ。
　──体内魔力オド？　それとも体外魔力マナ？　小源や大源といった概念とは違う理ことわり……？
　相手の周囲に渦巻く魔ま力りよくの奔流を感じ、魔ま術じゆつ師しの少女は恐怖に囚とらわれる。
　凄すさまじい量の魔ま力りよくを纏まとっているのは感じられるのだが、真まことに恐ろしいのは、それが彼女を中心とした半径３メートル程度で留まっており、半円状に魔ま力りよくのドームを形成していたことだ。
　更に言うならば、そのドームの外には魔ま力りよくが一切漏れ出しておらず、フィリアを核とした一つの星のミニチュアであるかのように魔ま術じゆつ的てきなエネルギーが循環しているのが解わかる。
　目の前の存在は、魔ま術じゆつ師しではない。
　アインツベルンのホムンクルス、フィリア。その情報は事前に聞いていたものの、今の彼女はその外観だけを保った、ホムンクルスとも魔ま術じゆつ師しとも、あるいは通常の英えい霊れいとも違う存在だ。
　完全なる未知を前にして怯おびえる魔ま術じゆつ師しの少女に対し、フィリアの姿をした何かは言う。
「貴女あなたもよ、ハルリ。自己犠牲の魔ま術じゆつなんて私の時代

じゃ珍しくもなかったけど、せめて楽しそうに自分を犠牲にしなさいよ。見てて痛々しいじゃない」
　そんなフィリアの言葉に、魔ま術じゆつ師しの少女──ハルリは自分の内面を見抜かれたと感じてビクリと身体からだを震わせた。

　ハルリ・ボルザーク。
　時と計けい塔とうに所属していないはぐれの魔ま術じゆつ師しだが、黒魔術ウイッチクラフトの腕は一流であり、ある目的を持ってアメリカ合衆国に対して魔ま術じゆつ的てきにアプローチを行っていた所をフランチェスカに拾われた少女である。
　彼女は犠牲を求める黒くろ魔ま術じゆつにおいて、常に生いけ贄にえとして自分の血肉のみを捧ささげ、更には呪殺を一切行わない代わりに『呪殺返し』を最も得意とするという異端児だが、魔ま術じゆつ師しとしての腕はかなり高い部類に属すると言えた。
　しかし、彼女は優秀な魔ま術じゆつ師しであり魔ま術じゆつを使う事を誇りとしてはいたが、とある事情により『魔ま術じゆつ世せ界かい』に対しては強い憎しみを持ち続けている。
　そんな魔ま術じゆつ世せ界かいを崩壊させるために、彼女はフランチェスカとの取引を受け入れた。
　仮に自らが聖せい杯はいを手にする事ができたならば、その力を利用して、魔ま術じゆつ世せ界かいが意図的に行っている隠いん蔽ぺいを全て無効化するつもりだったのである。
　一般世界に認識される事により神秘性が薄れ、魔ま術じゆつ師し達は『根源』から遙はるか遠のく筈はずだ。
　あるいは世界から魔ま術じゆつという概念が消える事すら願い、この聖せい杯はい戦せん争そうに挑んだのだが──召しよう喚かんしたバーサーカーによって瀕ひん死しの重傷を負わされ、そこをフィリアの身体からだに取とり憑ついた『何か』によって救われるという奇妙な運命を享受する形となって、こうして夜明け前の治安の悪い路地裏を歩かされている。

優秀な魔ま術じゆつ師しであれば暴漢の一人や二人は怖おそれるべくもなく、時と計けい塔とうの『典位』や『色位』を受けるような高位の魔ま術じゆつ師しの中で戦闘に特化した者ならば、暴徒集団や通常の軍の小隊程度をものともしない。戦闘技術を極きわめた極ごく一部の魔ま術じゆつ師しに至っては、搦からめ手ても含めれば小国の軍隊すら単騎で相手どる事が可能だとまで言われていた。

しかし、ハルリの場合は魔ま術じゆつ師しとして優秀ではあるものの、直接的な戦闘には全く向いていない。使つかい魔まを使役すれば百名程度の暴漢は追い払えるが、突然後ろからナイフなどで刺された場合は、魔ま術じゆつ刻こく印いんの回復機能を考慮しても、傷の位置によっては死を覚悟せざるをえない。

本来ならばそんな彼女にとっての盾となり矛にもなるのがサーヴァントというものなのだが、彼女の喚よび出だした英えい霊れいはバーサーカーゆえに正気を失っており、こちらの指示にどれだけ従うかは解わからなかった。

しかし、と、ハルリはフィリアに目を向ける。

あのホムンクルスに宿った『何か』は、そんなバーサーカーを軽く制御し、まるで子犬のように扱って見せた。

フィリアの仲介があって正式に契約が結べたものの、ハルリは喚よび出だしたバーサーカーが自分のサーヴァントであると考える事ができない。

視線を頭上に向けると、そこに『それ』はついてきていた。

機き械かい仕じ掛かけの蜘蛛くもと獅し子しが融合したような不気味な機械人形ロボットの英えい霊れいは、霊体化もせず、それこそ映画に出てくる巨きよ大だい蜘蛛ぐものようにビルの壁面を這はい回まわっている。

しかしながら魔ま力りよく的てきな物は感じられず、音がしている様子もなければビルの中にいる人々がパニックを起こしている様子もなかった。

訝いぶかしむハルリに、フィリアが胸を張りながら告げる。

「気配と姿は完全に遮断してるから大丈夫よ。私と貴女あなたにしか見えないようにしてるから安心なさい」
　気軽に言うが、それがどれほどの芸当なのか理解できるハルリは改めて目の前にいる存在に対して怖おそれを抱く。
　彼女と出会ってから、丸一日が経過した現在、ハルリは未いまだに相手の正体も目的も理解していなかった。
　バーサーカー召しよう喚かん時じに負った疵きずはフィリアの手で回復したものの、失われた礼装や損傷した魔ま力りよく回かい路ろの修復の為ため、そして何より周囲の情報を集める為ために自身の魔ま術じゆつ工こう房ぼう内に引きこもっていたのである。
　その最中にフィリアはどこかに姿を消してしまい、夜中になって戻って来たと思ったら『昨日は一日、物珍しくて色々な国を観察してきたけれど……派手になってる割にはなんだか退屈なのよねえ。まあ、私の時代と比べて褒めてあげられる所も多かったけど』とぼやきつつ、ハルリの手を取って無理矢理外へと連れだしたのだ。
　押しに弱い彼女は中々切り出せずにいたが、勇気をもって問い掛ける事にした。
「あの……どちらに向かっているんですか？」
「どこも何も、他のサーヴァント達の所に決まってるじゃない」
「え？」
　キョトンとするハルリ。
　そんな彼女を見て、フィリアは逆に不思議そうに首を傾かしげて言った。
「聖せい杯はい戦せん争そうやってるんでしょう？　貴女あなたが勝てるように少しは協力してあげようとしてるだけよ？　私の目的とも一致するしね」
「……もしかして、他のマスターの拠点に乗り込む気ですか？」
「ええ、この先よ。大きいだけで小汚い工房が並んでる所ね。本当はあんな煙臭い所に近づきたくはないんだけど」
　小さく溜ため息いきを吐いた後、フィリアに宿る『何か』は朝焼け

の滲にじむ空を見上げて独りごちる。

「私の庭が泥臭くなるのは我慢できないのよね。……すぐに洗い流さなきゃ」

×　　　　　　　　×

同時刻　警察署

　スノーフィールド警察のトップであるオーランド・リーヴは、サーヴァントであるキャスターとの感覚共有を切っている。
　サーヴァントに偵察業務などをさせる事は無いし、逆にこちらの情報を伝える必要も無いと感じているからだ。
　だからこそ、夢などの形でサーヴァントの精神世界や過去の記憶を見る事もないし、署長もまた、その必要はないと考えている。
　彼の呼び出した『偽りの側』のキャスター、アレクサンドル・デュマ・ペールは、現在は警察署からは離れた場所で宝具制作、あるいは改かい竄ざんの作業を行っている。
　感覚共有をしていないがゆえに、念話などは行わず、連絡は電話が基本となっていた。
　アサシンの襲撃から丸一日が経過した現在、ようやく署長を始めとする警察陣営は体制を立て直せるかという所に来ていたのだが、ここで新たな混乱が起こる。
　街の方に起こっている『動物の間の疫病』『突然街から出られないと言い出す精神病』といった混乱が耳に入り、聖せい杯はい戦せん争そうの黒幕として、同時に治安維持に努める警察としての両面で情報整理に追われる状況となっていた。
　そんな最中さなか、署長の携帯がデュマからの着信を告げる。
『よう兄弟！　すぐに出たな！　徹夜の真っ最中か？』
「まあな。君を喚よんでからまともに眠れた日がない」

『はッ！　イヤミを言う暇があんなら、ついでにイポリット・デュランも召喚よんでくれよ。いい仕事するぜ。俺んちを作った奴やつだからな！　……まあ、もう他人のもんだが、『シャトー・ド・モンテクリスト』って知ってるか？』
「当然だ。今では君を讃たたえるモニュメントだからな」
　イル・ド・フランス地方に建てられた、小振りな城を思わせる豪邸。最盛期のデュマが持てる財を尽くして建設した邸宅であり、セーヌ川のほとりに現れたその豪ごう奢しやな屋や敷しきは、最盛期のデュマの輝きを表す指標そのものであるとも言えた。
『ああ、調べてびっくりしたぜ。無一文になった時に売っぱらった俺んちが、巡り巡って俺の記念館になってこの時代にまで残ってるってんだからな！』
「時を超えた君の作品のファン達に感謝する事だな」
『まったくだ。愛人の肖像画まで飾られるたぁ思わなかったが、まあ、もう作品も家も愛人も俺の手から離れたもんだ。楽しめる奴やつが楽しんでくれりゃ作った甲斐かいがあるってもんさ』
「作品と家はともかく、現代の価値観では、愛人を作る事は感心しないがね」
　皮肉を籠こめた署長の言葉を受け流し、キャスターは話の続きを口にする。
『まあとにかくだ。あそこの離れに建てた執筆室……俺の周りの連中は『シャトー・ディフ』なんて呼んでたな。作家の缶詰部屋を監獄島扱いってのも酷ひでぇ話だが、そこだったら俺の作業効率もすげえ上がると思うんだよなあ』
「……流石さすがにフランスとこの街を往復して宝具の受け渡しをするわけにもいくまい？」
『まったく、俺が死んでから１３０年以上経たつってのに、一瞬で転移する機械の一つもできちゃいねえとは思わなかったぜ』
「ここととフランスの瞬間転移など、もはや魔ま術じゆつではなく魔ま法ほうに片足を掛けた範はん疇ちゆうだ」

そこまで言ってから、署長はふと考え、問い掛けた。
「……しかし、自宅に『シャトー・ド・モンテクリスト』と名付けるとは。余程あの作品に思い入れがあるのだな。それとも、それも周りが勝手に呼んだだけかね？」
『さあて、どうだったかな。誰かさんへの当てつけでそう呼ばせた気もするが、結局俺が生きてる間は文句言いに来なかったしな。まあそんな事はどうでもいいじゃねえか』
　珍しくストレートに話題を逸そらそうとしているデュマに対し、署長は呆あきれながらも応じることにした。息抜きの雑談にしては話が長すぎたと彼自身も反省していたのである。
「それで？　わざわざ電話してきた用件というのはなんだ？」
『おう、あの吸血種相手に宝具がぶっ壊れた奴やつが何人かいるだろ？　直す目め処どができてな』
「それは僥ぎよう倖こうだ。いつも通り、使いの者を……」
『ストップだ。使いは要らねえ。代わりに寄越して欲しい奴やつらがいる』
　デュマの提案に眉を顰しかめ、署長が問い掛けた。
「……いつものように、女を寄越せという口ぶりではないな」
『ああ。お前さんが選んだ警官隊。クラン・カラティンの連中を俺の所まで連れてきな。全員じゃなくていいが、できるだけ生え抜きをな。あ、宝具が壊れた奴やつは面めん子つに入れとけよ？　右手を食われちまったあの兄ちゃんもな』
「……」
　サーヴァントの提案に対し、署長は僅かに逡しゆん巡じゆんする。
　デュマの存在はクラン・カラティンにも周知させてはいた。
　だが、直接合わせても良いものかという判断が即座には下せなかったのである。
　数日前までならば署長は不必要に部下達を会わせなかっただろうし、デュマも特に会いたがる様子は無かった。
　しかしながら、今の状況になってみると、何か変化が欲しいのも事

実である。
「……宝具作成に、特に使い手と会う必要はないと聞いていたが？」
『ああ。別にそれで宝具が強くなるわけじゃないぜ？　ただの人間と宝具じゃ相性もへったくれもねえしな。握り手の細かい調節だのなんだのは、それこそ俺の仕事じゃねえ』
　あっさりと言い放ったデュマは、署長が『では、何故なぜ？』と問うよりも先に、自らの答えを口にした。
『俺は今回は単なる観客だ。観劇料としてあんたに最低限の協力をしちゃいるがな』
「……？」
『ただよお……観客なら観客として、気に入るような役者がもし居るなら、贔ひい屓きの花束の一つや二つ、見み繕つくろってやろうと思ってな』
　デュマの言葉に暫しばし考え込んだ後、署長は大きく息を吐き出す。
　そして、更に数秒の沈黙を経て、覚悟を決めたように口を開いた。
「……いいだろう。だが、彼らは魔ま術じゅつ師しである前に私の大事な部下だ。勝手に魔ま術じゅつ回かい路ろや精神を弄いじるような真似まねだけはしないと約束しろ」
『俺は別にエリファス・レヴィやパラケルススみたいな魔ま術じゅつ師しじゃねえんだぞ？　そんな器用な真似まねできると思うか？』
「エリファス氏が魔ま術じゅつ協きょう会かいが認める形の正式な魔ま術じゅつ師しだったのかどうかは意見が分かれる所だが……宝具の下地がある武具に『伝承』を付与させて宝具を生み出す。そんな器用な真似まねをやってのける男の言葉とは思えんな」
『……ま、運命を弄いじる可能性はあるかもしれないがな。そのぐらいは見逃せよ。できるだけ良いい方向にねじ曲がるようにしてやるから』
　いけしゃあしゃあと告げるデュマに何か苦言を呈そうとした署長だったが、その言葉を呑のみ込こみ、早々に電話を終わらせる。

「……すまんな、少し問題が起きた。いつ部下を向かわせるかは後で連絡する」
『ははッ！　休む間がねえな！　胃薬はきちんと用意しておけよ、兄弟！　しっかし、現代の胃薬ってのは種類が豊富で面白ぇな！　胃は大事にしろよ？　じゃあな！』
　通話を閉じた後、署長は横に目を向けた。
　そこにはクラン・カラティンのメンバーでもある直属の秘書が立っており、一枚の報告書を差し出している。
　署長は無言で頷うなずいた後、改めてその報告書の内容を読み直す。
　それは、街中に現れたアインツベルンのホムンクルスが、フランチェスカが連れてきた魔ま術じゆつ師し──つまりは真なるサーヴァントのマスターの一人と共に行動しているというものだった。
　更に彼が気に掛かったのは、二人が向かう先についての報告だった。
　署長は事前に聞かされている。フランチェスカやファルデウスが連れてきた、こちらの手駒であるマスター陣を。
　セイバーを呼ぶ予定だったカーシュラはアサシンの手によって死亡。
　魔ま術じゆつ使つかいの傭よう兵へいであるシグマは、ファルデウスとしか連絡を取っていない。
　もはや人の概念すら捨てるとすら言われた強きよう化か魔ま術じゆつを操る一族の末姫、ドリス・ルセンドラも警察の監視網には掛かっておらず、結果としてこうして情報の網に掛かったハルリは署長にとって貴重な存在である。
　だが、それがアインツベルンのホムンクルスと同行しているというのは不味まずい状況である。
　──洗脳されたか、あるいは脅迫を受けた……。
　──いや、ハルリ・ボルザークの出自を考えれば、正式な取引で寝返った可能性もあるな。

ハルリ本人は戦闘力が強い魔ま術じゆつ師しではないのでさして問題ではない。呪殺等に対する警戒は必要だが、それは彼女に限った話ではないため、既に何重にも対策を施していた。
だからこそ問題は、彼女が何の英えい霊れいを喚よび出だしたのかという一点に絞られる。
マスターの情報は『上』から降りてきているが、誰が何の英えい霊れいを喚よんだのかまでは知らされていない。上層部からすれば、クラン・カラティンも捨て駒の範はん疇ちゆうなのだろう。
だが、今回の聖せい杯はい戦せん争そうのマスター陣で警戒すべき魔ま術じゆつ師しの拠点がどこにあるかぐらいは、流石さすがに署長も明確に把握している。
そして、ハルリとアインツベルンのホムンクルスの二人は、その拠点の一つに向かっている事が推測できた。

「工業地区……。スクラディオ・ファミリーの魔ま人じんと接触する気か……？」

× ×

バズディロット・コーデリオンという男は、夢を意図的に拒絶する。
自らに暗示を掛ける事で身体からだに浅い眠りを、脳のう味み噌そには深い眠りを纏まとわせ、一度に僅か数分のショートスリープによる長期間の活動を可能にしていた。
敵が現れた時、目覚めと同時に即座に動けるようにしておく為ための処置であり、意識の解体を利用した短期睡眠は魔ま術じゆつ使つかい達にも広まる簡かん易い魔ま術じゆつの一つである。
もっとも、意識解体は自分を一度殺すようなものなので、多用する魔ま術じゆつ師しは限られているのだが。
世の中にはこれに加えて様々な睡眠の術すべを使い分ける魔ま術じ

ゆつ使つかいの傭よう兵へい達もいると聞くが、バズディロットは基本的に夢を嫌う為ため、浅い眠りレム睡眠を良しとはしていなかった。
　だからこそ、バズディロットは訝いぶかしむ。
　ある瞬間より、自らが、『夢を見ている』という事を自覚したからだ。
　周囲に広がるのは夕焼けに染まった海。
　白波を派手に掻かき分わけ、黄金色の水面を進む巨大な船に乗っている夢。
　しかし、それはすぐに彼の脳裏で訂正される。
　これは、夢ではない。
　自分のものではない情報と魔ま力りよくによって構成されている、記憶の共有現象だと。
　視点の高さも普段の自分よりだいぶ高い位置にある。
　見下ろす位置に見える金髪の男が、こちらに向かって高慢な笑みを浮かべながら口を開いた。

『ん？　俺が何故なぜ君を怖おそれないかって……そんな当たり前の事を聞くのか。それは、俺が神すら越える叡えい智ちをこの身に宿した賢者だからに決まっているだろう』

　恐らくは、自らが魔ま力りよく供きよう与よしているサーヴァント──アルケイデスの記憶だろう。
　冷静に観察すると、金髪の男はどうやら古代のエーゲ海あたりの言葉で喋しやべっているようだが、英えい霊れいが世界から与えられた現代知識の影響か、あるいは魔ま力りよくのパスが繫つながっている自分の影響だろうか、バズディロットが普段使用している言語として頭の中に響いていた。
　記憶の持ち主──おそらくはアルケイデスと思われる意識の器は古代とは思えぬ程に豪ごう奢しやな造りをした船の上に立っており、周囲

には複数の人影が見える。
　記憶の共有とはいえ、誰もが恐ろしいまでの魔ま力りよくを身に纏まとっているのが分かり、並の人間がこの記憶共有を行った場合、それだけで精神に支障をきたすだろうとバズディロットは考えた。

『人間というのは、基本的に脳無しなのさ。愚者の中から愚者の長を決めて王様面などするものだから、国はいつまでも纏まとまらないし戦争も起きて人は飢える。だからこそ、俺のような人間が力と栄光を手に入れなければならないんだ』

　しかしながら、目の前で演説している金髪の男からは、『力』という意味では周囲の者達ほど濃密な気配は感じない。
　何かの加護を受けているような気配もあるが、感覚を研ぎ澄ませて精査すると、この船そのものに宿った魔ま力りよくを身に纏まとっているようにも感じられる。

『お前を怖おそれる奴やつらも、みんなどうしようもない馬鹿だ。馬鹿だから、君という化け物を理解できないのさ。理解できないまま利用しようとするものだから、英雄だなんだと怯おびえながら君を褒めそやす。まったく下等な奴やつらだ。神の使いどころか魔ま獣じゆうですらない人食い狼おおかみに生いけ贄にえを捧ささげて媚こびへつらう蒙もう昧まいな連中と何一つ変わらない』

　朗々と語る男は、自分の言葉に酔っているというよりも、自分の言葉が唯一の真実であるかのように、『ごく当たり前の事』として述べている雰囲気だ。
　周囲の者達の反応は様々であり、目を輝かせて頷うなずいている者や「また始まったか」という顔で苦笑する者、船首近くにいた獣けもの気配を纏まとう女性弓兵に至っては、あからさまに『胡う散さん臭くさい男だ』とでも言いたげな疑念の目を金髪の男に向けている。

そんな視線を受けている事に気付いていないのか、あるいは気付いていても取るに足らぬ事と無視しているのか、男は尚なおも語り続けた。

『俺の国は……俺が造る国は違うぞ。国民全員に教育を施す。あの馬小屋よりも立派な学まなび舎やを町に造って、万人に俺の知識を貸し与える。誰もが字を読み書きでき、誰も悪あく辣らつな商人に騙だまされない。まあ、それでも俺の叡えい智ちには届かないだろうから、その不足分はこちらで補ってやるしかないけどね』

　──よく喋しやべる男だ。
　バズディロットは男の演説に特に感慨を受ける事もなく、その話を聞き続ける。
　本来の聞き手であるアルケイデスは、ただ無言で相手の長口上に耳を傾けていた。

『なに、王になるんだ、その程度の労働は覚悟の上だよ。みんなが俺の言う事を素直に聞けば、相応の対価と栄えた国をくれてやる。誰も不安を抱かない国だ。その国にはな……いいか、その国には、君を見て怖がる奴やつなんて一人もいない！』

　何かを言いかけたアルケイデスの言葉を遮り、金髪の男は両腕を大きく広げながら断言した。
　まるで、自らの言葉が世界そのものの意思であると示すかのように。

『君が俺の部下であり友であり所有物であると、誰もが等しく理解しているんだからね』

×　　　　×

そこで、バズディロットは意識を取り戻した。
周囲に広がるのは、食肉工場の地下に造られた、いつもと変わらぬ殺風景な魔ま術じゆつ工こう房ぼう。
自分が椅子に座っていた事を確認した彼は懐中時計を取り出し、睡眠を開始してから丁度５分が経過しているという事を確認した。
しばし沈黙を続けたバズディロットは、先刻見た光景を考察した後、ゆっくりと自分の判断を口にする。
「そうか、あれが、かのアルゴー船の長か」
すると、魔ま術じゆつ工こう房ぼうの空間の一部が蠢うごめき、色濃い魔ま力りよくの塊が人の形を伴って顕けん現げんした。
霊体化を解いたアルケイデスが、マスターであるバズディロットに問う。
「今の言葉は、どういう意味だ」
「魔ま力りよくの経路を繋つなげたせいだろう。お前の記憶が浸しん蝕しよくしてきた。船の上で、偉そうな小僧が理想の国とやらの野の放ほう図ずな妄言を捲まくし立たてている姿が見えたものでな」
バズディロットは隠し立てもせず、自らの見た物とそれに対する率直な感想を口にした。
すると、アルケイデスは暫しばし黙り込んだ後、クツクツと小さく笑い、遠き過去を懐なつかしむように首を振る。
「……理想の国か。船上でそんな胡う乱ろんな話を口にするのは、間違い無くあいつだろうな」
「下らん男だ。今の時代であれば、我々のような者に骨の髄まで利用されて捨てられる、身の程を弁わきまえないカモに過ぎん。お前ほどの大英雄が、何故なぜあのような男の船の漕こぎ手てとなった？」
淡々とした調子で、バズディロットは己おのれの視点から見た人物評と疑問をアルケイデスに対して投げかける。
するとアルケイデスは、間髪入れずに言葉を返した。
「あの男は、人間の弱さと捻ねじれを全て内包した衆愚の権ごん化げ

だった。それに間違いはなく、仲間に対しても奴やつは常に『お前達を一番うまく使えるのはこの自分だ』と言い続けていた。そういう所が、アタランテには白い目で見られていたな」
　アタランテ。
　アルケイデスと共にアルゴー船に同乗していたと言われる女おんな狩人かりゆうどの名を聞いて、バズディロットは先刻の景色の中にいた女性だろうと推測した。
「……だが、あの男は、化け物と怖おそれられた俺にも、レムノスの女王にも、果ては人語を解する磯いその魔ま物ものにまで、等しく同じ夢を語った。奴やつが目指していたのは神などではない、王だ。いや、奴やつの中でその二つに区別などなかったのかもしれないがな」
　酷ひどい物言いだったが、侮蔑している様子はない。
「我らが共通の師であるケイローンの教えも忘れ、ただ己おのれの欲望に腐心した哀れな男だ。だが、あの男の掲げる馬鹿げた夢物語には偽りがなかった」
　それこそ、過去に見た夢を語るかのような調子で、アルケイデスはアルゴー船の船長だという男について、一つ一つの言葉を口にした。
「泥と欲に塗まみれたあいつこそが、私が見た中で最も人間らしい人間だ。私が敗やぶれるのを良しとするならば、神どもが差し向けた呪のろいでも雷の業ごう火かでもない。あのような輩やからの、人間の果て無き強欲に魂を焼かれた時だろう」
「……まるで、それを望んでいるかのような言いぐさだな」
「無論望んでいる。ただしそれは、我が復ふく讐しゆうを果たした後の話だ」
　そして、ついでとばかりに、自らが乗った栄光の船──アルゴー船への思いを口にした。
「あの船こそ真なる魔ま窟くつよ。輝かしい光を放ちながら、裏では破滅も欲望も裏切りも、人の持つ業の全てが渦巻いていた。船長を含め、あの船に同乗した者達の中で、私を殺せぬ者はいないだろう。その逆も然しかりだ」

「余程、あの船に思い入れがあるらしい」
　まったくの無表情で紡つむがれた皮肉交じりの言葉だが、アルケイデスはそれを否定も肯定もせず、淡々とその船団の長の最後を語り紡つむぐ。
「あの男はやがて全てを失い、苦楽を共にした船の残骸に押し潰されて朽ちたと聞くが……あるいは、それこそがあの気まぐれな船が与えた、唯一真摯な慈悲だったのやもしれんな」
　感慨深く語るアルケイデスを見て、バズディロットは僅かに訝いぶかしんだ。
　──随分と、口が回る事だ。
　──過去を語りたがる男とは思えないが……。
　その疑問に答える形で、アルケイデスが弓を握り、その本もと弭はずを床に軽く打ち付ける。
　鋭い打撃音が床から響くのと同時にアルケイデスの殺気が膨れあがり、音の波紋に合わせて工房内の空気を冷たく、そして鋭く震わせた。
「私がここまで話したのは、これから貴様に対して告げる事の意味を公正に伝える為ためだ。神を名乗る無法者どものように、理不尽な死を与えられたと誹そしられたくはないのでな」
「……何が言いたい？」
　アルケイデスの殺気に晒さらされながらも、バズディロットは動じない。
　通常の人間ならば精神よりも先に肉体が崩壊するのではないかという程の圧力の中、アルケイデスは声を低くしてマスターへの『忠言』を口にした。
「確かに奴やつはどうしようもなく傲慢で身の程を知らぬ愚者だが……それでも、私の友だ。あの船に乗らなかった貴様が軽々しく蔑さげすむ事は許さん」

　それは直接的な恫どう喝かつであり、バズディロットはもしも再度

あの船長を見下した発言をすれば、アルケイデスは容赦無く自分に牙を向けるであろうと判断した。
「なるほど、理解した。謝罪はしないが、二度とこの話題は口にしないと約束しよう」
　暫しばしの静寂の後、アルケイデスは殺気を消してバズディロットに背を向ける。
　その背を見ながら、バズディロットは理解した。
　何故なぜ、あのような取るに足らない会話の光景が、魔ま力りよくの経路を通じてわざわざこちらの意識に流れ込んできたのかと言う事を。
　アルケイデスという男にとって、あの船の上こそが、『神の子』ではなく、『人間』として扱われた数少ない期間の一つなのであろう。
　他に候補があるとすれば、幼少期か、あるいは後に死ぬ定めの妻子と戯たわむれていた時か。
　そうして飛び石のように浮かび上がる『アルケイデス』という人間の痕跡の積み重ねこそが、今の彼を形作っている全てなのだろうと。
　──なんとも、歪ゆがんだ話だ。
　歪ゆがませた張本人がそんな事を考えつつ、同情も蔑みもせぬまま、今後の恙つつがない運用の為ために今しがたのやり取りを心に刻む。
　──あるいは、あの船長も確かに英雄だったという事か。
　夢という形で見た金髪の青年への評価をやや上方修正させながら、今後の予定について考えを巡らせていると──工房内にある通信装置に、食肉工場の地上部分からの連絡が入る。
「……どうした？」
　バズディロットの冷たい声に、一階にいた部下の魔ま術じゆつ師しは悲鳴のような声で答えた。
『ア、アインツベルンです！　アインツベルンのホムンクルスが、ここに……』
　部下の言葉は、そこまでだった。

激しいノイズが走り、人間が一人倒れるような音を残して通信が途切れる。
「……」
　バズディロットは無言のまま立ち上がり、地上へと続く階段に目を向ける。
　アルケイデスも異常には気付いたようで、弓を手に取りながら呟つぶやいた。
「……気配は一つしか無いな。だが、何かが複数いるようだ」
　英雄としての直感か、あるいは心眼的な何かであろうか。
　アルケイデスは自分が感じている小さな気配と、バズディロットの部下を倒した者が別の存在ではないかと考えた。
　そして、それを証明するかのように──
　カツリ、カツリと、階上からこちらに降りてくる足音が二人分聞こえて来る。

　数秒後、工房内に現れたのは、純白の肌と白銀の髪が特徴的なホムンクルスの女。そして、そんな彼女に隠れるように身を縮こまらせる、魔ま術じゆつ師しらしき一人の少女だった。
　ここに来て、バズディロットもアルケイデスも理解する。
　アインツベルンのホムンクルスらしき女に対して気配を欠片かけらも感じなかったのは、彼女が自分の魔ま力りよくを自分の周りだけで循環させているからだと。
　半径数メートルの濃密な魔ま力りよくドームを前にして、アルケイデスは無言のまま弓に手をかけ、バズディロットは泰然自若とした表情で己おのれの言葉を口にした。
「アインツベルンの人形だな。ここに何の用だ？」
　およそ感情の込められていないバズディロットとは対称的に、ホムンクルスの女は楽しげな感情を顔に浮かべて、柔和な笑みと共にその言葉を口にした。
「あら、貴方あなた、そんなに泥どろ塗まみれになっちゃって……も

う半分人間止やめてるのね」

「だったら……そこの歪ゆがんだ英えい霊れいと一緒に殺しちゃっても、別に構わないわよね？」

×　×

　その薄暗い世界は、濃密な森の気配に満ちていた。

　周囲にはビルのように巨大な杉が天に向かって何本も伸びており、新たな芽が息い吹ぶくのを許さぬとでも言わんばかりに、色濃い葉陰で大地を広く包み込んでいる。
　その暗がりの中に落とされた、より色濃い影があった。
　暗い土の色をしていたが、その実、内面は濃い魔ま力りよくと生命の輝きに満ちている。
　粘菌のように蠢うごめくその土つち塊くれの内部では、様々な『言葉』が繰り返されていた。
　正確にはそれは言語ですらなく、『意思』の塊であるそれは、生まれたばかりの土つち塊くれの魂に、己おのれが如何いかなる存在であるのかを染しみこませる。

　　──穿うがて、そして縫い止めよ。
　　　　　　──お前は全てを貫く槍やりであり、世界われらの理ことわりを縫い止める楔くさびである。
　──お前には、完成された人形となる素養がある。そして、そうなる義務がある。
　　　──我らが地上の傲慢を諫いさめるべく投げ放つ、最初にして最後の慈悲である。
　　　　──人という種に己おのれの役割を思い出させよ。そして、お前が導くのだ。

—穿うがて、そして縫い止めよ。
—だが、まずは学べ。
—お前は知る必要がある。
—人間というものを。
—エンリルの森に、ウトゥが『完全なる人間』を生み出した。
—見よ、語れ、そして己おのれをその形に模かたどるがいい。
—その後に、ニヌルタがお前に力を分け与えるだろう。
—ウルクの森に投げ放つその前に、ウトゥの育みし『人』と共にあらねばならぬ。
—完成せよ、人形となれ。
—お前は全ての生命を模倣する土つち塊くれなのだから。
—語りあうがいい、人間と。
—穿うがて、そして縫い止めよ。

世界そのものから土つち塊くれの核へと響き渡る言葉の数々。
土つち塊くれはただ森の影の中に在り、言葉の命ずるがままに探し求める。
人を、知らねばならぬと。
ウトゥが育んだという、『完全なる人間』と出会わねばならないと。
そして、森の空気が一段と深く冷え込んだ瞬間—『それ』が土つち塊くれの前に現れた。
内部に響く『言葉』が膨れあがり、それが『完全なる人間』なのだと土つち塊くれの本能は理解する。
彼とも彼女とも言えぬ、ただ森の中に広がる泥が認識した『それ』は—

世界の全てを憎み続ける、果て無き怨えん嗟さの声をあげていた。

×　×

森の中

「どうしたんだい？　随分とうなされていたようだけれど」
　エルキドゥに背筋を優しく撫なでられ、マスターである銀ぎん狼ろうはゆっくりと瞳を開いた。
　そして、周囲の光の差す森を見て、安あん堵どするかのようにエルキドゥへと己おのれの頭をすりつける。
　何度か鳴き声を上げると、エルキドゥは僅かに顔を曇らせ、心底申し訳なさそうに言葉を紡つむぎ出だした。
「……そうか、それはきっと僕が生まれる前の記憶だね。怖い思いをさせてしまってごめん」
　銀ぎん狼ろうに対してそう語りかけると、エルキドゥは静かに目を閉じる。
　そして、今となっては遙はるかなる過去に成りはてた時代を思い出しながら、半分独り言のように呟つぶやいた。
「ウトゥも、他の神々も……イシュタルとエレシュキガル以外は『彼女』を本当に『完全な人間だ』なんて思い込んでいたんだ。いや……僕も『彼女』の後にシャムハトやギルと出会わなければ、そう信じ込んでいたかもしれない」
　悲しげな瞳をしたエルキドゥを慰めるかのように、銀ぎん狼ろうがクゥンと優しい鳴き声を響かせる。
　エルキドゥはそんな狼に微笑ほほえみかけた後、当時とはほんの僅かに変わっている星空を見上げながら『神々』の行く末について口にした。

「その時点で、もう、バビロニアの人達との決別は止められなかった

のかもしれないね」

×　×

ホテル　クリスタル・ヒル　最上階

「ぬう……まだまだこの程度ではウルクの自室には遠く及ばぬな」
「そんな……ここまで美しいのに、ですか？」
　ティーネ・チェルクが驚きの声を上げると、彼女のサーヴァントである英雄王はやや不機嫌そうに断言した。
「無論、我オレの蔵から出したものだからな。調度品はどれも最上よ。だが、そもそもこの時代の空気が我オレの宝に見合っておらん。本来ならばこれでは量が全く足りんしな。ウルクの栄華を示すにはこの程度の部屋では狭すぎる」
　そう言って英雄王が見回したホテルのスイートルームは、数時間前とは全く違う様相となっていた。
　アルケイデスの襲撃による窓まど硝子がらすの破壊などのハプニングはあったものの、このスノーフィールド内でも最上級の物として誂あつらえられていた部屋だ。家具もベッドも一流であり、普段は砂漠地帯にある離れの集落で暮らしているティーネにとっては完全に別世界の代物であったのだが──
　夕べ、ウルクの城壁を造る話を続けていた英雄王が、いかにウルクという都市が完成されていたかを話し始めた後、暫しばらくして部屋を模様替えすると言い始めたのだ。
　どうやら英雄王は、ティーネ達が今一つウルクの素晴らしさを理解しきれていないのではないかと疑念を持ったようで、ティーネの配下である黒服達に『家具を全て廊下に出せ』と命じた後、自らの蔵からバビロニア時代の様々な装飾品を取り出したのである。
　ティーネは、その美しさに目を見張った。
　広げられた敷しき物ものはまるで雲の上を歩くかのような錯覚を感

じさせ、石から削り出したと思おぼしきテーブルの上には見た事も無い輝きの食器が並べられている。
　一つ間違えれば下品と言われかねない黄金の装飾品の数々も、そのデザインが上手うまく周囲と調和し、まるで黄金色に染まる麦の草原を凝縮したかのような素朴な美しさを内包していた。
　黒服の一人は『……普段の英雄王の鎧よろいが一番ギラギラしている』と考えたが、口にしたらまず命はないだろうと考え、その言葉を冷や汗と共に身体からだの奥底に押し込める。
　宝石としてはさして珍しい部類ではない瑠璃石ラピスラズリの数々も、英雄王の蔵から現れたものはティーネがこれまで見て来たものとは全く違う存在に思えた。
　透き通るような藍色に包まれた石の表面に、白波を思わせる結晶物の輝きが散在し、まるで本物の海を石の中に閉じ込めたかのような錯覚を覚える。
　この石を割れば大海が湧きだし、星と命が生まれる。
　もしも英雄王にそう言われれば、ティーネは鵜う呑のみにしてしまっていた事だろう。
　それ程の美しさを携えた巨大な宝石を飾っても、英雄王は尚なおも『足りぬ』と不満を述べた。
「やはり土台たる王宮……いや、町そのものから造らせるべきか。どう思う、ティーネよ」
「そのような都市、ウルクの民ではない私達は畏おそれ多おおくて歩けません」
「たわけた事を言うな。石畳の上に立つかどうかなど、ウルクの民であるかどうかとは全く関係ない」
　ピシャリとティーネの言葉を否定し、英雄王は彼女を見下ろす。
「我オレから見れば誰もが等しく雑種だ。生まれの貴き賤せんなど金きん箔ぱく一枚ほどの差すらない。我オレがウルクの民と認めるのは、自ら荒野を切きり拓ひらく意志を抱いた者どもよ」
　そして、ウルクの人々を思い出したのか、やや表情を軟化させて言

葉を続けた。
「酒場の娘から祭さい祀し長ちようになり、あろうことかこの我オレを怒鳴りつけて国を再興させた雑種もいる。粗忽な女神イシユタルを信仰している所だけは解げせぬが、あれもまた我が民として相応ふさわしき在り方よ」
「そのような御お方かたが……」
「そやつに限った話ではない、ウルクの民は誰もが生いき足掻あがく事に必死だったが、それを苦であるとは考えていなかった。我オレを頼り敬う者はいても、我オレに阿おもねることしかできぬ奸かん物ぶつはいない。そのような事を企たくらむ輩やからは、我オレが見定めるまでもなく荒野で野垂れ死ぬ。ウルクの民が生きたのは、そういう時代だ」
　英雄王はそこまで言うと、窓から差し込む朝日の光を浴びながら、ティーネの方に視線を向ける。
　特殊な魔ま術じゆつを使用しているのか、一睡もせずに気を張り詰めさせているティーネに対し、少しだけ不機嫌そうに言った。
「就眠を許す。人として生まれたからには、本能の欲求に応える時は自然な形にしておけ」
　ティーネがどのような術式を用いているのか見透かしているとばかりに、英雄王は部下に対して労ねぎらいの言葉を口にする。
「し、しかし王よ！　王が寝ずに働いているのに、私だけ惰眠を貪るわけには……」
「ならば王として命じる。休め。仮初めとはいえ、我が配下を過労死させたとあっては王の名折れよ」
　それでも戸惑うティーネに、英雄王は顔から表情を消して告げた。
「言った筈はずだ。我オレに身命を捧ささげるのは構わんが、未熟な魂は要らぬと」
「……！　も、申し訳ございません！」

　何度も礼を言ってから寝室に消えて行くティーネを見送った後、英

雄王は部屋に残った数名の黒服達に目を向ける。
　普段はこちらをいないものとして扱う英雄王の行動に対し、黒服達の間に緊張が走った。
「貴様らも御苦労な事だ。未熟な小娘を主と崇あがめる事は苦痛であろう？」
「な、何をおっしゃいます。我々は、そのような事は……」
　最初に愛あい想そ笑わらいをした男を見て、英雄王は目を細める。
　──まずは、一人か。
　英雄として、暴君として、賢王として、そして英えい霊れいとして数多あまたの人類を見続けたギルガメッシュは、その男が『内通者』である事を一瞬で看破した。
　しかしながら、彼はそれを指摘せず、念話でティーネに伝えようとすらしない。
　──鼠ねずみは十はいると踏んでいるが……これから、さらに増えるな。
　内心でクツクツと笑いながら、朝日を反射する杯を掌の中で転がし始める。
　──まあ良いい。こやつらは我が臣下ではなくティーネの配下だ。
　──逆心の輩やからを如何いかに裁くのか、あるいは気付かぬまま背後より刺されるか……。
　──雑種よ、お前が自らを幼童おさなごではないと言うのなら、心の在り方を我オレに見せてみよ。
　──その真価、王としてゆるりと量ってやるとしよう。
　そして、誰にも届かぬ声で、楽しげに独り言を口にする。
「雑種よ、お前がやはりただの幼童おさなごだというのならば、今はただ夢にたゆたうがいい」

「例えそれが悪夢であろうと、現実よりはマシであろう？」

×　　　　　　　　×

ゆめのなか

　窓から差し込む朝日を浴びて、繰くる丘おか椿つばきが目を醒さます。
「おはよう、まっくろさん！」
　彼女が声をかけると、天井を覆うように立っていた黒い巨人が嬉うれしそうに蠢うごめいた。
　窓の外では小鳥が囀さえずっており、そこから庭を覗のぞくと、猫や犬が喧けん嘩かせずに戯たわむれている。
「椿つばき、おはよう。もう朝ご飯よ？」
　扉が開くと母が現れ、階下からベーコンの焼けた匂いが漂ってくる。
「うん！　おはよう！　お母さん！　いまいくね！」
　無邪気な笑みで、椿つばきが答える。
　それは、スノーフィールドに棲すむ人々にとっては、いつも通りの何気ない一日だと言えた。
　椿つばきが何よりも欲ほつしたその日常が、今日もまた幕を開ける。

「やっぱり、みんなどこかにおでかけしてたんだね！」
　朝食を食べ終わった椿つばきが動物達と戯たわむれながら散歩していると、街の様子が昨日までと変わっている事に気が付いた。
　大通りには時折車が走るようになっており、人の姿も街中で疎まばらに見受けられるようになっている。
　椿つばきは殆ほとんど家で引きこもっていた為ために、家族以外の知り合いはあまりいなかった。
　それでも、街から人がいなくなっていた事に最初は不安と恐怖は感じていた事を思い出し、改めて道の物陰を歩く『まっくろさん』へと礼を言った。

「ありがとう、まっくろさん。まっくろさんが居なかったら、私、怖くて、おなかがすいて、きっと死んじゃってたんだと思う」
　幼い少女の言葉に、黒い影はただゆらゆらと蠢うごめいている。
　人の気配が少ない通りの中、電柱の影で揺らめく黒い塊など、どう考えてもホラー映画の産物でしかないのだが、椿つばきは全面の信頼を寄せているかのように無邪気な微笑ほほえみを向けていた。
　椿つばき自身、何故なぜああも簡単にあの黒い異形を受け入れたのかを理解しているわけではない。
　幼いとはいえ、いや、幼いからこそ本能に従って恐怖を抱いてもおかしくはないのだが──椿つばきは、何故なぜかそれが安心できるものであると感じ取ったらしく、最初から恐怖を感じてはいなかった。
　そして、彼女自身がそれを疑問に思う事も無いために、彼女と黒い塊との親和性について考えるものは誰も存在しなかったのである。

　今日、この瞬間までは。

「ねえねえ、僕もその犬とか猫とか、触ってもいい？」
　椿つばきは突然かけられた声に驚き、そちらに慌てて顔を向けた。
　するとそこには、初めて見る顔の少年が立っている。
　年齢は椿つばきよりも何歳か上だろうか。しかし、大人達から見れば両方とも『幼い子供』として括くくられる外見だ。
「ええと……うん、いいよ！」
　対する椿つばきは、戸惑いながらも快く少年を受け入れる。
　彼女は気付いていなかった。
　少年が現れた瞬間、黒い影──ペイルライダーが、何かを警戒するようにその身を大きく膨れあがらせたという事に。そして、椿つばきが少年に微笑ほほえみかけた瞬間、まるで安あん堵どしたかのように、元の大きさに戻ったという事にも。

　一方で、少年の方はそんな黒い塊の蠢うごめきを視認していたが、

警戒が解けたようでほっと胸をなで下ろす。
　──ああ、良かった。僕を椿つばきちゃんの味方だと判断したんだね。
　──システム系のサーヴァントは僕も完全に動きを読み切れないから、ドキドキしたよ。
　そんな事を考えつつ、少年は犬の頬を撫なで、椿つばきに対して無邪気な笑みを浮かべて見せた。
「ジェスター」
「え？」

「僕の名前はジェスター・カルトゥーレだよ。よろしくね！」

×　　×

とある魔ま術じゅつ工こう房ぼう

　一人の少女の夢の中で子供同士が邂かい逅こうしている事などつゆ知らず、薄暗い工房の中では、ベッドに寝転がった黒幕とそのサーヴァントが仲良く菓子を貪っていた。
「モグモグ……これ美味おいしい。そっちの御お菓か子しも頂戴？」
「食べ過ぎると太るよー？」
「英えい霊れいだから太りませんー」
　少女──フランチェスカの忠告に対し、少年の姿をしたキャスター──フランソワ・プレラーティは自慢げに笑いながら菓子袋を開く。
　そんな彼の言葉を聞いて、フランチェスカがプウ、と口を膨らませた。
「いいなあ、英えい霊れい。私もなろうかな？　今からフランチェスカの名前で何か凄すごいことやったら英えい霊れいになれると思う？」
「多分僕に統合されるだけだと思うよー。っていうか、今の君と英え

い霊れいとして座にコピーされた君は記憶が同じなだけの別物だから、『英えい霊れいになろうかな』っていう言葉自体がおかしいんだけどね。まあ、中には生きたまま色んな時代に召しよう喚かんされちゃう例外もいるらしいけど」
　プレラーティの言葉に、フランチェスカは日本の菓子であるドラ焼きをハムハムと囓かじりながら首を傾かしげた。
「アルトちゃんもその一種かな？　まあいいや。今回は来なかったし。あーあ、お師匠様達へのいい嫌がらせになると思ったのになー。アルトちゃんを虐いじめられればなー」
「師匠の師匠が塔の中で少し嫌な顔をするだけで、あの精霊達が慌てふためくとは思わないけどねえ」
「そっか……。そうだよねえ。冬ふゆ木きの四次でも色々大変そうだったけど、結局お師匠様達は助けにいかなかったみたいだしねえ」
「行く必要もないと考えてたんだろうし、行こうとしても無理だよ。ブリテンならともかく。あの湖から師匠達が大海を渡る程の神秘はこの世界に残ってないからね。それこそ世界のテクスチャでも剝はがさなきゃ……あれ？」
　内容は不可解ながら、若い少年少女の会話といった雰囲気で言葉を交わす二人だったが──周囲にあった無数のモニターの一つに映った映像を見て、少年は菓子に伸ばす手を止めた。
　それは、フランチェスカの手駒である魔ま術じゅつ師し達の拠点の遠景を映した映像の中の一つであり、バズディロット・コーデリオンの魔ま術じゅつ工こう房ぼうがある工業地区を映し出したものである。
　映像の中では、工場のうち一つの煙突がゆっくりと崩れ落ち──その際に起こった土煙の中に、尋常ならざる巨大な異形の影が映し出されていた。
「……なにあれ？　怪かい獣じゅう？　それとも水晶洞穴の大おお蜘蛛ぐも？」
　ベッドの上に座り直し、面白そうに見つめるプレラーティ少年。

どうやら巨大な異形とアルケイデスが戦闘を行っているらしく、工場街に激しい破壊の波が広がりはじめていた。
「蜘蛛くもは流石さすがにまだ起きないよ。ブリテンの呪のろい猫ねこかも」
「猫や犬には見えないよ？　誰か巨人族かピクト人の王様でも召しよう喚かんしちゃった？」
すると、フランチェスカはその映像の片隅に、走って逃げまどう見知った顔を発見した。
「ハルリちゃん？」
遠目なのではっきりと解わからないが、次の瞬間、その怪かい獣じゅうのような影は飛散する瓦が礫れきから彼女を護まもるかのように移動し、その礫つぶての全てを受け止める。
自分が用意した手駒が、何故なぜかバズディロットの工場で『何か』を暴れさせているという事に気付いたフランチェスカは、恍こう惚こつとした笑みを浮かべながらそのモニターに縋すがり付ついた。
「うそ、うそうそ。凄すごいよハルリちゃん凄すごいじゃない！　数合わせのつもりだったのに、なんか凄すごいの喚よび出だしてる！　あれって本当に『あの英雄』なの？　それにしては魔ま力りよく量りようがおかしくない!?　ああ、内臓が疼うずくよう！　もう、そういう予想外の事する子って大好き！　最高！　あとで抱きしめてケーキでも奢おごってあげなくちゃ！」
息を荒げながら頬を紅潮させるフランチェスカとは対称的に、少年の姿をしたサーヴァントは少し拗すねたような口調でマスターに抗議する。

「おーい。画面、見えないよー？」

そして、人々は朝を迎える。
聖せい杯はい戦せん争そうの参加者にとっては、本格的な戦いの始まりとも言える朝を。

スノーフィールドの一般人達にとっては、破滅の始まりとも言える朝を。

沼地の屋や敷しき

　時は、半日ほど遡る。
「ほれ、早速最初の試練がやってきたぞ？」
『ウォッチャー』というクラスの英雄の影法師を名乗る船長の言葉に振り返ると、シグマの視線の先には一人の少女が立っていた。
　それはまさしくシグマの『敵』である、他者が喚よび出だしたアサシンのサーヴァントであったのだが──シグマがそれに気付くよりも先に、アサシンの少女は行動を起こしていた。
　一瞬でシグマの眼前にまで迫ったアサシンの少女が、感情を消し去った声で問い掛けた。
「貴様は……聖せい杯はいを求める魔ま術じゆつ師しか？」
　そう言ってこちらを見つめるアサシンらしき少女を見返して、シグマは一瞬で己おのれの死を受け入れた。
　目の前にいる少女は、濃密な死の気配を纏まとっている。
　まるで魔ま力りよくそのものが人の命を奪う事に特化しているかのような気配を感じ、シグマは『ああ、これが本来のサーヴァントというものか』と即座に理解した。
　全身の筋肉が逃げろと叫びかけたが、シグマの未熟な魔ま力りよく回かい路ろと脳のう味み噌そに刻まれた本能は、すぐに『逃げても無駄だ』と答えを出す。
　答えを一つでも誤れば、自分は命を失うだろう。自分のサーヴァントである『ウォッチャー』とやらは、丸一日話しても何一つ理解できなかったが、目の前の少女は実にシンプルで解わかりやすいものだとシグマは冷静に考えた。

戦えば自分は死ぬ。
簡単な答えだ。
これまで数多あまたの戦いを潜くぐり抜ぬけて来た自分の経験と本能が、目の前の少女の強さを肯定している。
ならば、この身は運命に任せるしかあるまいと、シグマはあっさりと死を受け入れた。
しかし、死を受け入れたというのは、決して生を諦めたわけではない。
シグマは『普段歩いている時よりも死ぬ確率が高い』という状況の中、なんとかして生き延びる方法はないかと冷静に思考し続ける。
つい先刻、影法師を名乗る船長に『神に抗あらがい続つづけろ、運命を受け入れるな』と言われた事もあるのかもしれないが、とにかく少年は、現状が限り無く死に近い崖の縁だと受け入れつつも、その死地を潜くぐり抜ぬける為ための思考をやめようとはしなかった。
そして、しびれを切らしかけたアサシンの少女が、再度問い掛けようとする直前、やっと彼は問いへの答えを口にする。
「……半分は、そうかもしれない」
「……半分、だと？」
「俺は魔ま術じゆつ師しとしては中ちゆう途と半はん端ぱだ。魔ま術じゆつ使つかいと蔑まれる事もある。聖せい杯はいを求めるかという問いについては、求めるべきかどうかまだ迷っている」
「……」
沈黙するアサシンに、逆にシグマは問い掛けた。
「今度はこちらの質問に答えて欲しい。君は、その問いで何を判断するつもりだ？」
「貴方あなたが、敵かどうかを見み極きわめる」
「ここで敵対はしたくない。君のマスターと交渉させては貰もらえないだろうか」
「……私に、マスターなどいない」
アサシンの少女の身体からだから、殺気を纏まとった魔ま力りよく

が溢あふれ出でる。
　何か不味まずい事を聞いてしまったようだと考えていると、横から『船長』が口を挟んだ。
「小僧、だから言ったろ？　ウォッチャーの力を活用していれば、今のような不用意な言葉は出てこないぞ？　その小娘はアサシンだが、とある吸血種に喚よび出だされたのさ。それで、一旦そのマスターをぶち殺して……まあ、吸血種だから死んでないわけだが、現在絶賛絶縁中というわけだ。今から『俺は吸血鬼専門の殺し屋だ』って嘘うそをついてみるか？」
　横から何を大声でと思いつつ、シグマは言った。
「交渉しているのは俺だ。少し黙っていてくれ」
　だが、それを聞いたアサシンの少女が訝いぶかしんだ顔をする。
「……誰と、話している？」
「？」
「……サーヴァントか。マスターと口にした事といい、やはり、聖せい杯はい戦せん争そうの参加者か……！」
　アサシンは一瞬で数メートルの距離を飛とび退すさり、こちらに鋭い敵意を向けて来た。
　シグマは『交渉は無理か』と身構えつつ、背後から聞こえる絡から繰くり羽ば根ねの少年の声を聞く。「ああ、ごめん。誰も伝えていなかったようだけれど……。僕達を見る事ができるのも、声を聞くことができるのも、ウォッチャーのマスターである君だけなんだ。僕達はただ、ウォッチャーの影響で君の脳に直接浮かび上がる影法師なんだからね」
　──一番最初に伝えておいて欲しかった。
　恨み言を心中で呟つぶやきつつも、シグマの心はまだ冷静さを保っている。
　相手が如何いかなる動きをするのか、それを避けるチャンスがあるのか、周囲にあるテーブルや椅子を盾や目め眩くらましに使えるか、複数の思考を同時に脳内で処理しつつ、相手の動きを観察しようとし

た。
　だが、全身に黒いローブを羽織っており、筋肉や関節の動きで行動の先を読む事ができない。
　シグマが逃走経路を頭の中で思い描き始めた所で、アサシンの口元が動いた。

「……狂想閃影ザバーニーヤ……」

　同時に、背後から船長の声が響く。
「髪の毛が来るぞ、気を付けろ？」
「!?」
　シグマがその言葉の意味を理解すると同時に、本当にアサシンのフードの影から髪の毛が伸び、シグマの喉笛に絡からみ付つこうとした。
　間一髪でそれを避けると、アサシンが目を細める。どうやら、避けられるとは考えていなかったらしい。
　実際、船長の声が響かなかったら、自分の動きは間に合わずに髪の毛に首を搦からめ捕とられていた筈はずだ。
　避けた先にあった柱の一部が刻まれるのを見て、自分が今確実に『死地』を一つ潜くぐり抜ぬけたのだと実感する。
　同時に、また別の影法師──蛇の杖つえを持った少年が、シグマに声をかけた。
「彼女は十個以上の宝具を複数同時に展開するけれど、新しい宝具を使う瞬間に一瞬だけ動きが止まる。その隙を狙うのがチャンスだと思うよ？」
　──そもそも、自分程度の相手を殺すのに宝具を使う必要があるのか？
　無数に繰り出される髪の毛を避けつつ、そんな疑問を思い浮かべる。
　すると、それに答える形で船長の声が響ひびき渡る。

「お前じゃねえよ。サーヴァントの攻撃を警戒してんのさ。まあ、俺達影法師には攻撃する手段なんぞないわけだが」
　クツクツと笑う船長の言葉を聞いて、シグマは考える。
　──複数展開。
　──なら、あの髪の毛のように常時展開する宝具を発動させたのは、単発で技を撃った隙を狙われるのを避ける為ため……。
　──攻撃の為ための常時展開宝具があるのなら、防御用の宝具も……？
「あるよ？　自分の皮膚を特殊な水晶にして身を守る宝具がね」
　背後から、蛇へび杖づえの少年の声が聞こえた瞬間、シグマはアサシンの後方を見つめながら大きく声を張り上げた。

「今だ、突き刺せ！　チャップリン！」

「!?」
　突然の攻撃指示らしき声に、アサシンは警戒を引き上げて振り返る。
「……断想体温ザバーニーヤ……！」
　そして、『突き刺せ』という単語から物理攻撃を想像し、あらゆる刃やいばに対処できるよう、宝具を発動させるのだが──振り返った先には誰もおらず、魔ま力りよくの乱れのようなものも感じられなかった。
「！」
　罠わなだと気付いた彼女がシグマの方を向き直った瞬間──数箇所穴の空いた黒い筒が、自分の眼前まで迫っている事に気付く。
　刃やいばと化した髪の毛で斬きり払おうとした瞬間にその筒が破裂し、内部から真夏の太陽よりも眩まばゆい光が溢あふれ出だした。

　アサシンに向かってスタングレネードＭ８４を投げると同時に、シグマは窓を派手に割りながら外へと飛び出していた。

直後に破裂音と閃せん光こうが広がるが、その時には既に落下を始めている。

シグマとアサシンのいた部屋は二階であるが、シグマは器用に空中で体勢を立て直し、猫のような軽やかさで着地した。

──物理的なスタングレネードで、英えい霊れいの目や鼓膜を損傷させられるわけはないが、一瞬の目め眩くらましにはなった筈はずだ。

──気配も消した。このまま、どこかに一旦身を……。

相手が気配感知の魔ま術じゆつや能力を持ち合わせていない事を期待しながら立ち上がるシグマだが、その双そう眸ぼうに、信じられないものが映りこんだ。

閃せん光こう弾だんの爆発があった部屋を見て、両耳を押さえながらへたり込んでいる女性の姿が目に入ったのである。

──ッ！

服装からすれば民間人なのだが、こんな時間にこのような沼地の屋や敷しきの前にいる事は不自然だ。だとすれば、彼女こそがアサシンのマスターの吸血鬼とやらではないだろうか？

すると、背後から船長の声が響く。

「違うぞ？　ありゃアサシンのマスターじゃねえ。聖せい杯はい戦せん争そうに巻き込まれた、可哀かわい相そうな小さい小さいお嬢ちゃんさ」

「……」

少なくとも、『影法師』達は今まで嘘うそはついていないし、嘘うそをつく理由もない。

全てを俯ふ瞰かんするという『ウォッチャー』からの情報とやらを元に、シグマは数メートル先にいる少女を民間人と仮定する事にした。

そして、そんな『巻き込まれた民間人』に対してシグマが取った行動は──

「逃げろ！　ここにいると戦闘に巻き込まれる！」

感情の薄い声で、ただそう叫ぶだけだった。
「……」
叫んだ後で、後悔に囚とらわれる。
──何をやっているんだ。今の叫びで居場所がアサシンに摑つかまれた。
幼い頃に受けた教育の通りに生きるなら、目撃者の少女は速やかに消すか、あるいは彼女を囮おとりとして身を隠す事が正解だったろう。
──……ウォッチャーの影響を受けているというわけか。俺も、既に……。
「おいおい、人のせいにするなよ兄ちゃん」
背後からのんびりした『影法師』の声が聞こえてくるが、それを無視してシグマは少女に向かって走り出す。
「強盗があの家に立たて籠こもっているんだ。俺が囮おとりになるから、君は早く逃げ……」
台詞せりふを最後まで言うよりも先に、黒い影がシグマと少女の間に立ち塞がった。
「くッ……」
そして、アサシンが手刀をシグマに向かって突き出そうとした瞬間──その手を、横から現れた革ジャンの腕が摑つかみ止とめる。
「……」
沈黙したまま、その革ジャンの主を睨にらみ付つけるアサシン。
すると、その革ジャンを纏まとった赤毛混じりの金髪の男が、朗らかに笑いながら口を開いた。
「今のは急所を狙った手刀じゃなかったっぽいけど、殺すつもりは無かったか？」
「……この魔ま術じゆつ師しは、私への殺意が無かった。まだ殺すべきかどうかは判断できない。だが、聖せい杯はい戦せん争そうのマスターである以上、最低限動きを止める必要はある」

アサシンはそう言うが、革ジャンの男がシグマを見て言う。
「どうかな。アヤカを見ても敵意はまったく無かった。普通ならアサシンのマスターがアヤカだって思いそうなもんだが」
「……」
沈黙するアサシンを余所よそに、金髪の男はアヤカと呼んだ少女を立たせながらシグマに対して問い掛けた。
「俺はセイバーのクラスで顕けん現げんしたサーヴァントだ。よろしくな」
あっさりと自分の情報を口にした男が、不敵な笑みと共に言葉を続ける。
「とりあえず、話を聞かせて貰もらっていいか？　あんたが殺し合いを望むっていうなら、まあ、聖せい杯はい戦せん争そうだし、受けて立つ事も吝やぶさかじゃないが……」
相手の意図が分からず、シグマは警戒しながら相手を見たが、『影法師』の一人がシグマの方に手を置きながら言った。
「やめておけい」
「……」
日本の侍を思わせる格好をした老齢の影法師が、ニヤリと笑いながらシグマに告げる。
「目の前の男は、恐らくあさるとらいふるとやらの弾丸すら避ける速さを持っておる。今のお主では勝ち目がない。だが、死地を潜くぐる試練として挑むというのならば、某それがしは止めぬがな」
まるでいずれは勝ち目が生まれるかのような物言いにシグマは訝いぶかしんだが、やがて大きく息を吐き出し、セイバーと名乗った男に一礼した。
「客間がある。……案内する」

そして、わけのわからぬまま客間に向かうシグマに対し、横を歩いていた船長が不思議そうな顔をして問いかけた。
「しかし小僧よ、適当な英雄の名前を叫ぼうとしたんだろうが、なん

でよりにもよって喜劇役者の名前をあげた？　しかも、俺よりも新しい時代の人間をよ」
　おそらくは、先刻アサシンを騙だます時の叫びについてだろう。
　背後を歩く三人が全く気にかけていない事から、シグマは本当に『影法師』の声は自分にしか聞こえないのだろうと確信した。
　そこでシグマは暫しばし考え、小声で船長の言葉に答える。
「……偉人として、最初に思い浮かんだだけだ」
「……なるほど。クラシックな喜劇が趣味か。意外だな」
　チャーリー・チャップリンの知識についても『ウォッチャー』を通して世界から与えられているのか、船長はクツクツと笑い、彼が姿を消すと同時に、蛇へび杖づえを持った少年が慈いつくしむような目でシグマに言った。
「だったら、この戦争も笑って終われるように努力しましょう」
　シグマはその言葉に対して口ごもり、無言で足を速める。
　喜劇映画は何度も見ている。
　好きか嫌いかで言えば好きと言えるし、感心はするものの、心の底から笑った事があるかと聞かれると、シグマはどうしても頷うなずけなかった。
　自分が心から笑うという姿を想像する事ができなかったのである。
　先刻のセイバーが浮かべていた笑み。
　あれは、世の中の全てを楽しんでいるかのような笑顔に思えた。
　死してなお戦い続ける英えい霊れいが、何故なぜあんな笑顔を浮かべる事ができるのか──
　考えても答えを出す事ができず、シグマは静かに心を殺す。

　笑顔を浮かべる者達に対する嫉妬も憧れも、今の自分には無用なものだと思いながら。
　そもそも、自分に笑う資格などあるのだろうか？
　根本的な疑問を心に抱きながら、彼は新たなる試練に足を踏み入れようとしていた。

全てを見通すと言うウォッチャーと契約を結びながら、自分の心一つ見通せぬ事に僅かな苛いら立だちを感じながら。

改めて、シグマは思う。
自分は何も信じていない。
神も仏も、悪あく魔まさえも。
あるいは、そのいずれかに自分を委ねれば笑う事もできるのだろうかと考えたが──
自分自身すら信じる事ができない自分には、何も捧ささげるものがないという事に気が付いた。
己おのれの中に、『これは捧ささげる価値があるものだ』というものを、シグマはどうしても見み出いだす事ができなかったのである。

食肉工場地下

「殺しても構わない、か。その言葉を受け入れる人間が、果たしてどれだけいると思う？」
　表情を変えぬまま、闖ちん入にゅう者しゃであるホムンクルスに告げるバズディロット。
　一方で、彼女は心底不思議そうな顔をして首を傾かしげた。
「え？　私の言う事を受け入れないなら、その時点で人間扱いしなくてもいいと思うけど……」
　冗談や皮肉には聞こえない。
　この時点で話が通じる気配は全くなかったのだが、バズディロットは尚なおも無表情のまま、相手の情報を探る為ために会話を続ける事にした。
　アルケイデスは実体化したまま背後に控えている。
　マスターの方が前に出ているのも妙な話だが、アルケイデスの主要武器が弓である為ために背後から全体を見渡せた方が良いいとマスター共々判断したようだ。
「それがアインツベルンのホムンクルスの考え方か？」
　高等なホムンクルスは、人間よりも己おのれを上位と考える可能性はある。
　とはいえ、アインツベルンについてはフランチェスカから色々と聞かされてはいるが、ホムンクルスの思想傾向とはズレがあるような気がするし、そもそも、彼女が身体からだに纏まとっている気配はバズディロットの知るホムンクルスのそれとは違っていた。
「ああ。アインツベルンって、この『器』を造った人達の事？　私達

ほどじゃないけど、まあ、がんばった方なんじゃない？」
「……器だと？」
「そ、この器が無かったら、他の人間に無理矢理憑ひよう依いする事になってたと思うけど……そうすると魂が混じって記憶や人格にブレが起きるところだったわ。この身体からだはそれがないからいいのよ。まるで、最初から神の器にするために生み出されたみたいね」
　神の器。
　その単語を女が口にした瞬間、背後の空気が冷えるのをバズディロットは感じ取った。
　アルケイデスが弓を握り締めながら、女に尋ねる。
「……神の器、だと？」
「そうよ？」
「ならば、貴様は神だとでも言うつもりか？」
「女神だけどね……って、ちょっと⁉」
　言うと同時に、アインツベルンのホムンクルスが目を見開いた。
　そして、バズディロットの横を轟ごう音おんが通り過ぎる。
　疾風が部屋の中に湧き起こり、死を纏まとった矢が工房内の魔ま力りよくを巻き込みながら、『女神』と名乗った女へと突き進む。
　女は焦あせった顔を見せるが、即座に手から魔ま力りよくを放出してその矢を包み込んだ。
　そして、まるで空中に見えないレールが敷かれたかのように、矢はグルグルと何十周も彼女の周囲を回り始める。
　そして勢いを殺さぬまま、アルケイデスの放った矢がバズディロットへと撃ち返される。
「……」
　バズディロットは僅かに首を横に傾け、紙一重でその矢を躱かわした。
　衝撃波が皮膚や鼓膜、眼球を襲うが、魔ま術じゆつで強化された体表が力ちから尽ずくで弾はじき返かえす。
　更に、後ろにいたアルケイデスがその矢を片手で掴つかみ取とり、

空気の震えが僅かに遅れて魔ま術じゆつ工こう房ぼうの中を駆け巡った。
　一連の流れを観みたバズディロットは、僅かに目を細める。
　──特別な魔ま術じゆつではないな。純粋な魔ま力りよくのコントロールだけで、アルケイデスの矢をいなしたか。
　この時点で、バズディロットもアルケイデスも、目の前の女をホムンクルスの魔ま術じゆつ師しなどとは考えていなかった。
　正体は分からないし相手の『女神』という自称が正しいのかどうかも判断はできないが、少なくともサーヴァントに匹敵する力は持っている『何か』だと考えていいだろう。
　背後にいるアルケイデスも同じ判断をしたようだが、熱い憎ぞう悪おの揺らめきが魔ま力りよくの経路を通して伝わって来る為ため、バズディロットは如何いかにしてアルケイデスを御すかを思案した。
　そんなバズディロットを余所よそに、自称女神と復ふく讐しゆう者しやが言葉を交わす。
「礼儀がなってないわね。神を射殺そうとするなんて、東の皇帝並に傲慢なんじゃない？」
「礼儀知らずはどちらだ。我が眼前で女神と名乗る女よ。何をもって我らが拠点に土足で踏みいったのか答えて貰もらおう」
「あら、これって聖せい杯はい戦せん争そうなんでしょう？　私はマスターでもサーヴァントでもないけれど、どこかの陣営に味方するのは自由だし……」
　そこでホムンクルスの目が妖しく輝き、手から矢のような形の光弾を大量に生み出した。
「気にくわない対抗勢力を排除する手伝いをするのは、当然でしょ？」
　軽い調子で吐き出される言葉だが、その声に感情らしき感情は乗っていない。
　まるで人間のふりをしようとした機械人形のような雰囲気を女が匂わせた瞬間、矢の形をした無数の魔ま力りよくの塊が、バズディロッ

トとその背後にいるアルケイデスへと襲いかかった。
　だが――
　その光弾はバズディロットの眼前で消失し、全く違う場所の壁から現れたかと思うと、そのままホムンクルスの女へと飛来する。
「……」
　無言のまま、女は一度だけ手を下に払った。
　すると、全ての矢の軌道が下へとねじ曲げられ、魔まり力よくを霧散させながら床に辿たどり着つく前に消失してしまう。
「く、空間の……迷宮化……」
　それまで女神を名乗る存在の後方、入口の影に隠れながらこちらを覗のぞいていた魔ま術じゆつ師しがそんな言葉を口にした。
　女神は仲間らしきその女魔ま術じゆつ師しの言葉を聞き、不敵な笑みと共に口を開く。
「へえ、やっと結界を発動させたの？　目の前に来てから迷宮を造るなんて、随分とのんびりしてるのね」
　小馬鹿にした調子の女神に対し、バズディロットは淡々と答えた。
「いいや？　これが本来の使い方だ」
　バズディロットは無表情のままで両手を広げると、両手から魔ま力りよくを放出させる。
　すると、地下倉庫の天井がうねりながら開き、青みがかった朝の空が見えた。
　そして、食肉工場全体が捻ねじれながら、全く別の形へと変貌していく。
　次の瞬間、螺ら旋せん状じように捻ねじれ開ひらいた天井から、次々と凶悪な魔ま獣じゆうが現れて自由落下を開始した。
　まるで、工場自体が巨大な肉にく食しよく獣じゆうと化して、内部にいる者達を内側から喰くらおうとしているかのように。

　その様子を見て、それまでフィリアの背後に隠れていたハルリが呟つぶやきを漏らす。

「……そ、そんな……こんな大規模な防衛機構……」
　──一部を異界化させてる……？
　──こんな規模の防衛機構が作れるなら、なんで最初から……。
　ハルリがそこまで考えた所で、フィリアが口を開いた。
「ふーん。なるほどね」
　降ってくる魔ま獣じゆう達を面倒臭そうに見つめながら、淡々と相手の工房の特性について考える。
「侵入を防ぐ為ためじゃない。この工房、最初から中に来た奴やつを出さないようになってるみたい。……造った奴やつの性格の悪さが窺うかがえるわね」
　フィリアはそこでニヤリと笑うと、そのまま落下してくる魔ま獣じゆう達に手を翳かざし──派手な魔ま力りよくの矢を撃ち放った。

×　　　　　　　　×

コールズマン特殊矯正センター

「……工業地区の工房が作動した？」
　部下の報告を受け、ファルデウスがモニタールームの一角に足を運んだ。

　現在、彼のサーヴァントであるアサシンはガルヴァロッソ・スクラディオ暗殺の為ため、西海岸にあるスクラディオ・ファミリーの本拠地に向かっている。
　故ゆえに、ファルデウスは現在無防備な状態である為ため、サーヴァントが戻るまでは工房の防衛と情報収集に徹底するつもりだった。
　何も大きな動きが無ければ良いと考えていたが、その祈りは世界に届かなかったらしく、早朝から慌ただしい動きがいくつもあった。
　まず、警察署を襲撃したアサシンらしきサーヴァントが、シグマが

現在拠点としている屋や敷しきに戻ってきて、あまつさえ、そこにセイバーとそのマスターらしき女がやってきて、現在客間で寝ているらしい。
　──わけがわからない。
　始末できるかとシグマに尋ねた所、アサシンが自分を警戒しているので難しいとの答えが返ってきた為ため、とりあえず相手の情報を探りながら、英雄王や、その親友にして同等の強さを持つと推測されるランサーなどを相手どる為ために共闘を持ちかけるように指示を出す。
　しかし、その際にますますファルデウスは混乱する結果となった。
　結局自らが契約したサーヴァントの正体は分かったのかと尋ねた所、数秒の沈黙を置いて返ってきた答えが、あまりにも常識の埒らち外がいだったのである。

『……チャップリンです。ランサーのチャーリー・チャップリン。それが自分の喚よび出だした英えい霊れいです』
「……。……すまない、もう一度言ってくれないか？」
『ランサーのチャーリー・チャップリンです。宝具などは追って聞き出します。令れい呪じゅで強制的に聞くのは得策ではないと判断しましたので。それでは失礼します』

　そのまま通信を切られた為ため、ファルデウスは暫しばし頭を抱えた。
　──ちゃっぷりん。
　──……なんだそれは。……ありえるのか!?
　──ランサー？　喜劇王が？　何故なぜ？
　──嘘うそをついている？　いや、しかし……それにしてもチャップリンはないだろう。
　──一体……この聖せい杯はい戦せん争そうに何が起こっているんだ……？

ひとしきり困惑していた所に、件くだんの『スクラディオ・ファミリーの複ふく合ごう魔ま術じゅつ工こう房ぼうが発動した』という連絡がもたらされたのである。
「……だから、フランチェスカさんに人選を任せるのは反対だったんです」
ファルデウスは当初、時と計けい塔とうの各派閥と裏取引をして、それぞれから魔ま術じゅつ師しを一時的に引き抜く事を考えていた。
創造科バリュエのオーガスタス・ヘンリク・アスプルンド、鉱石科キシュアのクラスト・レニー・ウェグナー、全体基礎科ミステイールのバレイア・サイクルフィ、そして動物科キメラのミザリア・クロウラムなど、候補はいくらでもいた。そうした魔ま術じゅつ師しらしい魔ま術じゅつ師し達、それでいてこちらで完全にコントロールを握れるレベルの者達を裏から操る事をファルデウスは当初目もく論ろんでいたのである。
しかしながら、全体の方針が時と計けい塔とうを完全に敵に回す方向になった為ため、フランチェスカの仲介で様々な『はぐれ』がマスターとして参戦する結果となった。
その中ではある程度ファルデウスと繫つながりがあったシグマでさえ、先刻のような混乱をもたらす始末である。
更にはハルリがアインツベルンのホムンクルスに連れられてバズディロットの工房に向かったという報告を聞いた時には、『アサシンを遠方にやったのは失敗だったか』と嘆いた程だ。
──令れい呪じゅを用いれば強制転移も可能とはいえ、果たして西海岸からここまで可能なのか？
本物の聖せい杯はい戦せん争そうならともかく、これは様々な横紙破りを重ねに重ねた偽りの儀式であり、どのようなイレギュラーが起こるのかは黒幕側のファルデウスでも予測できない。
──しかし、ハルリ・ボルザークめ……。バズディロットに共闘を持ちかけにいったのかと思えば、まさかいきなり戦闘を仕掛けたのか？
──それとも、アインツベルンのホムンクルスの仕業か……。

頭が痛いと溜ため息いきを吐いた所で、部下である女性魔ま術じゆつ師し、アルドラが声を掛けてきた。
「工房を最大限に展開しているようです。同時に工場地区全体に人払いの結界を張ったようですが、念の為ためにその更に外周部にも人払いの処置をしています。少し前に、警察署長から『クラン・カラティン』の何名かを向かわせるという連絡も来ました」
「了解です。下手へたに近づかない方がいいですよ。纏まとめて工房に食われかねない」
「……あそこまで巨大な工房に結界と異界化処理を施すとは、信じられませんね」
「ああ、あれは、異界化に使う面積はそれほどではありません」
　部下の疑念に対して、ファルデウスが軽く種明かしをする。
「冬木の第四次では、かの『先代』ロード・エルメロイがホテルの通路の一部を異界化させる程の迷宮を自らの工房に造り上げたと聞きましたが、彼ほどの魔ま術じゆつ師しが自分に最適化させた魔ま力りよく炉ろを三基持ち出しても、それが限界です。太古の高名な迷宮魔ま術じゆつ師し、コーバック・アルカトラスならともかく、魔ま術じゆつ師しが町の一区画全てを異界化させる事などとてもとても」
　首を振りながら、ファルデウスは淡々と状況を説明した。
　あるいは、自分の知る常識を語る事で、現在の混乱から自意識を護まもろうとしているのかもしれない。
「バズディロットは工房を起動させたに過ぎません。実際はスクラディオ・ファミリーの魔ま術じゆつ師し達の複合芸術ですよ。フル稼か働どうさせているのだとしたら、バズディロット本人も外には出られないかもしれませんね」
「複合芸術、ですか」
「ええ、複数の魔ま術じゆつ師し達が己おのれの得意分野をより合わせた産物ですね。異界化、幻術、結界、魔ま獣じゆうの設置、それぞれの魔ま術じゆつが複雑に絡からまりあっています。一つ一つの工房としての防衛力は『先代』ロード・エルメロイに及びませんが、尋常

じゃない魔ま力りよくを持つバズディロットが他人の工房まで無理矢理起動させる事で、あれだけの芸当を可能にしているんですよ」
　モニター越しに蠢く食肉工場を観みながら、ファルデウスが言葉を続けた。
「あの食肉工場だけではありません、周囲の工場も全てスクラディオ・ファミリーの魔ま術じゆつ師し達の手が入っています。それらが全てあの食肉工場の魔ま術じゆつ工こう房ぼうを補佐する形で機能しているわけですから、腕うで利ききの魔ま術じゆつ師しでもあの状態の工房から脱出するのは困難でしょうね」
「では、アインツベルンのホムンクルスとハルリ嬢には為なす術すべが無いと？」
「まさか」
　つい先刻まで工房を賞賛していたのが嘘うそのように、ファルデウスはあっさりと部下の言葉を否定する。
「彼女達だけで入り込んだならともかく、ハルリさんが喚よび出だした英えい霊れいがいるなら話は全く変わって来ます。先述の冬木のホテル工房はホテルごと破壊されたそうですが、魔ま術じゆつに造ぞう詣けいが深い英えい霊れいが迷宮に挑んだならば、遅かれ早かれ突破されていたんじゃないですかね」
　ファルデウスのこの意見は、10年前までの彼自身の考えとはまるで逆のものだった。
　如何いかに英えい霊れいといえども、現代の迷宮化した工房の突破は困難であり、何らかの搦からめ手てを用いて突破するものなのだろうと。
　だが、祖先が残した人形のデータ──冬木の第三次聖せい杯はい戦せん争そうの『記憶』に触れ、そして実際にハサン・サッバーハという英えい霊れいと接触した今なら、実感できる。
　あの程度の迷宮ならば、優秀な力を持った英えい霊れいには通用しない。
　──まあ、冬木の三次の『記憶』にあった、あの弱々しいアヴェン

ジャーならば無理かもしれないが……。
　そんな事を考えつつ、ファルデウスはモニターに目を向ける。
「ともあれ、工房を突破する為ためにサーヴァントを喚よび出だすならしめたものです。どのような能力を持っているのか観測する良いい機会ですからね」
　食肉工場を俯ふ瞰かんで見下ろす使つかい魔まの視界がそのまま映るモニターから目を離さぬまま、ファルデウスはもう一つの案件について部下に通信を送る。
「……『家畜』より『イバラ』へ。そちらの様子はどうですか？」
『動きはありません。屋や敷しき内部の人間らしき熱源反応は二つ。魔ま力りよく反応からすると、サーヴァントも二柱顕けん現げんしているようです』
「二柱……シグマの喚よび出だした英えい霊れいも含めると三柱の英えい霊れいがいる筈はずですが……誰か霊体化を？」
『解わかりません。二階の窓からセイバーらしきサーヴァントは確認しましたが、魔ま力りよく計測に妙な揺らぎが……まるで、複数の霊体が重なり合っているような……』
　口ごもる部下に対し、そのまま報告の詳細を聞こうとしたファルデウスだったが——
「揺らぎ？　どういう事ですか、詳しい数値を……。……？」
『どうしました？』
　突然言葉を止めた事に部下が訝いぶかしむが、ファルデウスの耳には届かない。
　彼の視線の先——食肉工場の監視映像の中で、有り得ないものが蠢うごめいているのが見えたのだ。
「……『家畜』より『イバラ』へ。その現場には最低限の人数を残し、すぐに工場地区に向かって下さい」
　最低限の指示を出して通信を終了し、ファルデウスはモニターを睨にらみ付つけた。
　ハルリがなんの英えい霊れいを喚よぶつもりだったのかは、ファル

デウスも知っている。
　何しろ、国を介して触媒を用意したのはファルデウスなのだから。
　しかし、今しがた観みた『何か』は、彼が予想していたものとは全く違う姿をしており、そもそも英えい霊れいというには、人よりも獣けものや昆虫に近い風貌をしていた。
　更には全身が歯車やピストン、ワイヤーやケーブルで包まれており、小さなプレハブ程度ならば踏みつぶせるであろう程に巨大な『それ』を観みて、ファルデウスは目を細めながら独り言を口にする。

「ハルリさん……貴女あなたは一体、何を喚よび出だしたんですか……？」

×　×

数分前　食肉工場

「マスターよ。この結界はこちらの動きも阻害するのか？」
　言葉こそ冷静だが、アルケイデスはきっかけさえあれば全力で動き出すつもりのようだ。
　何しろ彼の不ふ倶ぐ戴たい天てんの敵と言える存在──つまりは『神』の一角だと名乗る女が現れたのだから、それも当然のことだろう。
　バズディロットはそれを諫いさめも止めもせず、女とアルケイデスの間に立つ形のまま淡々と語りかける。
「指向性はあるが万全ではない。だが、お前なら多少の阻害は問題あるまい？　女神を蹂じゆう躙りんする力があるというのなら、ここで俺に示して見せろ」
「……言われるまでもない」
　そしてアルケイデスは、『空から降り注ぐ魔ま獣じゆうの群』をあしらい続ける女神へと一撃を加えるべく、変形しつつある食肉工場の

上部へと移動を開始した。
　同時にバズディロットも動き出す。
　懐ふところから無骨な拳銃を取り出し、ホムンクルスの女と共に現れた女魔ま術じゅつ師しの方にゆっくりと歩み始めた。

「あ……」
　ハルリは自分の方に向かってくる魔ま術じゅつ工こう房ぼうの主と目を合わせ、身体からだから血の気が失うせる感覚に襲われる。
　人を殺す為ためだけに生み出された合成魔ま獣じゅうの成れの果てといった雰囲気を纏まとうバズディロットの視線を受け、ハルリは自分が戻れない場所に来てしまった事を改めて実感した。
　物理的にも外に戻れず、立場的にも後戻りはできない。
　流されるがままにここに来てしまった自分に後悔しつつも、その一方で、どのみちフィリアが居なければ失った命だとも考えた。
　ならば、拾った命で何をするべきか？
　そう考えた時に思い浮かぶのは━やはり、魔ま術じゅつ世せ界かいへの復ふく讐しゅうだった。
「……」
　己おのれの『過去』を思い出しながら、ハルリの目から怯おびえが薄れ、次第に冷静になり始める。
　魔ま術じゅつ世せ界かいを憎む少女ではあるが、この感情の切り替えができる時点で、彼女は魔ま術じゅつ師しとしての才があると言えたのかもしれない。
　ともあれ、今の彼女の心の内にあるものは、この場を切り抜ける為ために、自分に与えられた全てのものを使う覚悟だった。
　━ああ、そうだ。
　━最初から、この世界で暴れるだけ暴れて消えるつもりだったのに。
　━私は何を怯おびえていたんだろう。
　心を切り替えた事に気付いたのか、バズディロットが歩みを止め、

ハルリに銃を向けながら問い掛ける。
「ここに来たのは、お前の指示か？」
「……フィリアさんの提案です。私は……ついてきただけ」
「そうか、『あれ』はフィリアというのか。……『あれ』は、何だ？」
　やはりフィリアの異常性は気になるらしいバズディロットに対して首を振り、ハルリは自分に向けられた銃口に対して神経を研ぎ澄ませながら言った。
「私の恩人です。解わかる事はそれだけですし、今は、他に何も必要ありません」
　それが聞こえていたのか、離れた所で魔ま獣じゆう達を消し潰していたフィリアがからころと笑う。
「あら、さっきまでおっかなびっくりだったのに、随分と嬉うれしい事を言うじゃない。まあ、私の魅力に気付いたなら、確かに私を理解する必要なんかないわ」
　そんな彼女の死角から、何処どこかより飛来した矢が接近する。
　だが、先刻と同じように彼女の纏まとう濃密な魔ま力りよくが軌道を逸そらせ、そのまま降り注ぎ続ける魔ま獣じゆうの群へと投げ放った。
　矢の当たった魔ま獣じゆうが粉々に砕け散り、その血ち飛沫しぶきに隠れる形で、アーチャーと思おぼしきバズディロットのサーヴァントの矢が再度飛来する。
「何度やっても無……!?」
　言いかけた所で、フィリアは言葉を呑のみ込こむ。
　いつの間に撃ち放っていたのだろうか、彼女の目に映ったのは、開いた天井から覗のぞく空より飛来する、数十本の矢だった。
　だが、正確にもフィリア目がけて落ちてくるその軌道を観みるに、ただ単に無数の矢を天空に撃ち放って落ちてくるのを待っただけとは思えない。
　そして、フィリアは気付く。

青銅の矢がこちらに落下しながら徐々に変貌を遂げ、金属の翼と嘴くちばしを持った鳥へと姿を変えつつあるという事に。

「あれは……ステュムパリデスの鳥西の戦神の使い魔……？」

矢の一本一本が嘴くちばしと翼、そして爪を青銅に包んだ巨大な鳥へと変化する様は幻想的ではあったが、その鳥が全て殺気を纏まといこちらに向かっているため、見とれている余裕など欠片かけらも無かった。

「……へえ、やるじゃない」

感心したような言葉を吐きつつも表情を消したフィリアに、無数の鳥が襲いかかる。

同時に、ハルリがそちらに意識を奪われ――

視線を逸そらした女魔ま術じゆつ師しの心臓目がけ、バズディロットの拳銃から銃弾が撃ち放たれた。

だが、ハルリにその銃弾が届く事はなかった。

かなり高位の防ぼう御ぎよ魔ま術じゆつも突破するように細工されたバズディロットの銃弾が、見えない壁に弾はじかれたのだ。

そして、次の瞬間――『それ』は工房の中央に顕けん現げんする。

バズディロットとハルリの間の空間にノイズのようなものが走ったかと思うと、バチバチと音を立てながら錆さび色いろの巨大な鉄塊が姿を現し、二人を隔てる壁となって立ち塞がった。

一方で、別の箇所に現れた鉄塊がフィリアの上空を薙なぎ払はらい、矢より生まれし青銅の鳥達をたった一撃で纏まとめて砕き潰してしまう。

ノイズは広範囲にわたって広がり、やがて巨大な影が工房の中にその全貌を現した。

何よりも異様なのは、その大きさだ。

ハルリの眼前に現れたバーサーカーは、彼女が目視していた時よりも、遙はるかに巨大な、それこそ怪物とでもいうべき大きさへと変貌

を遂げていたのである。

×　×

とある地下施設

　日の光が差し込まない部屋の奥で、馬の世話をしていた女がピクリとその動きを止める。
「どうしたの、ポルテちゃん。今、ちょっと魔ま力りよくが乱れたけど」
　隣の部屋から女性の声が聞こえ、ポルテちゃんと呼ばれた女が困惑しながら言った。
「今……父の愛鳥たちの気配を感じたのだが……すぐに消えてしまった」
「愛鳥？」
「ステュムパリデスの鳥……かつて父である戦神が愛めでていたと言われる魔ま鳥ちようだ。……あの男が半島から追い払ったと聞いていたが……」
「ああ、じゃあその『彼』が召しよう喚かんしたんじゃない？　貴女あなたの帯も持ってたんでしょ？　まあ、気配が消えたなら、無理して向かわない方がいいと思うけど」
　あっさりと答える声に、ポルテと呼ばれた女は暫しばし考えた後に小さく頷うなずく。
「そうだな。安心してくれマスター。私はもう独断では動かない」
　凜りんとした調子でいった女は、それから少し頬を赤らめて言葉を続けた。
「それとマスター……やはり私の事を『ポルテ』と呼ぶのは……」
「ええ？　いいじゃない。ヒッポリュテだからポルテちゃん。あ、ヒッポちゃんの方が良かったかな？」
「……ポルテでいい」

呆あきれたように溜ため息いきを吐くライダーのサーヴァント、ヒッポリュテ。
　ポルテという渾名あだなを嫌がっているというよりは、純粋に照れているといった様子が窺うかがえた。
　そんな彼女は、不意に真顔になって、改めて気配のした方角に目を向ける。
　普段のヒッポリュテは、そこまで気配感知に長たけているわけではなかった。
　だが、身につけた宝具、父から受け継いだ戦帯と類似の気配に対して敏感になっているのだろう。
　恐らくはアルケイデス絡がらみで戦闘が起こっていると考えたポルテは、気を引き締め直して自らの馬へと向き直った。
　いずれ決着をつけねばならぬ大英雄。
　その『成れの果て』となった復ふく讐しゆう者しやの事を思いだし、食いしばった歯を軋きしませながら。

×　　　　　　×

食肉工場

「あら、私の方もついでに護まもってくれたの？　良い子ね」
　潰れた青銅の鳥の群れを観みて薄く笑いながら、現れた『それ』を見上げるフィリア。
　現れたのは、それまで姿と気配を隠していたハルリのサーヴァントである。
　だが、その姿を見て誰よりも驚いたのはハルリだった。
「え？」
　──さっきまでより……もっと大きくなってる？
　ここに向かう途中、ビルの壁を歩いている時は象一頭ぐらいの大きさだった。

しかし現在は、その象を動物園に運搬する巨大トレーラーをも抱え込めそうな巨大な機械蜘蛛ぐもへと変貌と遂げている。
大きな動きを見せていないのにもかかわらず、何故なぜか回転している歯車の音や金属の擦こすれ合あう音が響き、目には相変わらず爛らん々らんと白熱の明かりを煌きらめかせていた。
そして、最初にハルリが聞いたのと同じ、針先の錆さびたレコードのような声をバズディロットの魔ま術じゆつ工こう房ぼう内に響かせた。
「ＴＴＴＴＴっっＫＫＫ……てＴＴＴてててＴＥてててててＫＫＫＫＫききききき」
ギチギチと身体からだを震わせながら何かを訴えるように鳴くバーサーカー。
ハルリが困惑していると、フィリアが微笑ほほえみながらこちらに告げる。
「さあ、ハルリ！　貴女あなたがマスターなんだから、さっさと命じなさい？」
「え……？」
「敵は誰かって聞いてるのよ？　放ほって置おいたら、貴女あなたと私以外の子を全部敵だと思って街を滅ぼしちゃうと思うけど、いいの？」
「……!?」
そう言われたハルリは、慌ててバーサーカーに向き直る。
敵を示せ。
バーサーカーの爛らん々らんと輝く目はそう告げており、今もバズディロットと自分の間に立ってこちらを護まもっている。
バズディロットはその後数度銃弾を発射し、時には魔ま術じゆつ的てきに生み出した屈折などを利用して死角からハルリを狙うが、バーサーカーの身体からだから伸びるケーブルがその銃弾を打ち払う。
そして、ゆっくりとその姿を空気の中に消して行く。
同時に音も消え去るが、今しがたまであった『圧力』はまだ工房内

部に残っていた。
　──さっきの、街中でフィリアさんがやった隠避とは違う。私にも見えない。
　──この英えい霊れいは、自力でも姿を消せる……？
　ゴクリと息を呑のみながら、ハルリは己おのれがとんでもない英えい霊れいと契約を結んだことを実感した。
　フィリアは言った。敵は誰なのかをこのバーサーカーに命じろと。
　敵対するマスターとはいえ、人を殺せるかどうかを試されているとも感じた。
　ハルリは考える。
　魔ま術じゆつ師しらしく心を殺し、己おのれの心の震えは止めた。
　ならば、ここで自分は命じるのか？
　人を殺せと。
　魔ま術じゆつ師しのように、現実の倫理観から己おのれを開放させるのか？
　それとも、表向きはまだ自分が人間であるというように、正当防衛という理由を捲まくし立たてるのか？　自分から聖せい杯はい戦せん争そうに身を投じたのに？
「……」
　僅かに逡しゆん巡じゆんしたのち、彼女は姿の見えぬバーサーカーへと向かって叫んだ。
「バーサーカー！　敵はこの魔術工房です！　滅め茶ちや苦く茶ちやに……壊して下さい！」
　ギチギチと音が鳴り響き、命じられたことを喜ぶかのように周囲にバーサーカーの軋きしみ声ごえが響ひびき渉わたる。
　すると、いつの間にかハルリの横に跳躍してきていたフィリアがそっと肩に手を乗せる。
「ひやッ!?」
　驚きの声をあげるハルリに、フィリアは目を細めて優しい笑みを向けながら言った。

「ふーん。上手うまく逃げたわね。直接殺せとは言わないんだ」
「……わ、私はそんなつもりは……」
「ああ、勘違いしないで？　責めてるわけじゃないのよ？」
　フィリアはニコニコと笑いながら、生き残った魔ま獣じゆうを次々と魔ま力りよくの矢で打ち払っていく。
　そして、笑顔を全く崩さぬまま、淡々とした調子でハルリに告げた。
「だって、もしもハルリがあそこで簡単に人を殺せなんていう子だったら、もう人間じゃなくて魔ま術じゆつ師しの範はん疇ちゆうだから……――――――――」
　台詞せりふの後半に、破壊音が被かぶさる。
　不可視となったバーサーカーが暴れ始めたのだろう。周囲の壁や床が物もの凄すごい勢いで拉ひしやげ、一部が異界化した通路の出入り口を力技で破壊していた。
「さ、あとはバーサーカーに任せて、貴女あなたは逃げなさい？　下手へたに殺すと『泥』が飛び散るから、あの怖い顔の魔ま術じゆつ師しと歪ゆがんだ英えい霊れいは慎重に始末しないとね……」
　そんな事を言いながら、再び跳躍して瓦が礫れきの合間に消えて行くフィリア。
　ハルリはそんな彼女を見ながら、全身に冷や汗を滲にじませた。
　言われるまでもなく、異界化の解けた出入り口へと身を躍おどらせる。
　バズディロットやあの弓兵らしきサーヴァントからではなく、まるでフィリアから逃げるかのように。
　彼女には聞こえていたのだ。
　破壊音が響く中で告げられた、笑顔のフィリアが言い放った言葉の最後の部分が。
　―「だって、もしもハルリがあそこで簡単に人を殺せなんていう子だったら、もう人間じゃなくて魔ま術じゆつ師しの範はん疇ちゆうだから……」

──「正直、生かしておく価値なんてないもの」
　あれは冗談などではなく、本気の言葉だった。
　それを確信したハルリは、恩人であるフィリアに感謝しつつも、同時に深く恐怖し、これまで何度も考えてきた疑問を再燃させる。
　──私は一体……何を喚よび出だしてしまったんだろう。

「……」
　──霊体化というわけではないな。
　バズディロットはそう判断する。恐らくは、光学迷彩的な特殊能力だろう。
　音まで消しているのは英えい霊れいのスキルか、あるいはあの自称『女神』が何かしているのかもしれない。
　この工房内で霊体化していたならば、サーヴァントといえども工房の結界や魔ま術じゅつで大きなダメージを負っていた筈はずだ。そう判断したバズディロットは、あの英えい霊れいなのか怪物なのか解わからない『何か』は、最初から姿と音と魔ま力りょくを遮断していたものと推測した。
　一呼吸置いた後、バズディロットは冷酷に決意し、念話でアルケイデスに告げる。
『恐らくこの工房は破壊されるだろう。全力を出して構わん』
『良いいのか？　あの装置なども失われるが』
『問題ない。あの装置は既にファミリーで量産可能だ』
　アルケイデスの問いに、バズディロットはあっさりと言い切った。
『今から魔ま力りょく結けつ晶しょうを増やしても焼け石に水だしな。現存の結晶は工房の防衛機構を発動させた時点で退避させているから安心しろ。出し惜しみをして全てを失っては、スクラディオ・ファミリーに顔向けできん』
　淡々と何を切り捨てるかを決意し、バズディロットもまた己おのれに身体強化魔ま術じゅつを施し、瓦が礫れきが飛散する中を跳躍する。

『どのみち、ここまで派手になった以上はファルデウスもオーランドも動くだろう。お前が派手にやった所で何も変わらん』
『真偽はともかく、相手が女神を名乗る者である以上、私は魔ま術じゆつの秘匿に気を遣うつもりはないぞ』
『構わん。いざとなればこの街ごと処理する手て筈はずは整っているそうだ。フランチェスカや警察署長はともかく、ファルデウスは必要とあらばすぐにそれを発動させるだろう』
　バズディロットはどこまでも淡々とした調子で、アルケイデスに問い掛けた。
『たかだか八十万人の犠牲だ。魔ま術じゆつの秘匿と引き替えならば時と計けい塔とうも良しとするだろう。だが、その覚悟はお前にあるか？』
　試すような言葉に、アルケイデスは迷い無く答えた。
『無論だ。神々を滅ぼす為ためならば、その程度は正当な代償だ』
　そして、アルケイデスは力を開放する。
　神を名乗る女と、その僕しもべと思おぼしき魔ま術じゆつ師しとサーヴァントに鉄てつ槌ついを下す為ために。
　たとえそれが、自分の知る仇きゆう敵てき達とは違う、異境の神々だとしても。

×　　　　　　　　　　×

沼地の屋や敷しき

「窓から顔を出すなよアヤカ。狙撃は怖いぞ？　俺もピエールの狙撃で死んだからな」
「頼まれても出さないよ」
　屋や敷しきの奥で、身を潜めながら状況を確認するアヤカとセイバー。
　シグマから『屋や敷しきが特殊部隊に囲まれている』という話を聞

いたアヤカは、最初は警察の追っ手であり、ＳＷＡＴか何かだろうと考えた。
　だが、シグマの話によると、この聖せい杯はい戦せん争そうを仕組んだ魔ま術じゆつ師し達の手駒だという。
「アメリカ政府の一部が魔ま術じゆつ師しと結託って、どこのファンタジー映画？」
「そう言うなよ、アヤカ。権力者と魔ま術じゆつ師しはいい組み合わせなんだぞ？　偉大なる騎士王の影には、それを生み出した花の魔ま術じゆつ師しありって奴やつだ。俺にも宮廷魔ま術じゆつ師しというわけじゃないが、妙に付きまとってくる変な奴やつはいた」
「……それって、サンジェルマン？」
　名前を出すのは不安だとさっき思ったばかりなのに、アヤカは思わず聞いてしまった。
「良く知ってるな。有名なのかアイツ？」
　驚いた顔で言うセイバーに対して、どう説明すべきか迷っていると、ドアのあたりからシグマが再び現れて口を開く。
「今、部隊の七割が別の場所に移動したよ。ここに残ってるのは監視役だけだから、移動するなら今だと思う」
「移動した？」
　淡々とした調子で言うシグマに、アヤカはなかなか調子を合わせる事ができなかった。
　ゆうべ、アサシンと戦闘している所で出会った聖せい杯はい戦せん争そうの参加者ではあるが、どうやらすぐに敵対する気はないらしい。
　そこでセイバーがまた「じゃあ同盟を結ぼう。共に円えん卓たくを囲もうじゃないか」などと説得を始め、『不戦協定なら』とシグマが予想外の事を言い出した為ため、こうして屋や敷しきの中に留まる結果となった。
　大きく溜ため息いきを吐き、アヤカは何故なぜこうなったか考える。

そもそも、あの緑色の髪の英えい霊れいと『泥と病を何とかする間』だけ、仮かり初そめの協定を結んだセイバーだが、その場にいたアサシンとも何か取引をしたようだ。

　アサシンは「やはり、貴様の生前の所業を許す事はできない。だが、偉大なる翁おきなの一人が貴様と共闘したという事実も私は知っている。故ゆえに、あの魔ま物ものを排除するまでは殺さない」と言い、とりあえず殺し合いに発展する事は免まぬがれたらしい。

　アヤカがポカンとしている内に、アサシンから『拠点にするなら、沼地に適した館がある』と言い、その『魔ま物もの』とやらが戻っているかもしれないと同行する結果となった。

　──ええと、それから、窓に明かりがついてるからってアサシンさんが様子を見に行って、そしたら暫しばらくして部屋から凄すごい音と光が……。

　混乱しているうちにセイバーが話をつけてしまい、結局アヤカが正気を取り戻した時には新しい状況に移り変わっている。

　自分が本当に振り回されているだけだと感じつつ、アヤカはそんな己おのれのふがいなさを恥じると同時に、こんな自分を護まもってくれているセイバーに感謝した。

　そんな事を考えながら眠りについたのだが、そこにあの妙な夢ときて、あげくには特殊部隊が相手だというではないか。

　──聖せい杯はい戦せん争そうに自分から参加する人達の気がしれない。

　そんな事を思いつつ、彼女はシグマに問い掛けた。

「私達を売った方が、あなたの立場は良くなるんじゃないの？」

　ぶっきらぼうに尋ねるアヤカに、シグマが答える。

「ファルデウスは、用済みになればすぐにでもこちらを消しにかかるタイプだ。それなら、君達のようなタイプとも繫つながりは持っておきたい」

「私達は保険って事だね……。でも、あなたが私達を用済みだって斬きり捨すてる可能性もあるんじゃないの？」

「否定はしない。だから、警戒してくれて構わない。俺は君達を心の底からは信じないし、君達は俺を頭から信じなくて構わない」
　開け広げな物言いをするシグマを見て、アヤカは溜ため息いきを吐き出した。
　何を聞き出すべきか迷っていると、セイバーが口を挟んでくる。
「部隊が七割移動したと言ったな、何かあったのか？」
「工場地区の方で、怪物が暴れているらしい」
「怪物⁉　その話、詳しく……」
　──あ、まずい。
　アヤカが慌てて止めようとするが、既に遅かった。
「誰かの英えい霊れいなのか、あるいは英えい霊れいが召しよう喚かんした魔ま獣じゆうなのかは知らないが、傍受した通信によると、この屋や敷しきぐらい巨大な怪物が工場地区を破壊しているらしい」
　シグマが言い切ったのを確認した後、アヤカはセイバーの方をゆっくりと振り返る。
　するとそこには、子供の如ごとく目を輝かせる、いい歳としをした大人がいた。
「セイバー」
「ん？　どうしたアヤカ？」
「行きたいの？」
　ストレートに聞くアヤカに、セイバーが目を泳がせながら答える。
「……何を言ってるんだアヤカ！　そりゃ凄すごく行きたいし、盾とか持って魔ま猫びよう退治の再現はしたい、物もの凄すごくしたい！　だが、アヤカを危険な場所に連れて行くわけにもいかないだろう」
「昨日、いきなり他のサーヴァントがいる森の中に連れて行かれたけど」
「そういえばそうか……いや、でもな……怪物だしな……」
　僅か数日の付き合いだが、アヤカにはこのセイバーについて解わかった事がある。

彼は基本的に脊せき髄ずい反はん射しやで動き、しかも行動力が途と轍てつも無い巨大な猫だ。
自分の興味を引く者ならば、数十キロメートル先で揺らされている猫じゃらしにも平気で飛びつきに行くだろう。
それでいて、優しいのだ。
だから、彼自身の欲望とこちらへの気遣いで板挟みになっている節がある。
──振り回されるのも迷惑だけど……。
──足手まといになるのは、もっと嫌だな。
そう考えて、セイバーに対して何か言おうとした瞬間──
アヤカは、視界の隅に『それ』を見た。
「……ッ！」
冷や汗が顔から吹きだし、呼吸が自然と荒くなる。
──なん……で……。
──ここには……エレベーターはないのに……！
ベッドの上に佇たたずむ、赤いフードを被かぶった少女。
ゆっくりとこちらに顔を向けるが、フードに隠れて目や表情は良く見えない。
少女の口元がゆっくりと動き、ニイ、と笑いかけたような気がして、アヤカは恐怖に叫び出しそうになった。
「どうした？　アヤカ？」
そこでセイバーに声をかけられ、離れかけていた理性を取り戻す。
すると、ベッドの上から赤頭巾の少女は消えており、不思議そうにアヤカの顔を見るセイバーとシグマの顔があるだけだった。
「ううん、なんでもない。で？　どうするの？　見に行く？」
アヤカは開き直って自分からそう提案してみるが、セイバーが答えるよりも早く、シグマが横やりを入れてきた。
「これは忠告だけど、見に行かない方がいいと思う」
「？　どうして？」
アヤカの疑問に、シグマは「さっき、一緒に通信が入ったんだけ

ど」と前置きして、現在の状況についての補足を一つ付け足した。
「俺の本来の雇い主が、何かやらかすつもりらしい」
「雇い主……って、国の特殊部隊じゃないの？」
「守秘義務契約はしていないけど、義理はある。だから詳細は言えないけれど……少なくとも、ろくな事にならないのは確実だ。だから、巻き込まれたくなかったら、その場所には暫しばらく近づかない方がいい」
　そこまで言って、シグマは僅かに沈黙したあと、冗談か本気か良く解わからない言葉を口にした。

「ただ……この時期にこの街に近づいた時点で、もう手遅れなのかもしれない。君も俺も」

×　　　　　　　　　　×

薄暗いどこか

　外部からの明かりが殆ほとんど差し込まない、モニターの明かりだけが光源となっているフランチェスカの工房。
　乱れたベッドの上に菓子や甘味の袋を散らばらせながら、その工房の主であるフランチェスカは自らサーヴァントであるプレラーティ少年に対たい峙じしていた。
「それじゃあマスターとして命令しちゃうね？　……ねえねえ、ところで自分で自分に命令するって、なんか凄すごく倒錯的で快感だと思わない？　命令される方ってどんな感じ？」
「嫉妬と被虐の快感が入り交じって、陶酔の中でゲシュタルト崩壊しそうな感じがなんとも言えないね。明日はマスターとサーヴァント交代してみる？」
「いいなあ。でもそれはダメ。どうせ入れ替わった瞬間に令れい呪じゅも奪って、逆に私を自害させられるかとかそういう遊びを始めちゃ

うでしょ？」
「良く解わかったね！　流石さすが僕だ！　やりにくいなあ！」
　ケラケラ笑いながら壁によりかかり、プレラーティ少年はフランチェスカに言葉を続ける。「で？　命令っていうのは？　大体予想はつくけど」
「予想通りの大正解だね！　今からサーヴァントのプレラーティ君には、あの工場街の怪獣大決戦を力ちから尽ずくで丸く収めてもらおうと思います！　凄すごい！　なんだか楽しそう！」
「普通のサーヴァントだったら、令れい呪じゆを使われても拒否したい案件だよね、これ」
「でも、行ってくれるでしょ？」
　男の姿をした自分に対して小こ悪あく魔まのように微笑ほほえむフランチェスカに、プレラーティ少年もまた小こ悪あく魔ま的な笑みを返しながら頷うなずいた。
　そして、契約は成立したとばかりに、フランチェスカが傘の先で床をトン、と打ち鳴らす。
　すると、ガコリ、という機械的な音と共にプレラーティ少年のよりかかっていた壁が背後に引っ込んだ。
　更に、その壁は電車のドアのようにスライドし、工房の外と中の隔絶を解き放つ。

　透き通った藍あい色いろと共に、部屋の中に溢あふれる光、光、光。
　フランチェスカの視界に映るのは、太陽の白い輝きと、濃い空色のハーモニー。
　つまりは、地上で見るよりも色濃く見える、無限に広がる大空だ。

　一方で、壁によりかかっていたプレラーティ少年は、そのまま外へと転がり落ちてフランチェスカとは違う景色を目にしていた。
　眼下には果て無き赤い大地が広がり、街が荒野に溢こぼされた塩の

山のように見える。
　今が夜中ならば、街の明かりが偏った配置の星空に見えた筈はずだ。
　プレラーティはそれが見れなかった事を少し残念に思いながら、なんの躊躇ためらいもなく両手を広げ、踊るように回転しながら自由落下を開始した。

　上空20キロメートル、成層圏の最下層。
　そこに、フランチェスカの『工房』は存在していた。
　米軍で実験中である高高度無人飛行船、フランチェスカの不可視・風避け等などの結界を幾重にも付与して魔ま術じゅつ的てきに、科学的に、そして趣味的に改造に改造を重ねた全長２００メートルの巨大飛行船である。
　とはいえＳＦ小説に出てくるような武装を固めて地上を攻撃する移動要塞というわけではなく、単純に２００ｍもの気球部分を使って僅かな面積のプレラーティの工房だけを持ち上げている状態だ。
　全てを見下ろす場所に位置しながら、肉眼では地上の様子が殆ほとんど解わからない高みの極きわみ。
　しかしながら、工場街の異変程度ならばプレラーティの強化した視力でこの位置からでも確認する事ができる。
　巨大な機械仕じ掛かけの蜘蛛くもが暴れ、それを復ふく讐しゅう者しやに変質した弓兵がたった一人で相手どっている光景だ。
　周辺の工場は破壊され、食肉工場にいたってはもはや跡形もなく、異界化の残ざん滓しや結界のノイズ、更には工房の外にまで溢あふれ出だす魔ま獣じゅう達の姿も見受けられ、なんとも混こん沌とんとした景色が拡散を始めている。
　プレラーティはその光景を見て、ただ、ただ、楽しそうに笑った。
「アハハハハ！　いいね！　最高だ！　最高だよフランチェスカ僕！」
　しばらく笑い続ける間にも、地面は確実に迫り来る。

少年はハッキリと視認される工場地区の混乱を噛かみしめながら、思考を次の段階へとシフトさせた。
　──このまま、あの光景が街中に広がるのを見たいけど……。
　──だけど、まだだね、まだだ。まだ我慢しなきゃ。
　溢あふれ出でる笑みを止めることなく、それでも頭は冷静であろうとする。
　しかしそれは、より長く、より大きな快楽を味わう為ためのやせ我慢に過ぎないのだが。
　──まだ、見せかけでもちゃんとコントロールしなくちゃね。
　──ファルデウスっていうマスターの知り合いが、街をあっさり終わらせちゃう。
　目的を定めた後、自由落下のスピードでハイになったプレラーティ少年は、頭から真っ逆さまに落下しつつ両手を広げた。
　そして、周囲に広がる無限の空の中、高らかに唱うたい、詠うたい、謳うたいあげる。
　自らが持つ宝具を賞賛し、展開する悦よろこびを表す詩を。

「僕は捧ささげよう、この壊れた世界に、祝福と感謝と犠牲を捧ささげよう！」

　　　　　　　　「僕を狂気の塊として産み落とした母アーテーに感謝を！」

　「僕に人の狂気魔術を教えた遍あまねく世界の聖せい霊れい達に祝福を！」

「異なる狂気を僕に見せた聖女に騎士よ、君達はどちらも間違っていなかった！」

「捧ささげよう！　この壊れた世界に許された人類の全てに、僕とい

う生いけ贄にえを捧ささげよう！」

　身勝手な祝詞のりとを叫ぶと同時に──プレラーティ少年の周囲の空間が歪ゆがみ始はじめた。
　地上が急速に接近する中──
　彼は、自らの宝具である大だい魔ま術じゅつの名を、迫る地面へと叫びあげる。

「────螺湮城は存在せず、故に世の狂気に果ては無しグランド・イリュージヨン！」

×　×

地上　工場地区

「いたぞ！　あの女だ！」
　ハルリを見つけたスクラディオ・ファミリーの黒服魔ま術じゅつ師し達が、鬼気迫る表情でハルリに迫る。
　現在バーサーカーは『魔ま術じゅつ工こう房ぼうの破壊』を優先しており、フィリアもそちらについている為ため、自分の身は自分で守らねばならなかった。
　既に食肉工場は原型を留とどめていないのだが、どうやら周辺の工場も魔ま術じゅつ工こう房ぼう的な何かの施設だったようで、それらを『敵』と判断したバーサーカーが破壊の限りを尽くしている。
　バーサーカーの口から業炎が吐き出され、工場の敷しき地ちが一つ火の海になっているのを見た時には、ハルリはもはやバーサーカーの行動について考える事をやめていた。
　──とにかく、今はこの場を切り抜けないと……。
「みんな！　お願い！」
　ハルリが叫ぶと、彼女の服のどこに隠れていたのか、数匹の蜂が姿

を見せる。
「……あの人達を、足止めして！」
　肩口に止まった無数の蜂にそう願うと、蜂達は一糸乱れぬタイミングで飛び立ち、後方にいる男達へと接近する。
「なんだ!?　蜂!?」
「悪あがきを……叩たたきつぶ……ぐッ!?」
　正面から向かっていった数匹の蜂を囮おとりとしている間に、残る蜂が高速飛行による迂う回かいで男達の背後に回り込んでいた。
　その蜂達に首筋などを刺された男達は、慌てて魔ま術じゅつを撃ち放とうとするが、次の瞬間には白しろ眼めを剝むいて次々と地面に倒たおれ臥ふしていく。
　強力な睡眠効果のある毒液を分泌する使い魔蜂達に感謝しつつ、ハルリはそのまま工場地区の外へと向かって走り続けた。
　──あと少し……。この地区の外までは、流石さすがに魔ま術じゅつ工こう房ぼうの影響は届かない筈はず……！
　背後を振り返ると、工房の破壊により制御を失った魔ま獣じゅう達が、スクラディオ・ファミリーの黒服と小こ競ぜり合あいをしており、バーサーカーは工場から伸びる煙突を二本纏まとめてなぎ倒している。更には、その倒たおれ征ゆく煙突を駆け上り、高所まで飛んでからレーザービームのような矢を撃ち放つ弓兵の姿が見えた。
　その矢が背中に直撃する事で、バーサーカーが軋きしみのような悲鳴を地区一帯に響かせている。
　連撃のように矢が降り注ぐが、今度はバーサーカーも身体からだ中に絡からむケーブルやワイヤーを触手のように振り回して応戦した。
　合間を縫ってフィリアが反撃しているのも見えるが、弓兵はそれを弓を振り回す事で霧散させており、一進一退の攻防を繰り広げているように感じられる。
　自分に着いていける戦いではない。
　そう思いつつも、彼女は心中でバーサーカーに声援を送った。
　──私の魔ま力りょくは微々たるものだけれど、それでも全て吸い尽

くして構わない。
　──だから、だから壊して、全部壊して！
　──魔ま術じゆつ師し達の造り上げたものを！　全部、全部、全部！
　バーサーカーが破壊した地面から送電ケーブルを引き抜き、魔ま力りよくの補助となるエネルギーとして己おのれの身体からだに取り込み始める。
　すると不思議な事に、その身体からだは周囲の工場の瓦が礫れきを取り込みながら、更に巨大な姿へと変貌を遂げようとしていた。
　──もう、あなたの正体がなんであれ構わない！
　──どうか、どうかこの魔ま術じゆつ世せ界かいを全部、粉々に……。
　そこまで考えた所で、ハルリの肩の表面を銃弾が滑り、肉の一部を抉えぐり取とった。
「……──ッ！」
　声にならない悲鳴をあげ、その場に転ぶハルリ。
　彼女の身体からだを覆っていた防御結界は一瞬で破壊され、無防備となった肩に銃弾が届いたのである。
　流石さすがに弾丸の勢いは殺されているが、それでも肩の肉の一部をこそぎ落とし、その衝撃で彼女を転倒させるには充分だったようだ。
　そして、彼女に向かって凶弾を放った男──バズディロット・コーデリオンは、表情一つ変えずにハルリに尋ねる。
「ハルリ・ボルザーク。お前はいったい、何を喚よび出だした？」
「……サーヴァントの情報を……簡単に明かすと思っているんですか？」
「ここでお前を殺す事は容易たやすい。だが、それではあの異形が制御を離れた時の行動が予測できない。情報を話すか令れい呪じゆで自害を命じるなら、余分な痛みは与えずに終わらせよう」
「そこは……『命だけは助けてやる』じゃないんですね……」
　肩を押さえながら立ち上がったハルリの言葉に、バズディロットは

僅かに首を傾かしげながら問い返した。
「お前は、そんな戯言たわごとを信じるほど愚かな魔ま術じゆつ師しには見えないが？」
　魔ま術じゆつ師し。
　自分のような半はん端ぱ者ものがそう扱われた事に複雑な想おもいを抱きながら、ハルリは静かに覚悟を決める。
　──自害させると見せかけて、全力で命じよう。
　──この街にある全ての魔ま術じゆつ工こう房ぼうを、徹底的に破壊しなさいって。
　──そして、自分の動力が続く限り、ラスベガスやロサンゼルスを闊かつ歩ぽしなさいって。
　──あとは、土地守の一族が好きにすればいい。
　──彼女達の神秘も失われるかもしれないけれど、それはゴメンなさいとしか言えないや。
「解わかりました、令れい呪じゆを用いて、バーサーカーを……」
　両手をゆっくりと上げながらハルリがそう言った所で──
　彼女はあまりにも唐突に、底なしの奈落へと落下した。
　数メートル先で銃を構えていたバズディロットの姿だけが変わらずに、空の明かりが唐突に上方へと遠のいていく。
　それはつまり、目の前にいるバズディロットも同様に落下しているという事だった。

　時は、数秒遡さかのぼる。
　最初に異変に気付いたのは、フィリアだった。
「……この魔ま力りよくの気配……ミケーネの居い候そうろう連中の系譜かしら？」
　そう呟つぶやいた瞬間、彼女はその異変を視認する。
　突然自分の足元が消失し、そのまま落下を始めたのだ。
「ちょっと!?」
　慌てて空を飛ぼうとするが、彼女は自分の周囲に満ちた魔ま力りよ

くが消失している事に気付く。
「これは……私じゃない、世界のテクスチャの方を騙したのね！　なんて真似まねを！」
　見ると、消失したのは自分の周囲の地面だけではない。
　食肉工場を中心として、工場街の大半を内包する形で真円状に大地が消失しており、底の見えぬ暗闇がポッカリと口を開けていた。
　更には、周辺の魔ま力りよくが綺き麗れいに消え去っており、スクラディオ・ファミリーの下したっ端ぱ魔ま術じゆつ師し達も、フィリアも、アルケイデスも、巨体を誇るバーサーカーすら皆平等に落ちていく。
　誰もが自由落下に任せて落ちていく中、フィリアはこの現象の元凶たる存在を睨にらみ付つけた。

　地面に猛スピードで落下してきたその少年は、こちらを睨にらみ付つけるホムンクルスに無邪気な笑みを返して見せる。
　如何いかなる仕組みなのか、彼だけが魔ま力りよくを用いる事ができるようで、減速をしながら落下し始めたばかりのフィリアやハルリ、バズディロットやアルケイデス達と速度を合わせ、共に肩を並べながら底なしの穴に呑のみ込こまれた。

「やあやあ、初めましての人が多いね。そこの弓兵君とは雪山で会ったから、一日ぶりかな？」
　軽妙な声を響かせるのは、頭を下にして落下している中性的な少年である。
　彼は両手をポンと広げながら、共に落ちる全ての存在に向かって語りかけた。
「東洋の阿あ鼻び地じ獄ごくは２０００年落ち続けるっていうけれど、２０００年後には下に辿たどり着つくっていう意味では親切なのかな？　でも、その後に何百京年も責め苦を受けるって解わかってる

んだったら、落ち続けた方がマシかもしれない。君達はどっちが好き？」
　その台詞せりふに合わせて、穴の周囲──それまで漆黒の土壁だった場所に、様々なものが光りながら浮かび上がっては消えて行く。
　あるいは鬼達の酒宴であり、あるいは寂れた遊園地のパレードであり、あるいは飢餓で死んでいく子供達であり、あるいは無限に広がる星空であり、あるいは姿を形容するのもおぞましき怪物であり、あるいは黄金郷としか言いようのない美麗なる都市であり、あるいは荒野を駆ける聖女の姿であり、あるいは地の果てまで続く騎士達の屍しかばねであった。
　そのどれもこれもが本物だと感じられ、スクラディオの下したっ端ぱ魔ま術じゆつ師し達は、この時点で自意識を壊されかけ、半分以上が意識を完全に手放している。
　だが、魔ま力りよくの使用を抑えられているにもかかわらず、バズディロット・コーデリオンはいつもと変わらぬ凶悪な無表情を保っていた。
　しかし、流石さすがに体内の『泥』の制御に手こずっているのか、裾から覗のぞく黒い刺青いれずみのようなものが、彼の皮膚上を激しくのたうち回っているのが確認できる。
「どういうつもりだ。キャスター」
　淡々というバズディロットに、キャスターと呼ばれた少年は逆さまになったまま恭うやうやしく一礼をし、答えた。
「どうもこうも、聖せい杯はい戦せん争そうを恙つつがなく進める為ためさ。このままだとファルデウス君の胃に穴が開いて、世界が悲しみに満ちて花は咲き小鳥は歌い、世界の果てで蝶ちようが踊って台風が吹いたと思ったらファルデウス君の死体を入れる桶おけ屋やが儲もうかる事になっちゃうよ？」
　話の後半は全く意味の無い事だろう。
　無視して睨にらみ続つづけるバズディロットに、キャスターは「ノリ悪いなあ、もう」とケラケラ笑った後に答えを返した。

「大丈夫だよ。僕は味方だよ、君達の味方だ。人間の味方だし、神様の味方だし、魔ま獣じゆうの味方だし、魔ま術じゆつ師しの味方だ。だから、僕はその全てが失われないように……楽しみを、引き延ばしに来ただけさ」
　そしてキャスターの少年は、ポン、と両手を打ち鳴らす。
　すると、穴の外壁すら消失し、その奥を落下し続ける、何千、何万、何十万という人々の姿が現れた。
「スノーフィールド八十万人、君達はともかく、僕はまだ殺したくはないんだ」
　そこで少年の姿が掻かき消きえ——
　全長数キロメートルになろうかという巨大な姿で少年が再臨し、やはり底なしの崖を共に落下しながら、自身の願いを口にした。
「だから、ここは一つ……取引をしようじゃないか」

「昔、口の悪い民衆に『悪あく魔ま』だなんて呼ばれた……この僕とね☆」

×　　　　　　　　×

コールズマン特殊矯正センター

「……やってくれましたね、フランチェスカさん……」
　映像に現れたその光景を見て、ファルデウスは珍しく顔を顰しかめて言った。
　フランチェスカから『大丈夫大丈夫、すぐになんとかするよ？』という連絡が入った直後に起こった異変。
　ファルデウスはそれを確認した瞬間、今日は厄やく日びであろうと専門外である陰おん陽みよう道どうの単語で自身の状況を表現した。
　モニターの中に映るのは、工場地区を消失させる形でぽっかりと開いた漆黒の穴。

それはもはや地盤沈下などで誤ご魔ま化かせる範はん疇ちゆうではなく、仮に『緊急処置』でスノーフィールドという街そのものを消し去ったとしても、穴だけは確実に残り全米の晒さらし者ものにされるであろうという代しろ物ものだ。
更に言うなら、あと数分でこの街の遙はるか上空を観測衛星が通る。
一般の研究者にもほぼリアルタイムで情報が提供される民間衛星だ。
それにここまでハッキリとした巨大な穴が映った日には、神秘の秘匿どころではない。
一体どう責任を取るつもりなのかと、フランチェスカに電話連絡を取ろうとした次の瞬間──更なる異変が、モニターの中で開始された。
突然巨大な穴が塞がったかと思うと、まるで時間を巻き戻すかのようにに倒れた煙突や崩れた工場の外壁が再生を始め、燃えた空き地の草までもが青々とその命を取り戻す。
「……これは……？」
困惑するファルデウスのもとに、フランチェスカから通信が入った。
『ヤッホー？　驚いてくれた？　少しは君の仏ぶつ頂ちよう面づらもやわらいだかなーって思うけど、どう？』
「……どうもこうもありませんよ。一体、何をしたんですか？」
問い掛けるファルデウスに、フランチェスカがカラコロと笑いながら答える。
『ただの幻術だよ？　英えい霊れいになった私の宝具だから、荒れ地を雪山に変えるのの何倍も凄すごい事ができるんだけどね！　ああ、そうそう。あそこで喧けん嘩かしてた人達はなんでか知らないけど急に和解したみたいだよ？　不思議だねえ。やっぱり愛の力かなあ？　素敵だよね！　愛！』
ファルデウスは言葉の大半を聞き流しながら、何らかの取引をしたのだろうと正確な所を分析した。

だが、それについて言及するよりも先に、フランチェスカが釘くぎを刺す。
『最後の最後には君と私も聖せい杯はい戦せん争そうの敵同士なんだからね？　それを忘れちゃダメだよ？』
　そして、ついでとばかりに、元に戻った工場について信じがたい事を口にした。
『元に戻ったように見えるけど、あれも幻術だからね？　触れるし、住む事もできるし、これまで通り工場としても工房としても使用できるけれど、ただそれだけの幻術なの！　時間逆行とかじゃないから、甘えちゃだめだよ？　５日後ぐらいには世界が騙だまされてる事に気付いて元通り崩れちゃうから、その間に隠いん蔽ぺい工作宜よろしくねー！』
　最後にとんでもない丸投げを残して通信を切ったフランチェスカ。
　ファルデウスは空を見上げ、天井で遮られて見えない筈はずの飛行船を睨にらみ付つけながら言った。
「……もしも次があるのなら、その時は始まる前にあなたを排除しますからね。……フランチェスカさん」

「妙な報告が入ってきました」
　とにかく隠いん蔽ぺい工作を始めなければと、砂漠の爆発と同じガス会社が連鎖する形で不始末を起こしたという事にしようかと考えるファルデウス。
　そんな彼の元にアルドラの報告が寄せられるが、それは取るに足らないものだった。
「クラン・カラティンのメンバーが向かったという報告は受けています。人払いの結界などを用いて避難誘導を行ったのでしょう」
　報告の内容は、『工場地区周辺に住んでいる大量の市民が、一斉に中央地区や住宅街へと避難を開始した』というものであり、ファルデウスからすれば、寧むしろあの爆発音や崩壊音などを聞けば自主避難して当然とすら考えていたのである。

だからこそ、彼は即座にその異常に気付く事ができなかった。
　工場地区の騒動が収まったのと入れ替わる形で、更に厄やつ介かいなものが覚醒してしまったという事に。

×　×

ゆめのなか

「工場の方の人達、大丈夫かなあ」
「うん。きっと大丈夫だよ……ほら、見て御覧！　みんなこっちに来たよ！　街の方に避難してきたんだ！」
　少年の指差す方向から、ドヤドヤと大量の市民が歩いてくる姿を見かけて、椿つばきはホッと安あん堵どの息を吐く。

　先刻、工場の方角から雷のような音がして、友達になったジェスターが『工場の方が燃えてる』と言ってきた。
　──「ああ、火事が起こったっていう事は、きっと人がいるって事だよ。大丈夫かなあ。みんな、ちゃんと避難できるかなあ」
　と心配していたジェスターを見て、椿つばきも不安になり、『まっくろさん』に話してしまった。
　──「工場の回りの人達、ちゃんと逃げられるといいね」
　その背後で、ジェスターと名乗った少年が邪悪な笑みを浮かべている事にも気付かぬまま。

　こうして、工場地区周辺に住む住人十二万人が、人知れず『病』に感染した。
　少年の皮を被かぶった吸血種だけが、その意味を正確に理解する中──
　街は緩やかに、しかし確実に悲劇へと向かって転がり始めた。

僅か半日後に、それを止めようとする者達が現れるとも知らぬまま。

時は、シグマがセイバー達と邂かい逅こうした時にまで遡さかのぼる。

シグマが『自分も聖せい杯はい戦せん争そうに参加するマスターだ』と明かした時、アヤカと名乗った東洋人の女は僅かに警戒したようだったが、セイバーは特に気にした様子もなく、朗々とした調子で尋ねてきた。
「流石さすがに英えい霊れいまでは紹介してくれないよな？」
「……こっちの手札だから。晒さらすわけにはいかない」
首を振るシグマの横で、彼を観察していた女アサシンが口を開く。
「チャップリン、と呼んでいた」
「……」
黙り込むシグマを余所よそに、アヤカが驚いたように目を丸くした。
「あ、それは流石さすがに聞いた事ある……」
「昨日ライブハウスで見た映画の中に、その役者の映画あったぞ⁉」
セイバーもまた、露骨に目を輝かせ始はじめる。
「……」
シグマは感情が薄い為ために冷や汗などは掻かかないが、流石さすがに面倒な事になったとは感じていた。
『ウォッチャー』というサーヴァントと契約した、というよりも『取とり憑つかれた』とでも言うべき境遇を説明した場合どうなるか。
話を信じて貰もらえた場合、上手うまく立ち回れば生き残る事はできるかもしれない。
先刻のアサシンから逃亡する際の『影法師』達の助言を鑑かんがみ

るに、確かに自分の『情報を引き出せる』という能力は、非常に強力なものだと言える。
　自分を補給物資だと割り切れば、誰もが自分の事を殺すよりも利用した方が得だと考えるのではないか？
　そんな疑念も過よぎるが、考えを変える程ではない。
　もう、自分は兵士Ａではなく、シグマとしてこの戦いに挑むと決めたのだ。
　人生を変える程の決意ではなく、『影法師』達に流されての事なので、まだ非常に不安定な目的だが、少なくとも雇い主のフランチェスカに義理立てをして「自分は兵士Ａのままでいい！」という理由もなかった。
　死にたくない、という理由だけで生き方を決めるのはどうなのだろうと考えるシグマだが、少なくとも目の前の英えい霊れい達と下手へたに敵対して寿命を縮める事はあるまいと、とりあえず自分の英えい霊れいの能力は隠しながら、友好的に話を持っていく事にした。
「名前もバレた事だし、紹介してくれないか？　舞台役者には敬意を表したい」
「……役者は映画の中で自分を見せるものだから、素の状態では人前に出ないと言ってる」
　セイバーの問い掛けに対して適当に理由をでっちあげたが、流石さすがにあまりにあまりな理由ではないだろうか。
　そう考えるシグマを余所よそに、セイバーは力強く頷うなずいた。
「なるほど、納得できる」
「するんだ……」
　アヤカがジト目でセイバーを見るが、彼女もそれ以上は特別追及してこなかった。

　とりあえず簡易的な不戦協定を結んだ後、シグマは一人自室に戻って安あん堵どの息を漏らす。
　お互いの立場は極力秘密にする、こちらもアヤカの内情には踏み込

まないから、向こうもこちらの立場や所属は問わない事。
　そう提案した所、意外な事にセイバーがすんなりＯＫした。
　もしかしたらあのセイバーは、常に自分の勘と感情を優先させており、基本的に何も考えていないのではないだろうか？
　ふとそう思った後、逆にそれは恐ろしい事だと考える。
　感情を優先するにもかかわらず、英雄として世界に存在を刻み込まれたという事は、それだけの力を秘めているという事だ。
　すると、いつの間にか横にいた、騎士の姿をした『影法師』の一人が言葉を紡つむぐ。
「良いい勘をしている。あれはまさしく、そういう類たぐいの王だ。自分のその場の感情を最も優先させる類たぐいの激情家だ。真名はリチャード。獅し子し心しん王おう……と言っても貴様は解わからんだろう。そもそも貴様、アーサー王や聖せい杯はい探たん索さくの物語ぐらいは知っているのか？」
「そのぐらいは流石さすがに知ってる、モンティ・パイソンの喜劇映画だ」
「……」
　何故なぜか沈黙した後に騎士は消失し、代わりに現れた船長が言葉を続ける。
「ともかくだ、まあ、あのリチャードって小僧は感情的で戦場を我が庭とばかりに闊かつ歩ぽする、正しく人の皮を被かぶった獅し子しのような男だが、それでも民衆からの絶大な人気を集めた奴やつでな。もしかしたら裏では人心を操る権謀術数を持っているかもしれん。気を付ける事だな」
　つまりは『油断するな』と言いたいらしい。
　確かに、ああも簡単に人を信じるのはブラフという可能性もある。
　背中から刺されぬように気を付けねばと思う一方で、不戦協定をどこまで持たせるか、という考えに入る。
　──今夜は乗り切ったのはいいものの、これからどう立ち回るべきか。

第一の目的は『生き延びる事』だ。
アサシンと対たい峙じしてから、その思いは一ひと際きわ強くなった。
いつもの任務よりも、遙はるかに死の影が濃くのし掛かってくる。
アメリカの都市部にいるのに、まるで幼い頃に過ごした『あの国』にいるかのような懐なつかしさを感じ始めたシグマは、ふと考える。
普通の人間ならば、もっと怯おびえたり焦あせったりするものなのだろうか。
自分が任務先で出会った者達は、少なくとも同じような境遇の中で、もっと必死に生きていたように思える。
──頭もだいぶ弄いじられた俺が、人と自分を比べようとする事自体がおかしな話か。
小さく溜ため息いきをついた後、彼は、やはり自分の取りあえずの生きる目的は安眠と安定した食事で充分だと理解した。
この国ならば、普通の家庭ならば黙っていても享受できるものではあるが、シグマはそうでない国──例えば自分の故郷の事も知っているので、安眠と食事は確かに価値のあるものだという認識はあった。
──そういう意味では、一番安定しているのは、やはり国の後ろ盾があるファルデウスあたりと手を組む事なんだろうが……。恐らくこの聖せい杯はい戦せん争そうというものは、ただそれに寄りかかっているだけでは生き残れない。そんな予感がする。

その後、明け方まで様々な思案を続けていた所で、当のファルデウスから通信が入る。
『……「家畜」より「欠乏」へ。何か動きはあったか』
「……アサシンらしき女性が屋や敷しきに現れ、襲撃を受けました」
『……？　ああ、警察署を襲った方か……。よく生き延びたものだな。あるいは君の喚よび出だした英えい霊れいが優秀だったのか……？　アサシンの女はどうなった？』
僅かにファルデウスの驚いた様子が伝わってくる。魔ま術じゆつ師

しとしての評価は低い為ため、聖せい杯はい戦せん争そうで初戦を生き残るとは思われていなかったのだろう。
「その後、セイバーとそのマスターが来訪して、停戦を持ちかけられたので、了承しました」
『……なに？』
　報告を進めた結果、ファルデウスは何度も沈黙と思案を繰り返した後、シグマに最低限の指示を出してきた。
　相手の情報を探りながら、英雄王や彼と同列のランサー達を相手どる為ために共闘を持ちかけろとの事だが、正直、それは難しいのではないかと考える。
　何故なぜなら、その指示を受けた瞬間に絡から繰くり羽ば根ねの『影法師』が、
　──「あ、もう英雄王と同列のランサー……エルキドゥとは同盟結んでますよ？　あのセイバーさん達」
　と言ってきたからだ。
　ファルデウスにそれを報告すべきかどうか考えていると、先に先方が問い掛けてくる。
『ところで、君の英えい霊れいの正体は判明したのか？』
「はい、自分の英えい霊れいは……」
　少なくともファルデウスには正確に報告すべきだろうか。
　そう考えた彼の後ろで、船長がニヤニヤと笑いながら言った。
「気を付けな、後ろでアサシンが見張ってるぜ？」
「……」
　ちらりと化粧台の鏡に目を向けると、そこに映った部屋の隅の影がいつもより黒いような気がする。
　そして、『影法師』は重要な事をあえて言わない事はあるが、嘘うそをついた事はない。
　敵対する要素はできるだけ排除するべきだと考え、シグマは気付かないふりをしながら淡々と答えた。
「……チャップリンです。ランサーのチャーリー・チャップリン。そ

れが自分の喚よび出だした英えい霊れいです」
『……すまない、もう一度言ってくれないか？』
「ランサーのチャーリー・チャップリンです。宝具などは追って聞き出します。令れい呪じゆで強制的に聞くのは得策ではないと判断しましたので。それでは失礼します」
　イヤホン型の魔ま術じゆつ通つう信しん機きを切った後、溜ため息いきを吐いた所で背後から声が掛けられる。
「……今のが、お前が信ずる同盟者か？」
「……居たんですか？　アサシンさん」
「私はお前を完全に信用したわけではない。質問に答えよ」
　フードの隙間から鋭い目つきで睨にらんでくるアサシンに、シグマは答えた。
「俺は、誰も信じてない。雇い主も、自分自身も。神も悪あく魔まも、俺が使ってる魔ま術じゆつとやらも信じていない」
「……」
　すると女アサシンは、困惑したように言う。
「お前に、祈りを捧ささげる神はいないのか？」
「？　いや、俺は……神様の恩恵というものをまだ知らない」
　アサシンに改めて問われ、シグマは何故なぜ自分が神を信じていないのか、それを人に解わかり安やすく伝えるためにはどうすれば良いのかと考えながら言葉を紡つむぎ続つづけた。
「……生まれたこと自体が神様の恩恵と言える程に、生きる事に意味を持てていない。生まれてすぐ、目を開ける間もなく死んだ同郷の子達を見て来ているし、生まれる事すらなかった胎児を母親の腹から引ひき摺ずり出だして魔ま術じゆつの実験に使っていたような人達が俺達を育てた。人を殺す魔ま術じゆつ兵へい器きにする為ために」
　端から聞けば重々しいと思える過去だが、シグマはあくまで淡々と、事実を列挙する形でアサシンに伝え続ける。
「俺を育てた人達は、……その国を動かす人達こそが神々だと言っていた。でも、その国は滅ぼされた。魔ま術じゆつ師しと名乗る連中

に。だから、そもそも俺は神様っていうものがなんなのか良く解わかってない。解わからないものを解わからないまま信じるというのは、相手にとっても迷惑なんじゃないかと思う」
　──何を話しているんだ、俺は。
　──これじゃ伝わらない。そもそも、つい正直に答えてしまったが、誰も信じていない自分を他人がどうやって信じるというんだ。
　どうやら最初から答えを間違えていたらしいと思い、シグマは深く後悔した。
　だが──
「……そうか。すまない。辛つらい事を思い出させたな」
　そう答えた女アサシンの声はどこか慈愛のあるもので、先刻まで残っていた敵意が綺き麗れいに消え去っている。
「君が気に病む話じゃない。良くある話だ。今も戦場の中にいる同郷の傭よう兵へい達に比べれば、俺はきっと恵まれている部類なんだろう。ただ、それが上手うまく実感できないだけだ」
　フランチェスカに雇われている間、一年の大半を魔ま獣じゆうや魔ま術じゆつ師しくずれなどとの戦いに費やす生活を送ってきたシグマだが、それでも、こうして都市部に来た時にテレビなどで見る戦地の光景を見て、本来の自分はあそこで幼い内に野垂れ死んでいたのだろうと考える事はあった。
　しかし、今の自分の境遇を『神の恩恵』だとはどうしても思えなかった。
　そんなシグマに、女アサシンが小さく首を振る。
「悲しみと苦痛に塗まみれた者達は、世界中どこにでもいる。苦痛も悲しみも、人の世では喜びや快楽と共に平等だ。しかし、だからといってそれを普通の事だと笑い飛ばせる筈はずもない」
　女アサシンは目を細めると、シグマを見ながら言った。
「お前はこれまでに対たい峙じした魔ま術じゆつ師し達とは違うな。本当に、何も信じていない……そんな目をしている。だが、お前のそれは万象の否定ではない、まだ、己おのれが信ずるに足る物を知らな

いだけだろう」
　内面を見透かされたような気がして目を逸そらそうとするが、アサシンの深い瞳に吸い込まれたかのように、視線を動かす事ができない。
「今の私は未熟な上に、魔ま物ものの魔ま力りよくで穢けがれた身。本来ならば、お前に信仰について語るべきなのだろうが、その資格も失った」
　自分を責めるように言った後、アサシンはシグマに言葉を贈った。
「だが、お前にやがて生まれるであろう信ずるに値するものが、せめて善良なるものである事を願う」
　祈る、ではなく『願う』と言った後、アサシンはその場を後にする。
「……」
　そのまま暫しばらく呆ほうけていたシグマに、背後から声が掛けられた。
「どうした？　まさか一ひと目め惚ぼれって奴やつか？　オイ」
　屈強な偉い丈じよう夫ふの『影法師』にそう言われ、シグマは静かに首を振る。
「いや……ただ、フランチェスカの『お強ね請だり』以外で、まともに誰かにお願いをされたのは初めてだ」
　シグマは暫しばらく考えた後、影法師に問い掛けた。
「なあ、安眠と食事は、善良なものかな」
「いや、そもそも安眠って信仰するものじゃねえだろ？」

×　　　　　　×

　それから数時間後、椅子に座って仮眠を取っていたシグマは船長の声に起こされる。
「おい、小僧。起きてるか？」
　有事に備えて浅い眠りに自己調節していたシグマは、即座に声に反

応した。
「どうした？」
「危ねぇ時以外は聞かれなきゃ答えないんだがな。周囲に小僧のお仲間……『イバラ』とか呼ばれてたチームが散開してるぜ」
「！」
　イバラというのは、ファルデウスの実働部隊の一つに与えられたコードネームだ。ファルデウスは『家畜』、シグマには『欠乏』というように振り分けられているが、その中でも『イバラ』は重武装をした対魔ま術じゆつ師しの強襲チームであり、ランガルという人形師の身体からだを銃弾で粉々に砕く様は、シグマも使つかい魔まの目を通して観測していた。
「くくッ。信用されてねえみてえだなあ小僧。ファルデウスって野郎は連中に小僧を監視しろって命令を出してたぜ？　ウォッチャーは心まで読めるわけじゃねえから、最終的にファルデウスが小僧をどう料理する気かは知らんがな」
　正直な話、シグマの腕前ではあの全部隊を相手どる事は不可能だ。
　もしも『始末しろ』と言われた場合、サーヴァントが実質的に戦力にならない以上は相手にならないだろう。
　ウォッチャーの力で部隊全員の行動が把握できたとしても、町のチンピラ集団などならともかく、陣形を組んだ対魔ま術じゆつ師し部隊を突破できる火力がない。
　──なるほど、俺が信じていない以上、向こうも信じないのは当然だ。
　──……ないとは思うが、チャップリンが嘘うそだとバレた可能性もある。
　どうやら本気で騙だまし通とおせると思っていたらしいシグマの心を読み取った『影法師』が何か言いたそうにするが、彼らが事を起こす前にシグマは歩み出していた。
　火力を得る為ために、彼は恩を売ると同時に返かえして貰もらう事を考える。

通信しているフリをして、途中で見つけたアサシンにまず告げる。
「……今、本来の雇い主から連絡があった。この屋や敷しきは国の特殊部隊に囲まれているそうだ」
　本来の雇い主──フランチェスカをダシにしながら、シグマは考え続けた。
　これまでのように、誰かの命令通りに動くのではなく──
　ただ、自分が生き残る為ために、自分の意志で如何いかなる道を歩むのかという事を。

　せめて、その道の一歩先ぐらいは照らせる力を、自分と『ウォッチャー』に望みながら。

エスカルドス家は、地中海近辺の魔ま術じゆつ師しの中でも、とりわけ古い家系である。
一説には、時と計けい塔とうが成立する前━かの魔ま法ほう使つかいキシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグをはじめとする、紀元前後から数世紀の間に活躍した魔ま術じゆつ師し達と共に活動していたという噂うわさもあるが、時と計けい塔とうでそれを信じる者は居なかったし、何より、肝心のエスカルドス家の後継者達がそれを信じてはいなかった。
何しろ、彼らはそこまで古い魔ま術じゆつ師しだというのに、ろくな実績を成しておらず、魔ま術じゆつ刻こく印いんもただ古いだけで、刻印に仕込まれた術式の大半が『いったい何の魔ま術じゆつなのか、受け継いだ本人にも理解ができぬもの』であるとして、術式のように見せかけた単なるハッタリなのではないかと子孫が疑いの目を向けている程である。
それでも、魔ま術じゆつ刻こく印いんの機能には高度な生命維持機能なども残されており、かろうじて古き家としての威厳を保っている状態だった。
代々細々とした魔ま術じゆつ特とつ許きよを造り出しながら血脈を保ち続けていたエスカルドス家だが、時と計けい塔とうでも『ああ、あの歴史倒れのエスカルドス家か』などと揶や揄ゆされ続つづけている。
魔ま術じゆつ回かい路ろさえ発達していれば、とここ数百年の当主は代々悩み続けて来た。
不思議な事に、先祖代々魔ま術じゆつ回かい路ろは本数が少なく、どれだけ良いい魔ま術じゆつ師しの血を引き入れようとも、何代それ

を続けようとも、ほんの僅かずつしか回路は発達しなかったのである。
　それでも、衰退するよりはマシだと考えていた。
　魔ま術じゆつ回かい路ろも魔ま術じゆつ刻こく印いんも、成長が止まったわけではない。
　ある意味、そこまで古い家系にもかかわらず、未いまだに魔ま術じゆつ刻こく印いんの寿命の兆きざしも現れない事は脅威であり、その一点については時と計けい塔とうでも時折研究対象として議論される事がある。
　刻印が限界を迎え、回路も徐々に廃すたれ、魔ま術じゆつ師しとして消えゆく流れに呑のみ込こまれたマキリの家系よりはマシだと、そして、自分達はああはなるまいと、必死に魔ま術じゆつ師しとしての基盤を造る努力をし続けた。
　例え、周囲の魔ま術じゆつ師し達から無駄な足掻あがきと笑われようとも。
　それが数百年続いた時──エスカルドス家に、一つの『異変』が産み落とされた。
　魔ま術じゆつ回かい路ろの数が、先代とは正に『桁が違う』レベルであり、身体からだの隅々まで、まるで毛細血管のように体内魔ま力りよくが循環している。
　魔ま術じゆつのコントロールに対する天才的な技術と、過去の魔ま術じゆつを組み合わせて独自の魔ま術じゆつを開発する独創性、そして、一族の中でも比類無き魔ま術じゆつ回かい路ろ。
　まさしく理想とも言える後継者の誕生であった。
　しかし、望んでいた筈はずの能力を持った末まつ裔えいは、それまで非力ながらも安定していたエスカルドス家を大きく傾かせる結果となった。
　彼の才能が芽吹き始めるのと同時に──彼が『魔ま術じゆつ師し』として最も重要と言える『心構え』というものが完全に欠落しているという事も明らかになったのだから。

少年には、幼い頃から『それ』が見えていた。
だからこそ、少年は『それ』が当たり前の事だと思っており、他の皆にも普通に見えるものだと思っていたのである。
しかし、それはすぐに間違いだと気が付いた。
自分が魔ま術じゆつ師しという特殊な家系の一員であるという事を聞かされたのは、まだ10歳にも満たぬ頃である。
それを知った後は、魔ま術じゆつ師しだから『それ』が見えるのかもしれないと思っていた。だが、両親や彼らと交流のある魔ま術じゆつ師しと話すうちに、それも違うと理解できた。
どうやら両親は、自分と同じ世界を見ていない。
感覚でそれを悟った少年は、恐怖を覚えた。
その恐怖の本質を、具体的に他人に伝える術すべを持たぬままに。

両親は最初に息子の異常性に気付いた時、自分達の子が何かの妄想に取とり憑つかれているのではと考えたのだが──検証が重ねられ、どうやら少年の言葉は真実らしいと判断する。
エスカルドス家の息子は強力な魔ま眼がん持ちに違いないと一時的に騒ぎになったが、少年の両目は普通の眼球であり、それにもかかわらず、『それ』が明確に見える事は周囲の魔ま術じゆつ師し達の首を傾かしげさせた。
肝心の少年自身にとっては、それは普通の事だったのだが、周りからは『お前が何故なぜ人間なのにエラ呼吸をしているのか解明できない』とでも言うような目で見られ、少年自身も徐々にその『見えるもの』を疎うとましく思うようになっていく。
何故なぜなら、その『見えるもの』のせいで、両親に何度か殺されかけたからだ。
しかし、その『見えるもの』のお陰で生きながらえたので、完全に

否定する事もできない。
　魔ま術じゆつは好きなのに、人間も好きなのに、その二つと密接に関わる『それ』を嫌いになってしまったらどうなるのだろうか。
　幼いながらもそんな不安を抱いていた少年は、とある船宴カーサへと向かう道中の、魔ま術じゆつ師しか、あるいはそれに近しいものと思おぼしき女性に出会った。
　港への道案内を頼まれた少年との雑談の中で、女性は相手の悩みに気付いたのだろう。
『魔ま術じゆつについて悩みがあるなら、まずは学ぶ事よ。家族があてにならないなら、時と計けい塔とうに行くといいかもね』と、気楽な調子で言って豪華客船へと乗り込んでいった。
　そんな女性魔ま術じゆつ師しの言葉が心に残った少年は、『時と計けい塔とうで学べば、自分の事が解わかるかもしれない』と考え、自分に対する五度目の殺害計画が失敗したばかりの両親に相談した。
　家を離れ、時と計けい塔とうで学びたいと、まだ10歳にも満たぬ少年が。

　結果として、両親は厄やつ介かい払ばらいをするような形で少年を追い払った。
　表向きは、ついに生まれた麒き麟りん児じを、お披露目もかねて時と計けい塔とうに送り込んだという名目で。
　実際、異常な本数の魔ま術じゆつ回かい路ろを持ち合わせ、年齢に見合ったものよりも遙はるかに高度な魔ま術じゆつを使いこなす少年を見て、時と計けい塔とうの歴史に名を刻む秀才が現れたかもしれぬと多くの教授達が色めき立った。
　しかし、事はそう簡単に運ばない。
　過去に類をみない魔ま術じゆつ回かい路ろとそれを制御する才能を持っていると期待された少年だったが――彼の魔ま術じゆつ師しとしてのピーキーな特性、『魔ま術じゆつ回かい路ろと魔ま術じゆつセンスは一流、なれど魔ま術じゆつ師しとしての心構えが完全に欠落してい

る』という部分をどうしても矯きよう正せいする事ができず、講師達は徐々に彼を疎うとみ始はじめるようになる。
　一流の原石があるのに磨くことができず、その原石が原石のまま磨き上げた宝石以上に眩まばゆい輝きを放つ様を見て、自らの利権に組み込もうとした講師達の多くはプライドを傷つけられ、最終的に少年を追い出す結果となった。
　そうしてたらい回しにされる中、ロッコ・ベルフェバンという教授は根気強く少年を矯きよう正せいしようと試みたが、やがてその老教授は、少年の性格とは別の部分に首を傾かしげはじめ、ある日提案した。
　教室を立ち上げたばかりの新参者だが、変わった特性のある男がいると。
　時と計けい塔とうのロードの一人という立場ではあるが、感性が通常の魔ま術じゆつ師しと些いささか違う男であり、その男であれば、少年の望む事を学ぶ事ができるかもしれないと。

　こうして少年は、その新参者のロードとやらに会いに行く事となった。
　だが、少年は「きっと、また追い出されたんだ」と悲しみながら、次の教師もきっと同じだろうと考える。
　──僕は、病気なのかもしれない。
　──魔ま術じゆつ師しらしくしようって頑張ってるのに、どうしてダメなんだろう。
　──先生に、また嫌われちゃったのかな。
　──次の先生は、いつ僕の事を嫌うんだろう。
　そんな事を考えつつも、少年は笑顔を作ろうとした。
　必死で笑顔を整えようと、自分の顔面の筋肉に魔ま術じゆつを掛ける。習った事は無いが、どうすれば笑顔になるのかは幼い頃から知っていた。
　魔術師らしくする為に、少年はせいいっぱいの造り笑いを構築し続

ける。
　何度も、何度も、何度も。繰り返し笑顔になるように筋肉を固定する魔ま術じゆつを掛け続ける。
　永遠にそれが繰り返されるのではないかと少年の心が折れかけた時━━
　その男が、少年の前に現れた。

「君が、フラット・エスカルドスか？　マナもオドも関係なく、知識すらないままに数多あまたの魔ま術じゆつを操る事ができるという少年は」
　部屋に入ったフラットの前に現れたのは、眉間に皺しわを寄せたしかめっ面つらの若い男だった。
　身長がやたらと高く、髪の毛もやたらと長い。
　そしてなによりフラットの目を引いたのは━━その男が、今まで講師を名乗った者達の中で、もっとも内包する魔ま力りよくが低かった事だ。
　不思議そうに眺めていると、その背後からヒョコリと顔を出す小さな影が。
　それは獣けもののように唸うなりながら、鋭い眼光でこちらを睨にらみ付つけてくる同年代の子供だった。
「先生！　先生！　こいつすごくとっちらかった臭いがするよ！　僕が壊していいですか！」
「やめないかスヴィン。彼は正式な客人だ。今のところはな」
　先生、と呼ばれたその魔ま術じゆつ師しは、部屋に入ったばかりの少年に改めて向き直り、愛あい想そ笑わらいも何もないムスリとした顔で口を開く。
「なんだその顔は？　私を試しているのか？　それともバカにしているのか？　あるいはそれが君なりの処世術世渡りだというのなら、すぐに改めた方がいい」
「え？」

「子供が魔ま術じゆつを使って造り笑いなどするな、と言っている」
「！」
　少年は驚いた。
　自分は完かん璧ぺきに魔ま術じゆつの気配を遮断しており、外からは魔ま術じゆつで自分が笑っているなどとはバレないという確信があったのである。
　もしかしたら、この人は自分と同じものが見えているのでは？
　一瞬だけ期待したが、そうではないという事はすぐに解わかった。
「なんだ？　何か聞きたい事でもあるのか？」
「……はい。どうして解わかったんですか？」
「見れば誰でも解わかる。笑顔を動かす際の小頬骨筋と笑筋と口角挙筋の動きが本来の機能を無視した順で動いていた。魔ま術じゆつで無理矢理表情を固定している証拠だ。君は結果だけを重んじ、それをトレースしようとしたのだろうが、過程を観察する事はおろそかにしているらしいな。確かに、知識もないまま魔ま術じゆつを操る事に通じる未熟な考え方だ。才能は認めるが直した方がいい」
　あっさりと少年の期待とは違う答えで解説をされるが、失望もしなかった。
　目の前にいる長身の魔ま術じゆつ師しもまた、自分と見えている世界が違う。
　だが、彼は少年の両親や、他の魔ま術じゆつ師し達とも違う所を見ているような気がした。
　まだこの時点では些さ細さいな予感に過ぎなかったが、少年は自分の顔面にかけた魔ま術じゆつを解き、久方ぶりに浮かべた本当の笑顔で魔ま術じゆつ師しにペコリと頭を下げた。
「僕、フラットって言います！　これから先生の教室で宜よろしくお願いします！」
「……断る。と言いたい所だが、ベルフェバン殿からの推薦状付きでは無む碍げにもできんな」
　魔ま術じゆつ師しは溜ため息いきを吐くと、少年──フラットをジロ

リと睨にらみ付つけながら言葉を続ける。
「まあいい。もうすぐ授業が始まる。隅にでも座って雰囲気だけにでも慣れておきたまえ」
　すると、魔ま術じゆつ師しの横にいた子供──スヴィンと呼ばれていた少年が、目を見開きながら魔ま術じゆつ師しとフラットを交互に見て叫んだ。
「ええ!?　本当にこいつが僕の後輩になるんですか!?　だってこのいがいがしてる臭い、絶対先生を困らせますよ！　噛かまれる前に噛かみちぎった方が！」
「わあ、噛かみちぎるなんて、まるでル・シアン犬みたいだね……。でも、なんかかっこいい！」
「ほら！　こいつ、こんなわけわかんないこと言ってるのに嘘うそはついてない匂いですよ！　完全に壊れた匂いです！　危ないです！　教室が壊される前に壊しましょう！」
　獣けもののようにキャンキャンと吼ほえるスヴィンを見て、フラットはなんだか嬉うれしくなった。
　これまでの教室にいたような、遠巻きに不気味なものを見る目で見てきた魔ま術じゆつ師し見習い達とは違い、獣けものじみた敵意とはいえ、ここまでストレートな感情を向けられた事がフラットにとっては新鮮に感じられたのである。
　フラットはワクワクしながら目を輝かせ、狼おおかみとも虎ともライオンとも取れる獣けもの臭しゆうを発する少年の顔を見つめてブツブツと何かを呟つぶやき始はじめた。
「ロボか……ベートか……いや、やっぱりル・シアンかな……」
「ちょっと待て！　それまさか僕の呼び名の候補じゃないだろうな!?」
　今にも跳びかかりそうなスヴィンの頭を押さえながら、魔ま術じゆつ師しの男が溜ため息いきを吐いた。
「静かにしろ。二人とも叩たたき出だされたいのか？」
　すると、周囲には次々と若い魔ま術じゆつ師し達が入ってくる。

どうやらフラットの他にも新規受講者が複数いるようで、ある者は「あれがロード……！」と瞳を輝かせ、ある者は「あれがロード……？」と首を傾かしげながら魔ま術じゆつ師しの方を観察していた。
フラットが言われた通りに教室の隅にちょこんと座り、獣けものじみた少年が最前列の中央を陣取った所で、その魔ま術じゆつ師しは教室にいる皆に対して名を名乗る。
「現代魔ま術じゆつ科か、三級講師ウェイバー・ベルベット……というのは少し前までの名前だ」
その後、フラットを含めて数多あまたの魔ま術じゆつ師し達の運命を流る転てんさせる事となった、時と計けい塔とうの歴史に刻まれる男の名を。

「いまはII世。ロード・エルメロイII世の名をお借りしている」

×　×

二日目　昼　中央通り

最初の出会いから10年前後の時が経過し、確かにフラットの運命は変化した。
世界からジワジワと追い詰められて引きこもっていく流れから、こうして遠いアメリカの地で行われる聖せい杯はい戦せん争そうに参加する程にアクロバティックな流る転てんを経験したのである。
入れ替わりに、エルメロイII世も胃を痛める事となったのだが、それはまた別の話。
「じゃ、行きましょうか、バーサーカーさん」
「ああ、そうだな」
フラットは現在、警官に変身したジャックによって手錠をかけられていた。

そして、そのままスノーフィールド中央通りの警察署の前まで来ている。
　流石さすがに素のままで来る程フラットも間抜けではなく、変装をした上で体内魔ま力りよくの流れを調節し、結界などにも魔ま術じゅつ師しとして感知されないような処置を施していた。
　帽子を深く被かぶり、サングラスを掛け、似合わない革ジャンを着ているフラットが口を開く。
「うわー。はなせー。はなせよー。おれは無実だー。妻を殺してなんかいないー！　片腕が義手の男が真犯人だー！」
「うむ、君は何も喋しゃべらなくていい」
「そ、そうですか？」
　完全な棒読みで叫び始めたフラットだったが、ジャックに言われてシュンとしながらとぼとぼと後ろをついていく。
　だが、入口に差し掛かった所で足を止め、表情を消しながら頭上を見上げた。
「……どうかしたのか？」
「結界、何重にも張ってますね。最近一度壊されたのかな？　慌てて張り直した感じがします」
「そうか……何秒かかる？」
「５秒あれば、暫しばらくはジャックさんの存在も騙だませるようにできます」
　あっさりと答えたフラットは、その場でゆっくりとしゃがみ込む。
　すると、たまたま入口から出て来た警官がジャックに向かって問い掛ける。
「どうかしたのか？」
「ああ、昼から酔っ払って暴れてやがったんだ。連れてきたのはいいが、気持ち悪いっていうから少し休ませてやってたのさ」
「そうか。大変だな……そこで吐かせるなよ？　まだ昨日のテロの検証も全部終わってないんだからな」
「ああ、大丈夫だ」

そんな会話が背後で繰り広げられる中──フラットは静かに自らの呪言を口にする。

『──介入開始ゲームセレクト』

フラットはしゃがみながら手を床に置き、触れた部分の結界から新たな術式を流しこんだ。
結界に対する、大規模なハッキングを開始したのである。
複雑に張り巡らされた結界の隙間に己おのれの魔ま力りよくを浸透させ、感知機能を結界の制作者のものであると騙だましながら『修復作業』を行っていく。
そして、僅か４秒ほどの間に術式を完成させ、結界の中に潜り込ませた。
フラットの望む形に結界の意味を改い造じり続つづける、自動プログラムのような術式だ。

『──観測完了ゲームオーバー』

笑顔でそう呟つぶやき、ゆっくりと立ち上がるフラット。
「お巡りさん、ありがとうございます。お陰で楽になりました」
「そうか、なら行くぞ」
爽やかなフラットの顔を見て「酔ってるようにゃ見えないがな……」と首を傾かしげていた警官も、自分の職務があるのかそのまま二人を残して去って行った。
そして、フラットとジャックの二人は警察署の中に足を踏み入れる。
フラットは今回の聖せい杯はい戦せん争そう参加者の中で、最も決意薄きマスターであると言えるだろう。
それでも、彼は一歩を踏み出した。
透き通るような薄さなりの、それ故ゆえに純粋な決意を胸に秘め──

この事件の裏に蠢うごめく者達と、正面から相対する為ために。

×　×

クリスタル・ヒル　地下20メートル

スノーフィールドの街には、地下鉄が存在していない。
その代わりとして、街の中央部の地下50メートルの位置に巨大な地下空間があり、街を造った魔ま術じゆつ師しと国の機関が管理している区画となっている。
地上とその空間の間、地下20メートル部分にも小規模な管理区画があり、その内の一つがキャスターことアレクサンドル・デュマ・ペールの『工房』として割り当てられていた。
「ていうかよお、真上にカジノだの歓楽街だの高級レストランだのある癖に、自由に遊びにいけねえってのはどういう事だよ？　生殺しってのはまさにこれだぜ。なんの為ために英えい霊れいとして出て来たんだか解わかりゃしねえぜ」
溜ため息いきを吐き、デュマが目の前にいる五人前後の若者達に目を向けた。
「いいか？　お前らは金は稼いだらちゃんと使えよ？　金ってのは食材と一緒だ。勿もつ体たいねえって思ってるうちに片っ端から腐っちまう」
そんな愚痴を零こぼしながらも、彼の手は一切止まっていない。
「さっき兄弟……お前らのボスとも話したけどよ。俺は昔、稼いだ金の大半を使って、夢みてえな屋や敷しきをおっ建てた事があってな。二階にゃ色んな天才の胸像を飾り付けてな。ユーゴーの奴やつやゲーテにホメロス、シェイクスピアの胸像が飾ってあんだぜ？　その中で一番目立つ場所に飾ってあるのが俺の胸像ってわけだ。一流彫刻家に大枚叩はたいて造らせたのさ。凄すげぇだろ？」
「あの……はい。色々な意味で……凄すごいですね」

背後から聞こえる微妙な応答の声にも振り返らず、デュマは次から次へとペンを走らせ、スクロールのようなものにフランス語で何かの文章を記し続けていた。
「バルザックの野郎は俺の家を見て『うむ、誰が見ても十二分にトチ狂っている。だが、ここまで見事にトチ狂ってると、逆にこう、心が晴れる』なんて褒めてるんだか貶けなしてんだかわかんねえこと言いやがるしよ。……そうか、案外……『あいつ』も家の前まで来たけど、呆あきれて帰っちまったのかもな……」
「……あいつ？」
「おっと、口が滑ったか。まあ、忘れてくれや」
　クツクツと笑いながらペンにインクを付けるデュマ。
　彼は、そのタイミングでようやく背後に視線を向けた。
「で？　来たのは五人だけかよ。兄弟も随分と慎重なこった。なあ？」
　肩を竦すくめながら尋ね、再び紙と向き合うデュマに、集まった者達──『クラン・カラティン』のメンバーの一人である青年が声をあげる。
「……すみません。大半は工場地区の騒動に駆り出されていて……」
　申し訳無さそうに謝ったのは、二十代半ばから三十手前といった所の男だ。とはいえ、顔つきは実年齢よりも若々しく、まだ新入り警官と言っても充分に通る容貌だ。
　彼は先日の吸血種との戦いによって右手首から先を失った警官であり、現在は特殊なギプスと包帯で切断面を処置されている。
「まあいいさ。お前さんがいるなら僥ぎよう倖こうだ。それで？　戦う許可って奴やつは兄弟から出して貰もらったか？」
「それは、まだ……」
　彼は署長から『足手まといにならない事を証明できない限り、今後前線には出さない』との指示を受けていた。
　悔しそうに左手の拳を握りしめる警官に、デュマが『執筆』を続けながら更に問う。

「そもそも、お前さんが戦う理由ってのは、なんだ？」
「え……」
「せっかく魔ま術じゆつ師しだらけでいつ人が死ぬか解わからねえような戦争からドロップアウトできるチャンスだってのによ、なんでわざわざ最前線に戻ろうとすんだ？　お前さんに何の得がある？」
　その問いに対して、右手を失った警官は少し考えた後、ハッキリとした口調で答えた。
「キャスターさんの言う通り……いつ人が死ぬか解わからないからです」
「ほう？」
「俺は……いえ、署長に集められたみんなは、自分を魔ま術じゆつ師しだとは思っていません」
「じゃあ、なんだ？」
　執筆を続けながら尋ねるデュマに、男は更に言葉を返す。
「俺達は、警察官です」
「……」
「いつ人が死ぬか解わからない状況の中で、できるだけ多くの人を救う事が、俺達の仕事です」
　感情の淀よどみなく返ってきたその言葉を聞いて、デュマは楽しげに笑いながら尚なおも問う。
「綺き麗れいごとだな。綺き麗れいごとで飯が食えるのか？」
「貴方あなたが豪邸を建てたぐらいですから、飯ぐらいはなんとか」
「はッ！　言ってくれるじゃねえか。俺の小説が『綺き麗れいごと』か？」
「……！」
　突然立ち上がったデュマの姿を見て、五人の警官達は思わず冷や汗を滲にじませた。
　デュマは作家なので文系だと思われがちだが、実際はかなりアクティブな一面があり、晩年近くでも料理本を書かき綴つづる為ために自ら獣けものの狩猟に出向いたと言われている。

その逸話を想起させるように、ナポレオンに仕えた軍人である父親から譲り受けた体たい軀くは威圧感を纏まとっており、署長は『恐らく私でも殴り合いで勝てる』と言っていたが、ストレートに拳を交わしたら勝負は解わからないのではないかと警官達に思わせた。

　デュマはその威圧感を纏まとったまま、右手を失った警官の腕を取ると──

「その通りだ」

　肩を竦すくめながら、警官の右手首に何かを嵌はめようとする。

「俺は綺き麗れいごと以外も好きだがな。……綺き麗れいごとを言って、それを最後までやってのける主役ってのは、新聞でも戯曲でもよく売れやがるんだ、これが」

　やがてガシャリ、と小気味よい音がして、警官は自らの右手首に軽い圧迫感と適度な重みを感じ取った。

「これは……」

　警官の右腕に取り付けられたのは、大きさがピッタリとあった義手だった。

「特殊なギミックがあるからよ、後で色々と説明してやる」

「いや、しかし……俺はまだ署長に……」

　困惑しながら義手を見つめる警官。

　そんな彼に、再び執筆に戻りながらキャスターである男が言った。

「ジョン・ウィンガード。28歳。ニューヨーク生まれ。血液型はＡＢ型で、魔ま術じゅつ師しの家系の次男坊。魔ま術じゅつ刻こく印いんは継いでおらず、と」

「なッ……」

　突然自分の名前とそれに付随する個人情報を言われた警官は、驚いた顔をしてデュマへと目を向ける。

　するとデュマは、ニヤリと笑いながら言葉を続けた。

「悪いが、お前らの事は全員分調べさせてもらった。ジョンはガキの頃に母親を亡くしてるが、それが原因で警官を目指したんだったな？　もう二度と、自分と同じ悲しみを持つ人間を生み出したくな

いってな」
「……そんな、立派な考えじゃないです。俺はただ、復ふく讐しゆうを……」
「ああ、肯定しなくていいぜ。そういう綺き麗れいごとにさせてもらうし、復ふく讐しゆうなら復ふく讐しゆうで結構だ」
　デュマはニイ、と笑いながら、新たな『物語』を書き留める為ため、ペンにインクを付け直す。
「俺が新聞に『モンテ＝クリスト』を連載してた頃は、街の物売りから国の大臣連中まで、揃そろって復ふく讐しゆう者しやの行く末を気にしたもんだ。お前も、回りからキャーキャー言われるようになるさ。……何しろお前さんは、俺がこしらえた義手伝説を使うんだ。活躍しなきゃ嘘うそってもんだろ」

「警察署長兄弟に言ってやれよ、ジョン。『お前こそ、足あし手で纏まといになるな』……ってよ！」

×　×

警察署　署長室

「……妙だな」
　今朝けさの工場地区の事件についての報告書を読みながら、署長が首を傾かしげる。
　一体如何いかなる手を使ったのか、フランチェスカとそのサーヴァントは、あの街全土に広がりかねなかった惨事を綺き麗れいに食い止めたらしい。
　バズディロットとハルリはそれぞれ別の場所に姿を消し、警察の監視網からは逃れている。
　アインツベルンのホムンクルスも同様であり、何故なぜハルリと行動を共にしていたのかも判明していない状態だ。

しかし、今の署長にとって気に掛かるのはそこではない。
　クラン・カラティンのメンバーに大規模な人払いの結界と物理的な避難誘導を組み合わせて、工場地区から野次馬を退避させようとしたのだが──彼らがそれを行うよりも先に、大規模な住人の避難行動が見受けられたのだ。
　十万人を超す工業地区周辺の市民達が、一斉に街の中央地区や住宅地区へと移動する様は、さながら何かのデモ行進のように見えたと報告されている。
　しかも、そのような混乱の中でありがちな、素行の悪い者達による暴動じみた破壊行為などは一切見受けられず、『避難する』以外の行動はまったく取らなかったとの事だ。
「フランチェスカが何かしたのか……？　いや、しかし……。あの老害は寧むしろ民衆がパニックを起こす様を喜ぶ筈はずだが……」
　今回は街の廃棄を防ぐ為ために無理矢理事態を収めたが、本来ならばフランチェスカは事態を収めるのではなく、徹底的に煽あおる側の存在である。
　──避難した民衆はまだ中央地区や住宅地区をぶらついているようだが……。
　──範はん囲い魔ま術じゆつの形跡はない、か。
　──あとは、個人が催眠か何かの影響下にあるかどうか調査を……。
　そんな事を考えていると、部屋の扉がノックされた。
「入れ」
　すると、開かれた扉から見知った部下の顔が現れる。
　署長の補佐として、秘書官的な役割を担っている女性だ。
「署長、至急お伝えしたい事が」
「……どうした？」
「ロビーに、フラット・エスカルドスが来ています」
「……なに？」
　部下の言葉に、署長は通常の監視システムとは違う、署長室に備え付けられた特殊な監視モニターに目を向ける。

するとその、使つかい魔まの目を通した視界の中に、確かに報告書にあった少年の姿がある。
　何故なぜか手錠をかけられており、周囲の様子をキョロキョロと探っている完全な不審人物だ。
　彼に付き添っている警官を見て、目を細める。
　今日は非番の筈はずの、クラン・カラティンではない一般警官の顔だった。
「最初に公園で英えい霊れいを召しよう喚かんした時も、英えい霊れいらしき存在が警官の姿を取っていた、という報告があったな」
「はい。恐らくは、英えい霊れいをつれて署内に侵入したと思われます。結界は特に反応していないので、魔ま力りよくなどは完全に遮断しているのかもしれません」
「そうだな……それと一つ気になる事がある」
「なんでしょうか」
　秘書官風の女性警官が無表情でそう尋ねると、署長の姿が一瞬揺らめき——
　次の瞬間、彼女の首筋に日本刀の刃やいばが当てられていた。

「貴様は誰だ？」

×　　　　　　　　　　×

デュマの工房

「あの……何故なぜ、デュマさんは宝具を産み出せるんですか？」
　警官隊の一人が、そんな事を尋ねる。
　味方側である『英えい霊れい』に面と向かって話すのは初めてという事もあり、警官隊は誰もが緊張の色を表情に浮かべていた。
　何しろ、大文豪のデュマである。
　警官隊の中には子供の頃に『三銃士』の小説に触れた事がある者も

おり、映画やテレビドラマシリーズ、あるいは人形劇などで彼の作品を心に刻む者が多かった。
　そうした『ファン』でもある警官達からの根本的な問い掛けに対し、デュマは肩を竦すくめながら淡々と答える。
「英えい霊れいってのは意外と融通がきいてな。生前に成した事を色々と伝説にあわせて拡大解釈もしてくれんのさ。俺の場合は、生前は魔ま術じゆつ師しでもなんでもなかった。だがな、作家以外にも稼いだ金で色々とやらかした事があってよ」
　悪戯いたずらが成功した時の子供のような笑顔を浮かべ、デュマは楽しそうに過去を語り始めた。
「まあ、ガリバルディってダチがイタリアを統一するとか言いだした時、エンマ号って俺の船でわんさかと武器を提供してやってな、新聞とかも発行してちょいと後押ししてやったのさ。そしたら引き替えに、過去の遺跡や遺物を発掘調査する博物館の統括責任者にしてくれてな。いやあ、色々と面白ぇもんが見れたし触れたもんだ」
「過去の……遺物……」
「それがキャスターとしての『道具作成』だの『陣地作成』だの、俺の裁判騒ぎだのの逸話と合わさって一つの技術になったってわけだ。魔ま術じゆつじゃねえ。その宝具の過去を……物語を改かい竄ざんして貼り付け直す『技術』だ。もしかしたら、あの時に触った遺跡か遺物になんか影響を受けたのかもな。ポンペイのあたりから色々ととんでもねえもんも出て来てたからな」
　自分でも完全に能力が身についた理由を把握しているわけではないようだが、英えい霊れいとして世界から与えられた知識があればそれを完かん璧ぺきに使いこなす事ができる。
　デュマは過去を懐なつかしみながらクツクツと笑い、そのままスクロールへの執筆を再開した。
「あの時期も色々と面倒ごとが多かったが、結果的に親父おやじの仇かたきも遠回しに討てたしな」
　アレクサンドル・デュマの父親であるトマは歴史に名を残す高名な

将軍である。
　かつてナポリで捕虜になった時に砒ひ素そを盛られて身体からだを壊し、それが原因で寿命を大幅に縮める事となった。
　そんなトマ将軍の息子であるデュマの支援によりナポリ侵攻が進み、味方の市民達はデュマの前で父を捕虜にしていた王の像の首を刎はねるという形で敬意を示したのである。
　直接ではないものの、儀式的に仇かたきをとった形にはなるのだが──警官達はそんなナポリ王への復ふく讐しゆう譚たんよりも、デュマの父親の方に興味があるようだった。
「父親というと、あのナポレオンの部下の」
「やめろやめろ。そりゃ親父おやじはナポレオンの部下だったが、ちょいとその皇帝陛下と方針で揉もめてな。親父おやじはどこぞの侯爵様だった爺じいさんと黒人奴隷だった婆ばあさんの間に生まれた身の上だったんだが、それを理由に黒人差別の流れで追い出されちまった。おかげで親父おやじは失意の中で衰弱死して、俺とお袋は軍の年金払いすら拒否されて貧乏暮らしってわけだ」
「恨んでるんですか？　ナポレオンの事を」
　話に興味を持った警官が踏み込んでくるが、デュマはそれを疎うとみもせず、むしろ誇らしげに自分の思い出話を語り続ける。
「そこがまた面白ぇところでな。俺は親父おやじが死んだ後、二回だけナポレオンの顔を見てるんだが……まあ、その話はいつかまたしてやるよ」
　話が長くなると思ったのか、デュマは一度その話を打ち切ろうとした。
　だが、そこから別の話を思い出し、また楽しそうに語り始める。
「そういや、俺は親父おやじが死んだ時、まだバカだったからな。鉄砲持って二階に駆け上がろうとしたんだ。『親父おやじを殺した神様を殺してやる』って言ってな！　バカだろ？　天国は上の方にあるだろうから、二階からなら弾たまが届くと思ってたんだぜ？　ガキの頃の俺」

「いや……子供の頃の事ですから」
「お袋もお袋だぜ、俺をひっぱたいて言ったのが、『うちにはもう、神様に戦いを挑むような英雄なんかいらない！』だとよ。英雄ってのは歴史って奴やつに引っかき回された挙げ句に、家族を残して死んじまうからな。……にしたって、その前に神様を冒ぼう瀆とくしたとかそっちでひっぱたけって話だよ。なあ？」
　肩を竦すくめながら笑うデュマだが、警官達はそれが笑って良い話なのかどうか判断がつかず、互いに顔を見合わせていた。
「ん？　どうした？」
「あ、いえ……笑っていいのかどうか解わからなくて……」
「なんだよ。もしかして俺に気をつかってんのか？　気にすんな、笑え笑え。まあ、普通は言いい淀よどむ奴やつも多いだろうし、過去をベラベラ喋しやべるってのは良くはねえのかもしれねえがな。まあ、俺はこんな俺のたわいもない昔話が誰かの暇つぶしになるんなら、いくらでも話してやるさ。講演料でも頂けるなら少しは面白おかしく話を盛ってやるけどな」
　カラカラと笑うデュマは、そのまま警官達に問い掛ける。
「で？　いいのか？　俺みたいな大作家と話す機会なんて滅多にねえぞ？　他に何か聞いとく事があるんだったら今の内だぜ？」
　どうやら彼は話し好きらしいという事に警官隊が気付き始め、適当に自慢話を引き出して機嫌を取るべきだろうかと考え始める中──
　右手の義手を馴な染じませようと色々動かしていた警官──ジョンが、真剣な表情で尋ねた。
「……俺達は、勝てますか？」
「俺は作家だ。軍師でも予言者でもねえぞ？」
「貴方あなたの造り出した宝具は本当に素晴らしいものです。ですが、使う俺達は結局人間です。宝具だけもった英えい霊れいもどきの俺達が……あの怪物達に勝てるんでしょうか」
　するとデュマは、暫しばらく沈黙した後、コキリと首を鳴らしてから言葉を紡つむいだ。

「……また、俺の昔話になっちまうが」
「？」
「俺は最初、演劇にも小説にも興味なんざ無かったんだ。お袋に古典の退屈な悲劇ばっかり読まされて、辟へき易えきしててな。……だけどよ、ある日見た『ハムレット』って悲劇だけは別もんだった。圧倒されてな。思わず無理言って脚本を譲ゆずって貰もらって、全部覚えちまうぐらい何度も何度も読み返した。俺はそれで、演劇って奴やつに興味が出てな。あれが、俺の始まりの一つだ」
「ハムレットなら、納得できます。ウィリアム・シェイクスピアの代表作ですから」
　一様に頷うなずく警官達を見て、デュマはニヤリと笑う。
　そして、今度は悪戯いたずらが成功したばかりの子供のような目をして話の続きを語り出した。
「ところが、だ。その『ハムレット』は、デュシスって旦那が翻訳……いや、ありゃ翻案だな。とにかく原作を壊しに壊してから自分なりの解釈で書き直したブツでな。俺も後で本物のシェイクスピアの書いた脚本を読んで腰が抜けたもんだ。あの本物に比べりゃ、俺が見たもんは原作ファンもシェイクスピアも大激怒しそうな酷ひでぇ本、まさに『ハムレットもどき』だったのさ」
　デュマはケラケラと笑った後、その哄笑をピタリと止め、ニヤリと口元を歪ませながら警官達に顔を向けた。
「だがな、俺の人生を変えたのは、その『もどき』の方だ。これだけは誰にも否定させねえ。まあ、大本が良すぎたからってのはあるかもしれねえが、偽にせ物ものだろうとなんだろうと、そこにはデュシスの旦那なりの本物の熱意が詰まってたって事さ」
　そして、いつの間にか修復と改良を終えていた警官達の武器を渡しながら、楽しげな喜劇を見る観客の顔で、しかしながら舞台を操る演出家のような自信を持って断言する。
「安心しろよ。お前らはまだ知らねえが、兄弟……お前らのボスの熱意は本物だ。お前らが最後まであいつを信じ抜きゃ、たかだか本物に

すぎねぇ伝説の一つや二つ、いくらでも覆くつがえしてやれるだろうよ」

×　　　　　　　　　　×

警察署　署長室

　銀色の刃やいばが煌きらめく中、署長室内の時間が止まる。
　その長い沈黙を破ったのは、刀を突きつけられた女性警官の方だった。
「どういうおつもりですか？　私はヴェラ・レヴィット。署長が招集なされたクラン・カラティンのメンバーの一人にして貴方あなたの忠実な部下ですが、これは一種のパワーハラスメントと捉えても？」
　無表情のまま淡々と語る女に、署長は目を細める。
「大したものだな、本当にヴェラが言いそうなことを口にする」
「本物ですから」
「いいや、本物の彼女は今、監視室に向かっている」
　理由こそ口にはしなかったが、署長には確信があった。
　自分を含め、『クラン・カラティン』のメンバーには肩に電子チップが埋め込んであり、署長はそのチップによる互いの距離を、体内魔ま術じゅつで増幅し、まるでレーダー画面が目の前に浮かぶかのように感じ取る事ができる。
　その感覚を信じるならば、三階のモニター監視室に向かっているのがヴェラのものであり、他のメンバーの反応はこの室内には一つたりとも感じられなかった。
　ヴェラの姿をした何者かは、署長の言葉がハッタリかどうか悩んでいるようだったが──次の瞬間、溜ため息いきを吐きながら首を振った。
「今、読み取れました。ＩＣチップ……そこまで複雑なもの即座にはコピーできません。もう少し時間をかけるべきでしたね、マスター」

マスター。
その単語を聞き、署長の身体からだに緊張が走る。
すると、その緊張をほぐすかのような緩い声が、署長室の中に響き渡った。
「あー……ＩＣチップ？　もしかして電子機器か何か身体からだに埋めてるんですか？　凄すごいや、確かにそれだと、俺じゃ解わかりません。失敗したなあ」
部屋の隅から溜ため息いきが聞こえ、署長は眼前の部下の姿をした存在に警戒しながらそちらに視線を向ける。
するとそこには、落ち込んでいる様子のフラット・エスカルドスの姿があった。
──モニターに映ってたのは、魔ま術じゅつで造り出した偽装映像か！
署長は即座に行動に移る。
部屋の結界に仕込んでいた魔ま獣じゅうをけしかけて人質に取り、サーヴァントの動きを封じようとしたのだ。
──このような搦からめ手てで来る以上、英えい霊れいの戦闘能力自体は高くないとみた。
──部下が戻るまで、切り抜けられるか……!?
結界内の防御システムを発動させれば、クラン・カラティンの面子めんつにもそれは伝わる。
署長は即座に空いた手で拳銃を抜き放ち、床に向かって撃ち放つ。
ほぼ無音の発射音と共に、床に届いた特殊弾頭が室内の結界を発動させ──三匹の魔ま獣じゅうがフラット・エスカルドスの周囲へと顕けん現げんする。
そして──

『──干渉開始プレイボール』

フラットが何か呟つぶやくと同時に、その魔ま獣じゅう達がフラッ

トに頭を垂れ、あまつさえ尻尾を振り始めたではないか。
「な……に……？」
　それだけではない。
　その他の防衛用魔ま術じゆつも全て発動が無効化されており、クラン・カラティンへの緊急通達システムすら閉ざされている。
　──信じられん……。二日前のアサシンや吸血種のような力技ではない。
　──既に展開された魔ま術じゆつをリアルタイムで書きかえ、私のシステムを全て乗っ取ったと言うのか!?
　天恵の忌いみ子ご。
　フラット・エスカルドスという少年に与えられたその二つ名が決して大おお袈げ裟さなものではないという事を実感したのも束つかの間ま──

『──状況終熄ゲームセツト』

　再び何かを呟つぶやいた声に合わせて、フラットが開いていた手を閉じると、魔ま獣じゆう達が元の発動場所へと戻って霊体化し、全ての状態が防御結界の発動前へと修復された。
　──だが、まだ反撃の目はある。
　魔ま獣じゆうが顕けん現げんした時点で、その気配を感じた署内のクラン・カラティン達がこちらに向かっている筈はずだ。
　本物のヴェラも含めて五人がかりなら、天才とサーヴァントが相手といえども優位に立つことができるだろう。
　──問題は、それまでこのサーヴァントを抑え込む事が……。
　□□……!?
　そこで署長は、改めて目を見開いた。
　刀を突きつけていた偽にせの部下の横に、同じ姿をした存在がもう一人立っていたからだ。
「攻撃態勢を解いて下さい、オーランド・リーヴ警察署長」

ヴェラと同じ口調で、フラットのサーヴァントらしき存在は淡々と告げる。
その僅かな一言の間に、部屋に更に二人の同じ人影が現れ──机上のモニターを指差した。
署長が彼女達から大きく身を引き、飛とび退すさりながらモニターを確認すると、そこには驚きよう愕がくすべきものが映し出されていた。
全てのカメラの中に、オーランド・リーヴとヴェラの姿が映し出されており、別々の場所にいるクラン・カラティンそれぞれになんらかの説明をしている。
──これは……映像の改かい竄ざんではない。
──私とヴェラに化けているのか……⁉　この数……全てだと⁉
心中に湧き上がった疑問に答える形で、ヴェラの姿をした英えい霊れいが口を開いた。

「この警察署内の人口は、もはや四割が私です」

相手の様子とフラットを見て、署長は静かに刀を収める。
「どうやら、主導権は君が握ったようだな」
「あ、解わかってくれました？」
「ああ、殺すつもりなら、もっと楽に私を暗殺する手段があっただろう。自分達の力の一端を見せつけて交渉を有利にする。まるでマフィアのやり方だな」
「いや……普通に結界が全部署長さんに繫つながっていたから、部下の人に化けてもらって様子を探さぐって貰もらおうとしたんですけど……まさかバレて戦闘みたいになっちゃうと思わなかったです。驚かせてすみませんでした」
ペコリと頭を下げるフラットを見て、署長は思わず眉を顰しかめた。
魔ま術じゅつ師しらしからぬ気質をしているとは聞いていたが、何

故なぜこのような緩い気質の若者が聖せい杯はい戦せん争そうに参加しているのだと。
　──いや、それとも、これも含めてすべて偽装か？
「それで？　用件は何かね」
「ええ、実は、用件っていうか、警察の関係者にマスターさんが居るなら、会っておいた方がいいかなって話になって」
「……待て、そもそもどうして警察署にマスターがいると？」
「街を歩いてる警察の人達の中に、何人か魔ま術じゆつ師しの人が居ましたし、警察署を中心にして、魔ま術じゆつ的てきな監視システムが組まれてましたから。あと、もしかしたらあのテレビで演説してたセイバーさんもいるかなって思って……」
　──念を入れて多重に偽装していたのだがな。
　監視システムが見破られていた事に顔を顰しかめるが、先刻の異常な技術を見せられた後ではさして驚きも感じない。
「もう一つの監視システムは、町の矯きよう正せいセンター？　刑務所ですかこれ？　そこに繋つながってましたけど、こっちの方が近かったので」
　──ファルデウスの監視網だな。奴やつでもダメか。
　少しだけ胸のすく思いをした署長は、改めて問う。
「共闘を持ちかけるという事は、狙う相手がいるのだろう？　それは誰だ？」
「え？　ああ！　すいません、共闘っていうか……少し違って」
「？」
「俺達は、その、通報に来たんです！」
　通報。
　魔ま術じゆつ師しである以前に警察署長であるオーランドが人生で止めどなく耳にしてきた単語だが、まるで今初めて聞いたかのような顔をして眉を顰しかめる。
　そんな署長に、フラットは言った。
「実は、病院に入院してる人が聖せい杯はい戦せん争そうのマス

ターっぽいんですけど」
「……何？」
「今朝けさから、多分その病院にいる人が、凄すごい数の街の人と薄い魔ま力りよくで繋つながってるんですよ。だからその、警察関係者で魔ま術じゆつに詳しい人がいるんだったら、知らせておいた方がいいかなって」

×　　　　　　　　　　　×

スノーフィールド中央病院

　繰くる丘おか椿つばきの主治医である女医は、電話が来ているとの通達を受けて事務室まで足を運ぶ。
「ああ、レヴィット先生。妹さんから電話ですよ」
「ありがとう。……珍しいわね、あの子の方から電話をくれるなんて」
　女性看護師から受話器を受け取り、昨日こちらから連絡したばかりの妹に話しかけた。
「もしもしヴェラ？　ゴメンなさいね、病院だから携帯は使えないの」
『問題ありません、姉さん。今日も街の混乱が続いているようですから、そちらにも影響がないかと心配になりました』
「ああ、工場地区の方で火事があったのよね。こっちは大丈夫よ。まだ『家族が街の外に出ようとしない』っていう人達が精神科の方にたくさん来てるみたいだけど……。なんなのかしらね……」
『ところで、繰くる丘おか椿つばきちゃんの体調はどうですか、姉さん』
「ああ、椿つばきちゃん？　それがね、ここ数日とても状態がいいの。いつ目を醒さましても不思議じゃないぐらい。変わった事と言ったら、手に変な痣あざがあるの」

『痣あざ……ですか？』
「最初は誰かの悪戯いたずらかと思ったんだけど、擦こすっても消えないし、刺青いれずみとも違うみたいだし……でも、その痣あざみたいなのができてからなの。体調が良くなったのは。ああ、勘違いしないで、痣あざの模様のせいで良くなったなんてオカルトな事は考えて無いから」

　その後、僅かな雑談をしてから電話を切った女医──アメリア・レヴィットに、女性看護師が語りかける。
「妹さんって、確か若いのに警察署で結構出世してるんですよねえ？」
「ええ、子供の頃に母さんの方と一緒に暮らしてたせいか、母親譲りの堅苦しい喋しゃべり方かたの子でね。逆に、警察だとそれがしっくりあってるかもしれない」
　アメリアはそのまま椿つばきの病室に向かい、独りごとを呟いた。
「それにしても、あの子が椿つばきちゃんの事を気にしたの久しぶりね……」

×　×

警察署　署長室

　電話を切った『本物の』ヴェラが、無表情のまま署長の方に向き直る。
「確認しました。確かに、エスカルドス氏の言う通り、繰くる丘おか椿つばきに令れい呪じゅが発現しているようです」
「……っていうか、腕の痣あざの話してたの、お姉さんの身内の人だったんですね」
「姉です。魔ま術じゅつの才能がなかったので、彼女はこちらの世界の事は知らずに育ちました」

淡々と言うヴェラに、フラットが微笑ほほえんだ。
「姉妹揃そろって人を助ける仕事なんですね。凄すごいです」
「……どうも。私はともかく、姉は純粋な努力家ですから」
皮肉ではなく本当に尊敬していると言った雰囲気のフラットに、ヴェラは素っ気ないものの礼を言った。言葉から察するに、自分の事よりも、姉を認められた事の方が嬉うれしいのかもしれない。
すると、そこで署長が咳せき払ばらいをした。
「つまり、意識不明のままサーヴァントを召しよう喚かんした……そういう事か？」
「はい。場合によっては、英えい霊れいが単独行動をしている可能性もあるかと」
「……何故なぜ繰くる丘おか夫妻ではなく、娘に？　彼らがいまだに家に引きこもっているのと何か関係があるのか？」
状況を整理すればするほど、新たな疑問が湧き上がる。
警察の権力を利用して病院に干渉しようにも、相手のサーヴァントの正体が解わからないのでは罠わなに飛び込むようなものだ。
「あの……大規模な魔ま術じゆつでその病室を吹き飛ばすという手もありますけど？」
フラットの提案を聞き、署長は眉間の皺しわを深くする。
「……いざともなれば、そうするしかないのだろうが……私は自分達が正義であるという立場を枷かせとしてクラン・カラティンと盟約を結んでいる。私は彼らに正義を保証している身なのだ。少なくともその少女の犠牲が正義であると言える程……他に手がないと断言できる状態でなければ、まずは選択肢から外したい所だな」
苦々しげに言う署長の言葉を聞いて、フラットはホッと胸をなで下ろした。
「そっか、それを聞いて安心しました！」
「……？」
「もし、最初からそれをやる人達なら、共闘する事はできないって事です。……多分、みんなが言う『魔ま術じゆつ師しらしい魔ま術じゆ

つ師し』なら、割り切って最初からそうする人も多いんでしょうけど」
「……私を試したのか？」
　大きく溜ため息いきを吐きながら、署長はフラットを観察する。
　──確かに、魔ま術じゆつ師しらしくはないのかもしれんな。この少年も、私も。
　──合理性を第一とする魔ま術じゆつ師しならば、普通は容赦なくその『意識不明の少女』を始末するのだろうな。
「……だが、私が最終的に選ぶのはより大多数の秩序だ。これ以上被害が広がるようならば、私はその少女にも銃を向ける事ができると断言しておこう」
「はい！　でも、ちゃんとそう言ってくれる署長さんなら、俺も安心して紹介できます！」
「紹介……？」
　訝いぶかしむ署長に対し、フラットはニコニコ笑いながら、懐ふところから取り出した機械を警察署長に投げ渡した。
　それは、一台の携帯電話であり、既にどこかに通話が繋つながっている。
「俺の方で二十七段階で暗号化してますし、向こうでも処理して貰もらってますんで、多分魔ま術じゆつ的てきにも科学的にも誰かに盗み聞きされる事はないと思います。どうぞ」
「……」
　促されるままに、署長は携帯を耳に当てた。
　それを察したのか、受話器の向こうにいる男が、言葉を紡つむぐ。
『……スノーフィールド市警を取とり纏まとめる、オーランド・リーヴ警察長とお聞きした』
　若さも感じさせるが、それなりに威圧感に満ちた声。
「その通りだ。君は何者だ？」
　フラットの協力者であろう事を推測しながら言葉を紡つむいだ署長だが、そこで一つの推測に思い至って動きを止めた。

—まさか。
　彼の予感の正否を告げる為ために、受話器の向こうの男が口を開く。
　ただ、自分が如何いかなる存在なのかを、スノーフィールドの黒幕の一人に知らしめる為ために。
　その後、フラットや署長を含めて、数多あまたの魔ま術じゆつ師し達の運命を流る転てんさせる事となった、聖せい杯はい戦せん争そうの歴史に刻まれる男の名を。
「時と計けい塔とう現代魔ま術じゆつ科か講師。普段はII世……ロード・エルメロイII世の名をお借りしている」
「……！」
　驚きよう愕がくに目を見開く署長に対し、時と計けい塔とうの最高権力の一人だと名乗った男は、更に言葉を積み重ねる。
『だが、君達に対して、私は敢あえて別の名を告げよう』

『ウェイバー・ベルベット……かつて冬木の地で聖せい杯はい戦せん争そうに参加した、ただの三流魔ま術じゆつ師しだ」

沼地の屋や敷しき

　昼になっても、ファルデウスの部隊は屋や敷しきの周囲に戻ってこなかった。
　それをウォッチャーの影法師達の言葉で確認したシグマは、メモ帳を開いて情報の整理を行う事にする。
　セイバーは現在『回りを見張っている兵士達は腹をすかせて大変だろう』と言いだし、こちらに残っていた狙撃兵やスポッター、偵察兵の所に屋や敷しきの中にあった保存食を調理したものを差し入れにいっていた。
　影法師の話では、突然横に現れたセイバーに狙撃手とスポッターがパニックを起こして攻撃をしかけたそうだが、現在は丸く収まったらしい。
　アヤカはその間も屋や敷しきの中にいたのだが、無防備なのかと言うと、影法師は『セイバーの連れてきた魔ま術じゆつ師しが護まもっている』と言っていた。
　──仲間を召しよう喚かんする宝具……そんなものもあるとは、英えい霊れいとは奥深いな。
　自分が最も異質な英えい霊れいと契約を結んでいる事を棚にあげ、シグマは更に情報を纏まとめていく。
　アサシンは現在屋や敷しきの周囲を巡回中。
　彼女はマスターである吸血種の魔ま力りよくを使う事を拒絶しており、件くだんのセイバーの宝具で呼んだ魔ま術じゆつ師しから魔ま力りよくの提供を受けているようだ。それと引き替えに一時休戦しているとの事で、シグマは他人に命を預けた状態であるアサシンの状況に

少し同情する。
　彼女はファルデウスの部隊を警戒しており、残留した偵察兵などが攻撃をしかけてきたら即座に始末するつもりだろうと影法師が推測を述べた。
　どうやら、ウォッチャーの力でも心の中まで完全に読めるわけではないらしく、これまでの行動から性格を推測しているとの事である。
　──ウォッチャーも、完全に万能ではないわけか。
　アサシンの宝具も、既に警察署で発動させた髪の毛の攻撃だから忠告できただけで、もしも初見の攻撃だった場合船長のアドバイスは無かったそうだ。
　──……運に救われたな。
　そんな事を考えつつ、シグマはメモにペンを走らせる。万が一セイバーやアサシンに見られた時の為ために、彼自身にしか解わからない暗号で記している。
「……端から見ると、悪あく霊りように操られてわけわからん文字を書いてるようにしか見えんな」
　船長の言葉を無視しつつ、シグマは更に尋ねた。
「陣営ごとの戦力差を確認しておきたい。ファルデウスの部隊以外に、組織単位で聖せい杯はい戦せん争そうに挑んでる者達はどれだけいる？」
「そうだな。人数だけなら一般人の警官も含めて動かせる警察署長とデュマのコンビだろう。少人数で危険なのはハルリ・ボルザークが連れて歩いてるホムンクルスの中にいる奴やつだ」
「……中に入っている？　何者だ？」
「さて、それが問題でな。まだ正体を明かしてないから、ウォッチャーも完全に摑つかんじゃいない。いや、あそこまで強力ならウォッチャーの野郎は気配で推測できる筈はずなんだが……」
　そこで姿を消し、蛇へびの杖つえを持った少年が引き継いで話し始める。
「完全に自分の気配を遮断している。それでいて力は行使しているん

だから大したものだよ。ウォッチャーだけじゃなく、最高レベルの気配感知能力を持っているエルキドゥでさえ、彼女やハルリの英えい霊れいの存在に気付いていない」
「……なるほど」
「他にも警戒するべきチームは多いけれど、無言で淡々と行動を起こしてるチームもいるから、私達にも目的までは完全に把握できていない。ヒッポリュテ組もまだ動きが読めないし、銀ぎん狼ろうとエルキドゥも動き出すまでは何をするのかは推測できないね」
　──なるほど、となると、少人数で行動する陣営も油断はできないな。
　シグマはやはり一筋縄ではいかないと考え、改めて気を引き締める。
「ティーネ・チェルクが率いる、土地守の一族はどうだ？」
「今の所は実働部隊が五十六人、街の中で活動しているね。渓谷の方にある彼らの拠点にもまだまだ人数はいる筈はずだけど、その集落はウォッチャーの観測範囲の外だ。ティーネ・チェルクの戦力は四十六人といった所だね」
「？　五十六人いるんだろう？」
　人数が合わないと訝いぶかしむシグマに、蛇へび杖づえの少年は淡々とした調子で答えた。
「七人は他の組織の内通者で、三人は内通を持ちかけられて揺れている。使い物にはならないだろう」
「……そうか。大変そうだな」
「どこの組織にも内通者はいるさ。ファルデウスの部隊にも三人、スクラディオ・ファミリーと内通している人間がいるし、フランチェスカレベルの魔ま術じゆつ師しなら、内通者じゃなくても暗示一つで簡単に他陣営の人間を寝返らせる事ができるだろう」
「いきあたりばったりなフランチェスカらしい」
　本来の雇い主に皮肉混じりの感想を述べた後、シグマは更にウォッチャーに尋ねる。

「今後、動きが予想できる陣営は？」
「フラット・エスカルドスと警察署長が一時的な共闘関係を結んだ。夜の10時に署長がクラン・カラティンを招集、作戦を伝えて、中央病院で行動を開始する筈はずだよ」
「病院？」
「そこに、マスターの一人が意識不明の状態で入院している。まだ英えい霊れいは正体を現していないが、既に行動は起こしているみたいだよ。市民に取とり憑ついて行動を操っているようだ。その規模が数万人単位に膨れあがっているから、警察署長も放置できないんだろうね」
　話を詳しく聞いてみると、どうやらフラットと警察が共闘して、その少女を隔離し調査する予定らしい。少女が繰くる丘おか家けの改良したウイルスに感染している為ため、一ひと際きわ慎重に動くだろうとの事だった。
「何故なぜか吸血種がその少女のベッドの下で寝ていますけど、理由は不明です。ただ、アサシンさんを貶おとしめる為ために彼女を利用しようとしているような独り言を言っていました」
　絡から繰くり羽ば根ねの少年になった影法師が、ジェスター・カルトゥーレという吸血鬼についての情報を述べる。
　どうやらアサシンのマスターは余程性格が悪いようだ。
　シグマはそれらの情報を聞いて、自分はどう動くかを考える。
　──大人しくしているべきか？　それとも、直接介入するか、ファルデウス達に情報の一部を流して向こうにやらせるべきか……、
　様々な可能性を考慮するシグマだったが、影法師は、更に混乱させる言葉を口にする。
「ええと、その……確定じゃありませんけど、夜10時を過ぎたら、病院にアルケイデスが向かうかもしれません」
「バズディロットの弓兵か？　何故なぜ？」
「恐らく、病院にいる少女の事を知る事になるからです」
「？」

わけがわからずに小首を傾かしげるシグマに、船長の姿になった影法師が言った。
「単純な話だ、小僧。10時に署長がクラン・カラティンに作戦を伝えると言ったろう？」
「まさか……」

「汚職警官って奴やつさ。まさか自分の部下に、よりにもよってスクラディオ・ファミリーの手駒がいるとは考えちゃいねえだろうな。警察署長閣下もよ」

夜10時　スノーフィールド中央教会

　市内最大のカジノホテル、クリスタル・ヒルを挟んで警察署と反対側にあるスノーフィールド中央病院。その病院から少し離れた場所に、その教会は建っていた。
　歴史の浅い街ではあるが、それなりに威厳のある外観をしている為ため、普段は信心深き人々や観光目当ての来訪者などで賑にぎわう教会である。
　しかし現在は、人払いの結界が張られており、通常の人間は立ち寄ろうとは考えない空間となっていた。
　そんな中、夜の教会に残っていた神父が苦笑しながら口を開く。
「保護を求めに来た……というわけではないようだな。あの署長をからかってやろうと思っていたのだが」
　眼帯が特徴的な神父──ハンザ・セルバンテス。
　彼の周囲には四人のシスターが展開しており、戦闘服でこそないものの、修道服のままいつでも戦える準備をして来訪者を警戒していた。
　それもその筈はずであり、教会に現れたのは、ヴェラを始めとした、二十五人程の『クラン・カラティン』のメンバーである。
　署長は数名のメンバーを手元に残して警察署から指示を出しているが、病院に対する作戦行動の一端として教会を利用する事を提案した。
「事情は分かったが、それを私が許可するとでも？」
　首を傾かしげるハンザに、ヴェラが答える。
「支援を求めているわけではありません、作戦の内容によっては、こ

こに一人保護して頂く形になると思います」
「サーヴァントだけが活動を続ける意識不明のマスターか。無論、保護する事には監督役としても神父としても一人の人間としても賛成だが、それは聖せい杯はい戦せん争そうを辞退する意志がある場合だ。今回のケースでは、そのサーヴァントとの交渉ができるかどうか、だろう？」
「ええ、場合によっては、サーヴァントを強制的に排除する事になると思います。その場合は監督役の領分を越える事象ですので、貴方あなたに助力を求める事はありません」
「なるほど。体ていよく利用されている気がするが、まあ、それが監督役というものなのだろう」
　肩を竦すくめるハンザだが、彼は警官達の横で、こちらをじっと見ている青年に気付く。
「ところで彼は？　警官ではないようだが」
　すると、指摘された青年──フラットが慌てて一歩前に出た。
「あ、はじめまして！　俺、フラットっていいます。バーサーカーのマスターをやっていて、今回の件に協力させて貰もらう事になりました。聖せい杯はい戦せん争そうの監督役、よろしくお願いします！」
「ほう、やっと素直に私を監督役と認めてくれるマスターが現れたか。ハンザ・セルバンテスだ。こちらこそよろしく頼むとしよう」
　自嘲気味に笑うハンザの全身を観察して、フラットが尋ねる。
「あの……違ってたり、失礼だったりしたら謝りますけど……ハンザさん、おととい警察の駐車場で戦ってませんでした？　身体からだの七割ぐらい、多分機械ですよね、これ……」
「……ほう、解わかるのか？」
「ええ、所々魔ま力りよくの流れが幾何学的に変化してますし、僕に解らないものだから、多分機械だなって！　わあ、ランガルさんや橙とう子こさんの人形とも違う……凄すごい、サイボーグって俺、初めて見ました！　ロケットパンチとか撃てるんですか⁉　もしかしてドリルとかも……？」

ハンザの身体からだの特性を見抜いたフラットに、ハンザが首を振る。
「拳は飛ばないし、ドリルは秘密だ。だが、片腕は最大３メートル伸びるし、グレネード弾の射出も可能だな。……ここだけの話だが、足には聖別済みのチェーンソーが仕込んである」
「……感動しました。時と計けい塔とうの魔ま術じゆつ師しでも良ければ、握手して下さい！」
「いいとも。君はいいセンスを持っているな。魔ま術じゆつに飽きたら聖堂教会に帰き依えしたまえ」
　仇きゆう敵てきである筈はずの時と計けい塔とうの魔ま術じゆつ師しと聖堂教会の代行者が、互いに認め合うような笑顔を向けて硬い握手を交わしてみせた。

　困惑する警官達を余所よそに、ツーマンセルで待機していたシスター達がささめきあった。
「ハンザ師父、魔ま術じゆつ師しに手の内を明かしてるけど……いいのかな」
「いつもの事だから仕方ないよ。ハンザ、中身は子供みたいなもんだから」

×　　　　　　　　　　×

暗い場所

　工場地区にある己おのれの工房を放棄したバズディロットは、スクラディオ・ファミリーが用意した予備の拠点で待機していた。
　そして、そんな彼の前で、ウィジャ盤の形をした『通信機』がゆっくりと動き出し、順繰りにアルファベットを刺して文章を造り上げて行く。
　その内容を確認したバズディロットは、無表情のまま暗闇に語りか

ける。
「アルケイデス、動けるか？」
　すると、闇の中から霊体化を解いたアルケイデスが現れ、濃厚な魔ま力りよくを身体からだ中に巡らせながら口を開いた。
「当然だ」
「……警察内部の『鼠ねずみ』から連絡が来た。病院に行くぞ」
　そして、普段と変わらぬ、感情を消し去った声でアルケイデスへと指示を出す。
「……必要な時が来た、子供を一人、手にかけてもらうぞ」
「そうか」
　逡しゅん巡じゅんした様子は、欠片かけらも見受けられなかった。
　バズディロットはアルケイデスのそんな態度を見て満足する一方、だからこそ浮かび上がった疑問を口にした。
「今さら言うのもなんだが、あのキャスターとの取引に損はなかったとはいえ、随分と素直に身を引いたものだな。意地でもあの女神を殺しきるかと思ったが」
　令れい呪じゅを全て使い尽くしたバズディロットに、アルケイデスを止める手段は無い。
　それ故ゆえに、旨うまみのある取引を一つ棒にふる覚悟をしていたが、意外にもアルケイデスが弓を収めたのだ。
「……あれは、私の知る神ではない」
「場所が違うという事か？　しかし、本質は似たようなものだろう」
「いや、そういう意味ではない。あれは本体でも分け身でもなく……恐らくは、他者の人格に焼き付けた叫び声のようなものだ。時代すら越えた、禍まが々まがしき呪のろいよ」
　アルケイデスは冷静に装備を調ととのえながら、臨時の工房の出口に向かって歩み始める。
「俺は神は憎むが、神が残した呪じゅ詛そは二の次だ。いずれ始末する事に変わりはないが、その前にあの英雄王を名乗る半神を始末する。それだけの事だ」

「ならば、今夜の仕事もそつなく熟こなして貰もらうとしよう」
　バズディロットはその鋭い眼光でアルケイデスの背を見送りながら、彼にとっての仕事のメリットを呈示する。
「事が上手うまく運べば、英雄王を相手取った時の不安要素が大幅に減る。そして、お前から全てを奪った神の名を、存分に貶おとしめる事ができるだろうな」
　マスターの言葉に、弓兵は背中を向けたまま、淡々と同意の言葉を口にした。

「言われるまでもない。我が存在は、その名を汚す為ためだけにある」

×　　　　　　×

教会　屋上

　中央教会の屋根は一部が屋上となっており、星空と夜景の一部、そして美しく飾られた鐘楼を眺める事ができる空間となっている。
　そんな場所に待機しながら、フラットは安あん堵どの息を漏らした。
「ああ、良かった……なんとか上手うまく纏まとまりました」
　すると、腕時計に変身した状態のジャックが言葉を返す。
『君の師である魔ま術じゆつ師し殿のおかげだろう。警察署長の前で述べた考察、そしてその後の交渉の手腕は見事としか言いようがない』
　ジャックは横目で見ていただけなのだが、署長室内でロード・エルメロイII世はさながら安楽椅子探偵のように、この場にいないまま街の状況を整理していった。
　恐らくは少女はサーヴァントに取とり憑つかれている事、深層心理内や夢の中で契約を交わした可能性があるという事。

彼女が繰くる丘おかの造り出した細菌などに蝕むしばまれている事から、喚よび出だされた英えい霊れいは病原菌に関連する英えい霊れいか、あるいは細菌やウイルスといった概念の無い時代に、病そのもののの象徴として扱われた存在であり──現在の街に起こっている異常は、意図的に感染対象を選べる細菌状の魔術という、非常に特殊なものによって引き起こされているのではないかとエルメロイII世は推察した。
　その後、様々な交渉を署長と執り行っており、彼はイギリスにいながら、まんまとスノーフィールドの聖せい杯はい戦せん争そうの黒幕の裏に食い込んだと言えるだろう。
「時と計けい塔とうの中で、魔ま術じゆつを使わない考察と交渉で教授に勝てる人なんていませんよ。……ああ、でも、交渉に相手の脅しが混じってくると大変そうですけど……」
　過去に何か色々とあったのだろう、フラットは屋上のへりに両肘を置くと、昔を懐なつかしむように語り出した。
「時と計けい塔とうって、派閥とか色々あって面倒臭いんですよね。そういうの、俺からすると効率が悪く見えるから、良く解わからないんですけど……教授もそういうのを馬鹿馬鹿しいと言いながら、相手も立てて上手うまく立ち回ってました。俺を引き取った時も、色々とあったみたいですし」
　フラットはそう言ったあと、僅かな沈黙を挟んでからジャックに語りかける。
「病院の女の子、助かるといいですね」
『そうだな』
　同意した後、ジャックがふと問い掛ける。
『……一つ、気になっていた』
「なんですか？」
『何故なぜ、件くだんの少女を救おうとする？』
「なんでって……」
　根本的な問い掛けに、フラットはすぐには答えられずに口ごもっ

た。
『君は確かに魔ま術じゆつ師しらしくない気質の緩さがある。聖せい杯はい戦せん争そうの為ために少女を殺すのは嫌だと考えるのも頷うなずける。だが、本来の敵である他のマスターに己おのれの身を晒さらしてまでとなると、これは些いささか一般人の感覚とも乖かい離りしているのではないかね？』
「……困ってる人がいたら助けるのは──」
『当然ではない、程度にもよるが、それは決して当然のことではないぞマスター。人はそこまで強くはない。強くなるとしたら、何か理由がある筈はずだ』
　するとフラットは、なるほどと頷うなずいた後、暫しばらく夜空を見上げながら考え続ける。
　そして、自分の中で纏まとまりがついたのか、一度大きく頷うなずいてから口を開いた。
「単純な話ですよ。教授のお陰です」
『ほう。やはり彼の影響か』
「教授が俺と同じ状況なら、なんの見返りがなくてもあの子を助けるかなって思って。……ジャックさんの言葉の通りです。どうしてなのかは解わかりませんけど、教授は、魔ま術じゆつの腕前が低い代わりに、凄すごく凄すごく強い人なんですよ。俺だけじゃない。教室のみんなも、教授を嫌ってる何人かも、それは認めてます」
　そして、自分を恥じるように苦笑したフラットは、自らの左手首に巻き付いた英えい霊れい時計に語り始める。
「昔……俺、凄すごいヘマをして、教授に迷惑かけちゃった事があるんです」
『話を聞くに、普段から迷惑を掛けっぱなしのように思うが……』
「ええ、でも、その時はそんなレベルじゃなくて……俺とル・シアン君って友達が、揃そろってアトラムさんっていう魔ま術じゆつ師しに捕まっちゃって。ああ、死んじゃうかなって思ってました」
　自分の生死すら軽々しく語るフラットは、自嘲気味に笑って言葉を

続けた。
「でも、教授は、大きな賭けにでて俺達を助けてくれたんです。大事な友達に……一生をかけてでも会いたいと思ってた人に会う為ための大事な道具を、賭けのテーブルに載せてまで」
　会うための道具。
　その奇妙なフレーズを聞いて、ジャックはハッと思い至る。
　━召しよう喚かんの為ための……触媒か。
　恐らくは、その教授が会いたい友人というのは、今の自分と同じ存在━つまりは聖せい杯はい戦せん争そうで邂かい逅こうした英えい霊れいなのだろう。
　だとするならば、それは他人には決して価値を測りきれないものだろう。
　それを自らの生徒を救う為ために賭けのテーブルに載せたというのだから、なるほど、確かにフラットの師匠らしくどこかネジが飛んでいるのかもしれない。
　ジャックがそう考えていると、自分なりの結論を出したフラットが、時折見せる淋さみしげな笑みを浮かべながら言った。
「これが、俺だけの問題で終わる話だったら、俺は自分の目的の為ために、その女の子を見捨ててます。もしかしたら、普通の魔ま術じゆつ師しの人達みたいに、率先して殺していたかもしれません」
『……』
「でも、俺はエスカルドス家の魔ま術じゆつ師しである前に、エルメロイ教室のフラット・エスカルドスなんです」
　エルメロイ教室。
　その名を口にした瞬間、フラットの顔から淋さみしげな色が消え、自信に満ちた声を吐き出した。
「あの教室にいるからには、俺の人生は、もう俺だけの問題じゃないんですよ。ここでその女の子を見捨てるのは、教授と教室のみんなを裏切る事になる。俺にとって、それは……俺の魔術師としての目的を失うのと同じぐらい怖いんです」

『なるほどな。怖いから、と言われてしまっては、納得せざるを得ないな』
　すると、今度はフラットが逆にジャックに問い掛けた。
「ジャックさんこそ、どうして反対しないんですか？」
『む……』
「聖せい杯はい戦せん争そうを勝ち残る為ためなら、わざわざ女の子を助ける必要なんてないじゃないですか。無理矢理反対されたら令れい呪じゅを使うしかなかったですけど、随分あっさり了承してくれたと思って」
　フラットの言葉に対し、ジャックは『なんだ、そんなことか』とばかりの調子で時計の針を震わせる。
『簡単な話だ。私もまた、君の師である魔ま術じゅつ師し──ロード・エルメロイII世殿の影響を受けたに過ぎない』

　フラットがエルメロイII世に電話をして２時間の説教を受けた時、ジャックは少しだけII世と会話をする機会があった。
　そこで自分という英えい霊れいの性質と、自分が聖せい杯はいに願うのが『切り裂きジャックの正体を知る事』だと話した時に、彼は流れるような声で──まるで魔ま術じゅつの講義をするかのように、ジャックの内面にあっさりと滑り込んできた。
　──『私は、人の本質というものは他者との出会いによって形作られると考えている』
　──『１８００年代の倫ロン敦ドンで実際に殺人を犯したのが何者か、それは時と計けい塔とうの間でも無数に意見が分かれているブラックボックスだ』
　──『しかし、フラットの元に現れたのが、貴方あなたのように穏やかな性質の存在であった事には素直に感謝したい』
　──『あの馬鹿弟子に良かれ悪かれ、少しでも影響を与えてくれたのならば、それは間違い無く、新たに生まれた切り裂きジャックの一面

だと言って良いと私は考える』
　──『私は、都市伝説でも英えい霊れいでもなく、『貴方あなた』を覚えておくと約束しよう、生前の君がどのような者だったかは関係ない。フラットのサーヴァントとして、僅かな期間なりとも彼に道を示した存在として、私は今こうして言葉を交わしている君の事を覚えておくと約束しよう』
　──『だから、どうか……馬鹿な弟子だが、フラットを宜よろしく頼む』
　──『令れい呪じゆもなにもない、単なる私の我わが儘ままだが……どうか、彼を護まもってやってくれ』

『まったく、前にも言ったが、あれ以上話していたら……本当に丸め込まれそうだった。彼は人の姿をした夢む魔まか何かかもしれんな』
　その時の会話を思い出して、時計の姿のまま苦笑するジャック。
『一つ、琴線に触れる言葉があってな。私も彼に少しだけ人生を弄いじられた。それだけの事だ』
　すると、フラットが無邪気な笑みを浮かべて言った。
「じゃあ、ジャックさんもエルメロイ教室の生徒ですね」
『……殺人鬼が所属していたら迷惑だろう』
　当たり前の事実を口にするジャックに、フラットは首を振った。
「似たような人がＯＢにいるんで、大丈夫だと思いますよ？」
『……まったく大丈夫ではない気がするが……』
　そこで時計が苦笑し、針を揺らしながら、ふと真剣な調子になって語り出す。
『君はまだ、どこか心に大きな欠落を……いや、欠落ではないな……君自身は気付いていないのかもしれないが、大きな世界とのズレを内包している。それが私には恐ろしくもあった』
「……」
　不安げな顔をするフラットに、ジャックは続けた。

『だが、私は安あん堵どしたよ。あのような魔ま術じゆつ師しが師である事にではない。君が、あの師の生き様に対して尊さを感じている事にだ。その志がある限り、君はその世界とのズレを克服する事ができるだろう』
「……そう、なんですかね。俺には良く解わからないです。きっと、魔ま術じゆつ師しとも……普通の人達ともズレてる所はあるんだろうなっていうのはなんとなく分かります」
『安心したまえ。人は皆、どこか世界とのズレを感じながら生きているものだ。こんなナリで言うのもなんだが、刹那せつなの時すら狂わずに、完全に時が一致した時計など存在しないものさ。ただ、時計を合わせようと努力する者達がいるだけだ』
　それを聞いたフラットは、クスリと笑いながら口を開く。
「ジャックさんの正体って、意外と詩人とかかもしれないですね」
『……そんなに浮ついた事を言ったかな？』
「言いましたよ。そりゃ、警察にあてた手紙に『地獄より』なんてつける筈はずですよね」
『……言ってくれる』
　当時の犠牲者を慮おもんぱかって大笑いこそしなかったが、ジャックとフラットは、互いに一度だけ微笑ほほえみあい、病院の方へと目を向けた。
「……そろそろ、始まりますね」
『ああ、病院の入院患者達まで人払いをするわけにはいかないからな。患者は広域魔ま術じゆつで眠らせ、医師達は認識阻害を行って警官隊の突入を見えないように……待て、何かおかしいぞ』
「？」
　ジャックの声に、フラットは教会の屋上から病院前の通りに目を向けた。
　するとそこでは、警官達が通りの上で、どこかを指差して騒いでいる光景が見える。
　フラットは視力を魔ま術じゆつで強化しながら、彼らが指している

方角に目を向け──
『それ』を見た。
　見てしまった。

　象の成獣ほどもある大きさの三つ首犬が、口中に青い吐息を揺らめかせる姿と──その背に悠然と立つ、奇妙な布を纏まとって弓を構える男の姿を。

×　　　　　　　　×

中央病院屋上　貯水タンク上部

「……ケルベロスと来たか。あの弓兵、何者だ？」
　高みからその巨獣を眺めていたのは、吸血鬼の青年の姿に戻ったジェスター・カルトゥーレだった。まだハンザにやられた傷が回復していないらしく、服から覗のぞいた肌には聖水で焼けた痕あとが生々しく残っている。
「面白い。この聖せい杯はい戦せん争そう、他にどのような傑物と魔ま物ものがいる？　あの麗うるわしきアサシンは誰と踊らせるべきだ？　これは腰を据えてじっくりと選ばねばならんな」

×　　　　　　　　×

病院前　大通り

　広域に人払いをかけている為ため、普段巡回している警官達にとって、大通りは異常に閑散としているように感じられた。
　だが、その寂せき寞ばくとした空気を壊す存在が、道の奥から現れる。
　毒々しい吐息を鋭い牙の隙間から漏らす、首が三つに分かれた巨大

な犬。
　それが神話や映画で飽きる程に見て来た『ケルベロス』という存在だという事に気付くまでに、警官隊は暫しばらくの時を要した。
　それ程までに、彼らがイメージするケルベロスを大きく越える威圧感と恐怖を振りまいていたのである。
　大気が澱よどむような濃密な魔ま力りよく。
　その背に立つ弓兵もまた、その魔ま力りよくを浴びて平然とした様子を見せており、もしも彼が弓ではなく大鎌を持っていたとしたら、誰もが死神であると信じて叫び狂った事だろう。

　巨大な地獄の番犬は、警官達の前までくると一度歩みを止め、頭を低くして周囲の者達を睨にらみ付つけた。
　そして、声を失っている警官隊に向け、背中の上の弓兵が重々しい声で問い掛ける。
「……英えい霊れいを身に宿した幼子とは、どこにいる？」
　そう聞きつつ、弓兵は既に病院の方角に身体からだを向けていた。
　恐らく彼は、何階のどのあたりに少女がいるのかを聞いているのだろう。
　警官隊の一人が勇気を振り絞り、その弓兵に対して問い掛ける。
「教えたら、その子を……どうするつもりだ」
「無論、聖せい杯はい戦せん争そうの掟おきてに従い、正面より屠ほふり去さるのみ」
　警官達がざわめいた。
　この、見るからに通常の英えい霊れいとは違う強さを感じさせる存在が──
　先日自分達が戦ったアサシンが可か憐れんに見える程の威圧感を纏まとった存在が──
　意識の無い幼女を、『正面から堂々と殺す』などと言っている。
「……ふざけ──」
　言葉の意味を理解し、思わず怒りの声をあげかけた警官が一人。

彼の怒声は、爆音によって掻かき消けされた。
　弓兵が威い嚇かくの為ために放った弓がアスファルトに突き刺さり、その周囲10メートル程を爆散させて小さなクレーターを生み出したのである。
　側にいた数名がまともに爆風に巻き込まれ、何人かはそれだけで意識を失った。
「答えぬならばそれでいい、邪じや魔まはするな」
　そして、弓兵は力強く弓を引き絞る。
　何をするつもりなのか、警官達はすぐに理解する事ができた。
　この弓兵は、十階建ての広大な病院を、自らの弓だけで全て破壊するつもりなのだと。
　軽い威い嚇かく射撃だけでアスファルトにクレーターを造ったその威力を見て、それが馬鹿げた事だと思う者はいなかった。
　そして、警官達が止めようと動きだすよりも先に、全力で引き絞られた弓の一撃が撃ち放たれる。

×　×

「ちッ！　そう来るか！」

　ジェスターは弓兵の意図にいち早く気付き、自らが立つ給水塔を踏みつけだけで破壊する。
　そして、如何いかなる力か、溢あふれ出でた水を自在に操り、撃ち放たれた弓に向かって全力で踊り掛からせた。
　水の爆発が起こり、花火のように街明かりの中に水滴が散さん華げする。
　辛かろうじて逸それた矢は病院の屋上の一部をこそぎ落とし、そのまま空の彼方かなたへと消えて行った。
「やれやれ、どうしたどうした警官隊？　もっと頑張ってくれないと困るじゃないか」

数日前に自らの手で壊滅させかけた警官隊を応援しつつ、ジェスターは皮肉げな笑みを浮かべて溜ため息いきを吐いた。
「繰くる丘おか椿つばきを我が同族にしてしまえばとりあえず安全になるのだが……そうなればアサシンは迷い無く椿つばきを殺すだろう。それでは面白くないというのが悩み所だな」
独り言を呟つぶやいたあと、肝心な事に気付いて首を振る。

「いや、そもそもあの娘の体力では、身体からだが耐えきれずに変化する前に死に果てるか……」

× ×

「……魔ま物ものの類たぐいか？」
ケルベロスの背にいたアルケイデスは、今しがた分厚い水の盾を張り巡らせた存在に目を向ける。英えい霊れいとも神霊とも違う気配を纏まとったその男を見て、警戒しながらアルケイデスは地面に下り立った。
「邪じゃ魔ま者ものがいたら、噛かみ殺ころせ」
『十二の栄光キングス・オーダー』の宝具により召しよう喚かんした、かつて試練の一つとして捕らえた地獄の番犬ケルベロス。
この世ならざる巨大な魔ま獣じゅうに指示を出し、自らは本気で病院を破壊する為ために弓を構え、じっくりと病院の屋上にいる『敵』を観察した。
──やはり、あの気配はサーヴァントではないな。
──あの女神を名乗る女とも違う気配。
──恐らくは、星の産み落とした獣けものか何か……人型をした、ネメアの獅し子しか。
己おのれの顔を覆う毛皮の持ち主であった獅し子しを思い出し、警戒を一段階強めるアルケイデス。
追加で『十二の栄光キングス・オーダー』から何かを顕けん現げん

させるべきかと思案していると──背中に軽い衝撃が走った。
　もっとも、軽い、と感じたのはアルケイデスだからであり、本来は装甲車の車体を貫く程の威力だったのだが。
　ネメアの獅し子しの毛皮によって防がれたそれは、警官隊の一人が投げた槍やりだった。
「……畜生……はじくってのは無しだろ……。またこのパターンかよ！　なんだ！　なんなんだよ！　お前も死徒とか言う奴やつかこの野郎……！」
　そんな事を叫ぶ警官の一人に呼応するかのように、周囲から次々と警官隊の宝具らしき遠距離攻撃が降り注ぐ。
「……温ぬるいな」
　それを弓で打ち払い、合間に撃った弓の一撃が、道路に再びクレーターを生み出していった。
　──ケルベロスは何をしている？
　噛かみ殺ころせと命じたばかりにもかかわらず、警官隊が減っている様子はない。
　いや、寧むしろ増えているようにも感じられる。
「……む？」
　アルケイデスは、気が付いた。
　確かに先刻よりも、警官隊の数が増えている。
　更に言うならば、ケルベロスは、確かにアルケイデスの指示通りの仕事をしていた。
　三つ並んだ口の中にはそれぞれ人の身体からだが数体ずつ咥くわえ込こまれており、足元には十数人の警官隊が抑え込まれ、それでもなお抵抗している状態である。
　その光景を見て、警官達も異常に気付いたようだ。
「お、おい……」
「あの食われてる連中……誰だ？」
　戸惑うような呟つぶやきを聞いたアルケイデスが眉を顰しかめると──

彼の目の前で更に十数名の警官隊が現れ、率先してケルベロスへと踊り掛かっていった。
　それも、宝具らしき武器などは持っていない。ただの拳銃や警棒だけを手に、ワラワラとケルベロスに戦いを挑んでいる。
　まるで、我先に食われる事を望んでいるかのように。
「馬鹿な、これは……」
「何も馬鹿げた事はない」
　背後からの声に振り返ると、そこにはなんの変哲もない警官が立っており、自分と同じ姿をした無数の警官達が食われていくのを眺めながら、狂気の籠こもった笑みと共に口を開く。
「私は元来、地獄から来たと名乗った罪人、罪の贖あがないようもない殺人鬼だ」

「地獄の番犬に嚙かみ砕くだかれ続つづけるぐらいで、丁度良いい」

　そう言うと同時に、その警官はアルケイデスに対峙する。
　やはりただの拳銃と警棒しか持たぬまま、ケルベロス以上に凶悪な魔ま人じんへと。
「かの冥めい界かいの魔犬を従えるとは、まさかとは思うが、ハデスが顕けん現げんしたわけではあるまいな？」
　刹せつ那な──アルケイデスはどす黒い怒気を身に纏い、憎悪に満ちた声を警官に向けた。
「弱者よ……いかに己と比べて強大な力を見たとしても、私を神々のような愚ぐ物ぶつと同列視する事は罷まかり成らん。次に同じ過ちを犯せば死よりも深き代償を支払って貰うぞ」
　すると、警官は不敵な笑みを浮かべながら言った。
「君を探ろうとしたのだが、無礼を働いたのならば謝罪しよう。なるほど、確かに君は神ではないようだ。神の縁者ならば、私は因果を無理に繋げて君になれたのかもしれないが……」
「……？」

「どうやら、私は君にはなれないようだ。だが……君の本質は理解した。ケルベロスを連れている事やその神への憎悪も含め、大まかな正体は推測できる。神を否定せし大英雄よ。恐らくは、かつては君の中にもその血が流れていただろうにな」
　如何なる手段を用いたのか、警官はアルケイデスの霊基に探りを入れたようだ。
　そして、警官の姿をした者は、アルケイデスが強者と知りつつ、武器を構え躍り掛かった。
「ならば私は、君を人として扱おう。そして……君を人として殺しきって見せよう！」

×　　　　　　　　×

「幻術ではないな。あれは……なんだ？　本当に実体が生まれ、ケルベロスに食われている」
　病院の前の大通りで起こっている光景を見て、ジェスターは眉を顰しかめる。
　こちらも本気で迎撃するか、椿つばきを攫さらって逃げようかと考えていた時に現れた謎の警官。
　最初にケルベロスに向かって行ったかと思うと、次から次へと同じ警官が現れ、ケルベロスの爪と口こう腔こうを飽和状態にしてしまった。
　更には、あの尋常ならざる弓兵にまで襲いかかり、その身を増やしながら戦いを続けている。
「あんな性質の英えい霊れいがいるのか……？　一体どこの国の英雄だ……？」

×　　　　　　　　×

　──俺は、何を見ている？

『クラン・カラティン』の一人である、ジョン・ウィンガード。
　新たな義手を手に入れたばかりの彼の目に映るのは、自分達と同じ警官の姿。
　だが、その警官は彼の仲間ではない。
　弓兵の周りに現れては撃ち倒され、倒されては消え、そしてまたいつの間にか無傷の状態で現れる。幾度となくその身をねじ切られようと、矢で射貫かれようと、同じ警官がその英えい霊れいに挑み続けているではないか。
　そんな姿を見ながら、ジョンは正気をとりもどした。
　──俺は何を呆ぼけているんだ。
　──はやく、俺もあいつの援護を……。
　駆け出そうとした所で、その肩に手をかけ止める者があった。
　振り返るとそこには、今、あの弓兵と戦っている警官と同じ顔をした男が一人。
「あれは私の『獲物』だ。横取りはしないで、安全な場所まで下がっていたまえ」
「で、でも……」
「君達の仕事は、繰くる丘おか椿つばきの保護だ。私のマスターの決意を無駄にしないでくれ」
　それを聞いて、ジョンは理解した。
　この男は、あのフラットという青年の英えい霊れいなのだと。
　如何いかなる存在かは解わからないが、ならばここは彼に任せるべきだろうか？
　ジョンをはじめ、周囲の『クラン・カラティン』達がそう考えた所で、弓兵が口を開いた。

「弱き者よ……名を聞こう」

　するとその警官は一歩距離を取り、ニヤリと笑いながら言葉を返す。

「私に名など存在しない」
　そして、気付けば警官の姿は二人に増えており、増えた警官が同じ声で言葉を紡つむぐ。
「偉大なる英雄よ。時代と共に姿を変え、偉業を練り上げながら神代の伝説の中に生き続ける存在よ。吹けば飛ぶようなただの犯罪者である私が、君に言える事は一つだ」
　更に警官の数が増え、四人となった警官が四方から弓兵に向かって断言する。
「君にはそれだけの覚悟を抱く理由があるのだろう。……だが、その覚悟をもって君が神の威光を否定すると言うのならば！　神の悪行も善行も全て否定し、捨て去らんとするのならば！」
　警官以外にも様々な姿を取った八人の『何か』。その叫びが、市街地の路上に木こ魂だまする。
「……如何いかなる強大な力を持とうとも、今の君は、確かに君が望んだ通りの『人間』だ」
　十六の雄叫おたけびが、弓兵の魂に向かって語りかける。
「破落戸ならずものに成り下がり、人に成り上がった英雄よ！　君が如何いかなる大英雄であろうとも！　世界を破壊する力を持とうとも！」
　三十二の不敵な笑みが弓兵を取り囲んだかと思うと──その人影が全て、最初の一人へと吸い込まれるように消えて行く。
「本質が人である限り……君はただの力持たぬ『殺人鬼』に狩られる事となるだろう」

　そして、警官と赤黒い弓兵の目の前で──
　殺人鬼ジャック・ザ・リッパー名も無きバーサーカーは、その言葉を貫き叫ぶ。
　己おのれの本質を曝さらけ出だし、大英雄の命脈を止めるべく撃ち放つ宝具の名切り札を。

「──『悪霧は倫敦の暁と共に滅び逝きてフロム・ヘル』！」

　そして──病院と教会の狭間はざまに、この世の地獄が顕けん現げんした。

×　　　　　　×

「まさか……まさか、そうなのか!?　あれは、そういう事なのか!?」
　驚喜に満ちた笑みを浮かべながら、屋上でジェスターが目を輝かせる。
「ジャック……ジャック、ジャック、ジャック！　切り裂きジャックジヤツク・ザ・リツパーか！」
　自らを殺人鬼と名乗った事と、叫んだ宝具の名前から、ジェスターはその答えを導き出した。
　そして、今まさに眼前に広がり始めた『世界』を見て、ジェスターは恍こう惚こつとした笑みを浮かべながら悔しそうに叫んだ。
「ああ！　ああ！　麗うるわしのアサシンよ！　何故なぜ今君はここにいない!?　なぜこの光景を私と共に見ていないんだ！」
　思わず令れい呪じゆを使おうとするが、その臓ぞう腑ふの奥にある欲望が彼の理性を辛かろうじて保たせる。
「だ、ダメだ。令れい呪じゆはこれ以上は無駄遣いできない。彼女を絶望に落とし、最後に私と共に心中する為ためにはどうしても二画は残さねば……」
　心底無念そうに呻うめいた後、彼は開き直って叫んだ。
「ならば！　私がこの光景を目に焼き付けよう！　あとで彼女に教えてやろう！」
　そして、彼は続いてジャック・ザ・リッパーを賞賛する声を病院の屋上に木こ魂だまさせる。
「おお、ジャック！　ジャック！　ジャック！　世界でもっとも不純なる猟奇！　人の妄想により育てられた純粋なる悪夢！」

両手を広げて楽しげに回りながら、愉悦の極きわみといった顔で、吸血種であるジェスターが、使い古された都市伝説を全力で讃たたえ続つづけた。
「力無き反英雄でありながら、夜の闇を恐怖に染め上げたフォークロア！　かのワラキアの夜すら追いつけぬ速度で恐怖を世界に伝でん播ぱさせた悪あく辣らつの化身よ！　さあ、見せるがいい、お前が真なる『伝説』を前に無む惨ざんに滅びるのか、それとも新たなる闇として一いつ矢し報いるのか！」

「これだから世界は面白い！　麗うるわしのアサシンよ！　君にこの滑稽な地獄を捧ささげよう！」

×　　　　　　　　×

　吸血種が叫んだとおり、病院と教会の間に、一つの地獄が顕けん現げんしていた。
　深い霧があたりに立ち込め、街路樹が全て見た事もない青黒い植物へと変化する。
　アルケイデスが生み出したクレーターには赤いマグマが満ち、毒の蒸気を出していた。
　人面の蝙蝠こうもりが空を舞い、小鬼達の形をした炎が信号機の周囲を取り囲む。
　倫ロン敦ドンの裏路地を思わせる煤すすけたビルの幻覚が無数に現れるが──
　そこに、人の姿は存在しない。
　飢餓故ゆえにパンを盗む子供も居なければ、その子供を殴り殺してパンを奪う者も、麻薬を蔓まん延えんさせる売人も、そこから金を巻き上げる警官もいない。
　ただ、それらの行動を人形に模倣させて遊ぶ小悪魔グレムリン達の姿だけが霧の中に浮かび上がる。

つまりは──その地獄は、滑稽な人形劇に過ぎなかった。
リアリティの欠片かけらもなく、御お伽とぎ噺ばなしに出てくるようなカボチャランタンが街灯の下で笑う。
しかし、同時にそれは、切り裂きジャックが生まれた時代の人々が抱いていた欲望の具現化でもあった。
あるいは別の側面のジャックならば、この光景は『生々しい人の悪意が連鎖する、救いようのない地獄』だったのかもしれない。
しかし、この場でジャックが地上に顕けん現げんさせた地獄は、『悪あく魔まという絶対悪による人々の堕落』であり、全ての悲劇を、人間の悪意を、『どうか悪あく魔まのせいであってくれ』と想像の産物に押しつけようという、歪ゆがんだ願いが生み出した人造の地獄であると言えるだろう。
そんな歪いびつで幼い地獄の中に──一つだけ、『本物』が混じっていた。

「……」
アルケイデスは、正面から『それ』と向かい合う。
身の丈は、５メートル程あるだろうか。
人形劇じみた『地獄』の上に立つ『それ』は、生々しい肉感を伴っていた。
ブルーベリーと毒虫を混ぜ合わせたような、毒々しい青紫の皮膚。
異常に発達した長い手と、その先に輝くサーベルのように長い爪。
髑髏どくろが魔ま獣じゆうに変じたような顔面には、長く捻ねじれた角と鋭い牙が覗のぞいている。
背中から広がる翼は、死体を燃やした黒煙のように揺らめきながら『それ』の周囲に深い影を生み出していた。
「□□□□□□□□□□□□□□」
『それ』を見て、ケルベロスが躍り掛かった。
すると、『それ』の胸のあたりにある薄い皮膚が膨らみ、野蛮な輝きを放つ心臓の鼓動が周囲に遍あまねく響き渡る。

その鼓動が早くなると同時に、『それ』の目が赤く輝き──
　双そう眸ぼうから放たれた熱線が、一瞬にしてケルベロスの身体からだを貫いた。
「□□□□□□□□□□」
　正しく地獄の底から響き渡るような絶叫が三つの首から漏れ出し、通りにいたクラン・カラティン達の鼓膜を震わせる。
　しかし、地獄の番犬はそれで終わりではなかった。
　魔ま獣じゆうはそこで闘志を更に剝むき出だしにし、その巨体を跳躍させて三つの牙をもって『それ』の身体からだを引きちぎろうと試みる。
　だが、その三つの牙が届くよりも一瞬早く──
『それ』が上から叩たたきつけるように振るった爪が、ケルベロスの身体からだを袈け裟さ懸がけに切りつけ、その臓ぞう腑ふと背骨を巻き込みながら毛皮を赤く斬り潰した。

　どう、と、低い轟ごう音おんと共にケルベロスの巨体が地面に倒れる。
　クラン・カラティンは目を見張り、教会の窓から見ていたハンザ・セルバンテスは眉を顰しかめながら呟つぶやいた。
「……真性悪あく魔までではないな。幻想種としての仮かり初そめの存在か……。いや、しかし、仮かり初そめとはいえ、あそこまで凶悪な存在になるとは……」
　ハンザは自らの眼帯を押さえながら、フラットの英えい霊れいが変化したもの──即すなわち、一般人の多くが『悪あく魔ま』と称する存在を見ながら独りごちる。
「英えい霊れいだと知らなければ……埋葬機関においで頂く所だったな」

「……ハデスの奴やつめの加護がなければ、神しん獣じゆうには及ばぬか」

アルケイデスは倒れたケルベロスを一いち瞥べつし、吐き捨てるように言ってから目の前に立つ巨大な影に向き直った。
「私が人である故ゆえに死ぬと言ったな。弱き者よ。だが、貴様が今成りはてているような魔ま獣じゆうは、それこそ人の手で討ち滅ぼされるものではないのか？」
　挑発するように言うアルケイデスに、もはや人とは程遠い目となった純白の眼球を歪ゆがませ、ジャックは笑う。
　ただ、ただ、笑う。
「……違うな、それは違うぞ。神々の奴隷から人に成り上がった者よ」
　再び悪あく魔まの瞳が輝くのを見て、アルケイデスは防御体制を取った。
　しかし――
　彼を襲ったのは、全くの死角、背後の上空からの攻撃だった。
「ぬうッ!?」
　肩口を貫いた熱線に振り返ると――そこには、眼前に居るのと、全く同じ悪あく魔まが宙を飛ぶ姿があった。
「人が我らを倒すにあらず。人は我らを生み出す愚者にして賢者にして――共食いをする餌に過ぎない」
　同時に、更に別の方向から飛来した爪の一撃が、アルケイデスの身体からだを地獄の石畳と化した道路に深くめり込ませた。

　そして、真なる地獄はここから始まる。
　地面に叩たたき込こまれたアルケイデスが空に目を向けた時に見たものは――
　悪あく魔まと化した敵の英えい霊れいが、数十、数百の大軍となって空を舞い、こちらを見下ろしている光景だった。

　ジャック・ザ・リッパーの宝具、『悪霧は倫敦の暁と共に滅び逝きてフロム・ヘル』は、『ジャックの正体は地獄から来た悪あく魔まで

ある』という噂うわさが能力として具現化したものだ。
　ジャック自身が書いたと言われる手紙に書かれていた『Ｆｒｏｍ　ｈｅｌｌ地獄より』の一言から広まった説であり、都市部よりも、色濃く迷信が信じられた地方に広まった際に『切り裂きジャックは悪あく魔まである、あるいは悪あく魔ま憑つき、悪あく魔ま崇拝者である』という逸話が深く根付く。
　その力を持って悪あく魔ま化かした所に──ジャックは、己おのれが持つ、もう一つの宝具を重ね合わせた。

　──『其は惨劇の終焉に値せずナチユラルボーンキラーズ』。

　──『切り裂きジャックは一人ではなく、集団であった』
　そのような逸話を元に組み上げられた宝具であり、『ジャックの犯行はそれぞれ無関係の人物が犯人であり、世界の誰もが切り裂きジャックになりえるのだ』という与太話から、当時力をつけていたカルト宗教の儀式だという説まで様々な要素を内包している。
　マスターの魔ま力りよくの強さによってその最大人数は変化するが──フラット・エスカルドスと組み合わせた場合、最大五百十二人まで同時に『分散』できる事が確認されている。
　流石さすがに二つの宝具を同時展開した状態ではそこまでの数はいかないが──それでも軽く二百を越える数の悪あく魔まとなって、アルケイデスという『人間』に襲いかかった。

　地上に立つアルケイデスが何か行動を起こそうとするよりも先に、次なる連撃がその身体からだを襲う。何よりそれは武器による攻撃では無い為ため、彼の『ネメアの獅し子しの毛皮』の力が通じないという事も痛手だった。
　元来の頑強さがある為ため、バラバラに破れるような事は無かったが、それでも一部の攻撃が貫通してアルケイデスの臓ぞう腑ふまで爪や熱を届かせる。

絶え間ない連撃は雨のようで、もはや立ち上がる事すら許さぬという状況だった。
もしも地獄の責め苦というものがあるのならば、正しく今の状況に違いない。
見ていた警官達はそう考え、怖おそれる事すら忘れて息を呑のみ込こんだ。
空を舞う絶対の強つわ者ものが、異なる強つわ者ものを圧倒する姿は、ある種の美しさすらオーディエンス達に感じさせる。

「おい……や、やったのか？」
「ていうか……あれは……味方でいいのか？」
冷や汗を掻かきながら、警官隊の数名が呟いた。
本当にあれを制御できるのか？
マスターであるフラットはどこに行っているのだ？
不安になった彼らが教会の屋上を見るが、そこにフラット・エスカルドスの姿はない。
それが更に恐怖を掻かき立たて、誰も声を出す事ができなくなる。
もはやあの弓兵は原型を留とどめていないのではないか？
誰かがそう考えた瞬間──状況に変化が訪れた。

「……見事」

低いが、良く響く声が周囲に響き渡ったかと思うと、すり鉢状になったアスファルトの中央にいたアルケイデスが、飛来した悪あく魔まの爪に身を晒さらす。
鈍い音と共に、その爪は深くアルケイデスの肩へと食い込み、下手へたをすれば致命傷になるのではと周囲の者に感じさせた。
だが、アルケイデスはその爪を食い込ませた悪あく魔まの腕を押さえ、空いた手で、自分に嚙かみつこうとしていた巨大な悪あく魔まの牙の一つを摑つかみあげる。

他の悪あく魔ま達が一斉に熱線による攻撃を行うが、アルケイデスは摑つかんだ手を放さない。

　そして、彼は賞賛した。
　取るに足らないと踏んでいた英雄が。
　神性の欠片かけらすらない、近代の殺人鬼が、確かに自分の敵であると認め──
　心からの賞賛の言葉を口にする。

「……見事なり、弱き者よ。よくぞこの身を追い詰めた。よくぞそこまで上り詰めた」
「……？　貴様……何を」
　何か嫌な予感を感じ取ったのか、悪あく魔まと化したジャックが声をあげる。
　だが、それを無視しながら、アルケイデスは更に言葉を続けた。
「お前が築き上げた物は、確かなる価値を持つ。『射殺す百頭ナインライブス』で対抗しても良かったが……お前の力はただ撃ち倒すだけの無価値なものに非あらず」
「……？」
「名も知らぬ殺人鬼よ。敬意をもって、私はお前から簒さん奪だつしよう」

「奪う価値が、お前にはある」

　そして、復ふく讐しゆう者しやは己おのれの宝具を発動させる。
『十二の栄光キングス・オーダー』でも『射殺す百頭ナインライブス』でもない。
　復ふく讐しゆう者しやのクラスに歪ゆがまされた事によって発動する、隠された第三の宝具を。

「──『天つ風の簒奪者リインカーネーション・パンドーラ』──」

　この瞬間──運命が、希望と絶望の全てが入れ替わった。

　空を舞っていた悪あく魔まの群れが、一瞬にして無力なる人の群れへと変貌し、飛行能力を失った無数のジャック達が地面へと墜落していく。
「きさ……ま……。まさか……」
　アルケイデスの肩に爪を食い込ませていたジャックも、ただの警官の姿へと戻っていた。
　目を見開くジャックの目に映った物は──
　先刻までの自分と同じ角を布の間から覗のぞかせ、黒煙の如ごとき翼を背に生やし、そして何より、これまでの数倍に及ぶ濃密な魔ま力りよくを身に纏まとうアルケイデスの姿だった。

×　　　　　　　　×

　一部始終を見ていたジェスター・カルトゥーレは、顔から一切の笑顔を消す。
　そして、英雄王とエルキドゥの決闘を見た時にすら浮かべなかった、深い警戒の色を浮かべて呟つぶやいた。

「他人の宝具を……奪い取る宝具だと……？」

×　　　　　　　　×

　絶望が、大通りを支配した。

　教会から外を覗くハンザの目に映るのは、先刻までと全てが入れ替わった光景である。

ただの人間に戻ったジャックの前に立つのは、神の力を捨て去り、そして今、人ですらなくなった一人の魔ま人じん。
　いや、ジャックの言葉を借りるならば、それは確かに、人間が生み出したものに他ならない。
　彼はただ、人間の歪ゆがんだ絶望をその身に取り込んだだけで、姿が変わろうと彼は『人間』に他ならないのだろう。
　ハンザはそんな事を考えつつ、いつの間にか持っていた缶コーヒーを軽く啜すすった。
　窓からは丁度病院の貯水塔付近は死角になっている為ため、彼はまだ、自分の追う吸血種が病院にいる事に気付いていない。
　それでも最大限の警戒を全身に巡らせながら、目を細めて呟つぶやく。
「なるほどな。これが聖せい杯はい戦せん争そう。英えい霊れい同士の戦いというわけか」

「言こと峰みね殿が亡くなられるわけだ。俺も、色々と覚悟をした方がいいかもな」

×　　　　　　　×

「奪ったのか……私の……力を……」
　バーサーカーのか細い声が、路上に虚むなしく響ひびき渉わたる。
　いつしか地獄は消え去っており、その気配の全てはアルケイデスの周囲を取り巻いていた。
　力を使い果たして倒たおれ臥ふしたバーサーカーを見下ろしながら、アルケイデスが答える。
「……恨むなら恨むが良いい。簒さん奪だつ者しやの誹そしりを受けるのは慣なれている」
「ハハ……まさか。英雄の行う簒さん奪だつは伝説と呼ぶのだろう？」

「……痛烈な皮肉だな。だが、英雄などいない。ここにいるのは、これから幼き者を縊くびり殺ころすおぞましき外道に過ぎん」
　力強く断言した後、アルケイデスは横に落ちていた無傷の弓を拾い上げた。
　そして、弓をつがえながら名残を惜しむように言葉を紡つむぐ。
「さらばだ、偉大なる殺人鬼よ。良いい勝負だった。人を相手に、ここまで力を振るえるとは思わなかったぞ」
「人と呼んでくれるのかね。あのような姿をとった私を」
「姿形など些さ細さいな事よ。私は貴様の名すら知らんが、今の戦いだけは心に刻むと約束しよう」

「……」
　ジャックは静かに倒たおれ臥ふし、自らの終わりの時を待つ。
　──皮肉なものだ。まさか、敵にも味方にも、今の私を肯定する言葉を吐かれるとは。
　──ああ、そういえば、最初に私を肯定してくれたのはマスターだったな。
　──謎の存在である事が格好いいなどと、まったく、あのマスターは……。
　苦笑しながら目を細めたジャックに、アルケイデスの引き絞った弓が放たれ──
　その心臓に鏃やじりが届く刹那せつな、彼の姿は跡形もなく消え去った。

「……そうか、この時点で令れい呪じゅを使い果たすような愚か者は、私のマスターだけだったな」
　令れい呪じゅによる強制転移。
　間一髪で自分のサーヴァントを救ったマスターの判断に感心しつつ、アルケイデスはゆっくりと周囲を見渡した。
　残っているのは、それぞれが宝具らしき武器を持った警官達。

彼らは最初は呆ぼう然ぜんとしていたが、やがて自分達の本分を思い出したのか、一人、また一人と武器を構えてアルケイデスへと躙にじり寄よってくる。
「……ふむ。宝具か。何故なぜここまで数が揃そろっているのかは知らんが、その真価、確かめさせて貰もらうとしよう」
　アルケイデスの全身から、鋭い敵意が湧きあがる。
　先刻まで、警官隊など取るに足らぬ存在だと思っていたアルケイデスだが、今の戦いを経た後で、たかが人間などと侮あなどる気にも捨て置く気にもなれなかった。

　事実、宝具を持ったただの人に過ぎない警官達は、こうして自分に立ち向かってきている。
　怯おびえが無いわけではない、だが、彼らはそれを克服して自分という死の前に立ち塞がろうとしているではないか。
「良いい度胸だ。アルゴー船の鳥羽根どもカライスとゼーテスより余程マシな目をしている」
　珍しく上機嫌の笑みを浮かべながら、全力を持って屠ほふりさろうと弓をつがえたその瞬間──
　その空気を無に帰す者が、遙はるか上空より舞い降りた。

「くは……クハハハハハハ！　フハハハハハハハハハ！」
　高らかな哄こう笑しようが、大通りに響き渡る。
　警官隊や弓兵が空を見上げると、そこには黄金の弓兵の姿があった。
　黄金の弓兵──英雄王は、角と翼を生やしたアルケイデスを見て満面の笑みを浮かべている。
「これはまた……なんともまあ、随分と男前になったものだな、雑種よ！　いくら雑種とはいえ、そこまで混こん沌とんたる姿になろうとは！」
　彼は教会の鐘楼の上に立っており、通り全体を見下ろしながら普段

と変わらぬ声をあげる。
「何やら珍妙な景色が生まれていると思って来てみれば、なかなかに楽しませてくれるではないか。なるほど、貴様にはそれなりに道化の才があるのやもしれんな」
　どうやらクリスタル・ヒルの屋上にいた時に騒ぎに気付き、地上の光景を見て降臨したようだ。警官隊は彼がクリスタル・ヒルの最上階にいる事は把握していたが、元より英雄王に限らず完全な隠おん密みつ行動として事を運ぶ予定だった為ため、完全に意識の外にあったようだ。

「来たか、強き王よ」
　アルケイデスはニヤリと笑い、相手の挑発など気にもせぬまま弓を抜いた。
　そして、新たな『十二の栄光キングス・オーダー』を発動させようとした瞬間──
　中央地区の大通りに、更なる乱入者が現れる。

「おーい、どういう状況だコレ？」
　のんびりとした声が教会の影から聞こえてきて、そちらに目を向けると、警官隊にとって、見知った顔があった。
　彼らは別段派手な登場をしたわけではなく、あまりにも普通にその現場にやってきた。
　その内の一人は、赤毛混じりの金髪を風に靡なびかせたセイバーである。
　アルケイデスは警戒するように動きを止め、英雄王はこちらを一いち瞥べつしたが、特に興味を持たなかったのか、何も声をかけてはこなかった。
　そんな英えい霊れい達や地面のクレーター、倒たおれ臥ふす警官達などを見て、セイバーが横にいる童顔の兵士に声を掛ける。
「なんか聞いてた話と違わないか？　隠おん密みつ作戦って話じゃな

かったっけ？」
　尋ねられた兵士──シグマは無表情のまま、淡々とした調子でセイバーに答える。
「移動中に状況が変化した。それだけだ」
「そうか、それじゃしょうがないな」
　そんな日常的な会話を繰り返す英えい霊れいと兵士の背後には、フードを被かぶった女アサシンが普通に姿を現している。
　警官隊はそれを見て驚きに眉を顰しかめるが──異なる反応をしたものが、病院の屋上に一人。

×　　　　　　　　　　×

「……おい、誰だあいつらは？」
　アサシンがこの場に現れた事に運命を感じ、悦よろこび叫さけぼうとした寸前──ジェスターは、その側に寄りそう二人の男に目を向ける。
　彼は顔から表情を完全に消し去り、その二人の男を睨ねめ付つけた。
「何故なぜ、私のアサシンの側にいる……？」
　冷え切った視線の中に純粋な怒気を満たしながら、吸血種は静かに言葉を続ける。

「そして……何故なぜ、麗しのアサシンの身体が私の魔力で穢れていない？」

×　　　　　　　　　　×

「大丈夫ですか、ジャックさん！　今、治療術式を……！」
　教会の裏にある広場の中──慌てふためくフラットを余所よそに、ジャックは集まりつつある英雄達の気配を感じ取りながら、クツクツ

と笑う。
　あの弓兵だけではない。まだ見ぬ英えい霊れい達がこの街を舞台に闊かつ歩ぽし、それぞれの伝説を奪い合っているのだ。
　自分のような都市伝説がそこに加わっている事におかしさを覚えつつ、彼は自嘲気味に呟つぶやく。
　その瞳の奥に、まだ一欠片かけらの希望の光を残しながら。
「なるほど……確かに私は地獄から来た。しかし、ここもここでやんわりとした地獄だな」

×　　　　　　　　×

　そして──彼らから少し遅れる形で、さらに一人の英えい霊れいが病院前の大通りへと向かっていた。
　召しよう喚かんされてから初めて外に出たにもかかわらず、勝手知ったるとばかりに道の中央を闊かつ歩ぽする。
「やれやれ、作家に肉体労働させるなって話だよな」
　アレクサンドル・デュマは、そんな事を愚痴りながら確実に病院へと近づいて行った。
　当然ながら、警察署長はその事実を知らない。
　知っていたならば、確実に令れい呪じゆで呼び戻す事だろう。
　だが、部下達の被害状況を聞いて天手古舞いになっている署長はデュマの動向にまで気が回っていない。
　それを知っているからこそ、彼はこうして、自らの足で現場へと向かっている。
　だが、全体を遙はるか遠くから臨める距離で立ち止まると、彼はそれ以上は進まなかった。
　代わりに、いつもと変わらぬ不敵な笑みを浮かべたまま──いつの間にか手の中に現れていたスクロールを開け広げた。
「役者が勇気を見せるってんなら、俺も少しは筋道を直してやるとするか」

そして、遠目に義手の警官──ジョンを見つけてニヤリと笑う。
「驚き役で終わらせやしねえよ。……お前らみてえな奴やつこそ、英雄であるべきだ」
　独り言を呟つぶやきながら、彼は静かにスクロールに『物語』を記し始める。
　彼が気に入った役者達に贈る、ささやかな花束の代わりとして。

「……銃士達よ、風車に挑めマスケテイアーズ・マスカレイド」

　その物語が何を意味するのか、役者達自身も知らぬまま──悲喜劇の舞台はひっそりと、しかし確実に、次なるステージの幕を開こうとしていた。

三日目　朝

『続いて天気予報です。ラスベガス西部に発生した低気圧の続報ですが――』

　テレビから流れるのは、いつも通りの情報だ。
　街の人々はそんな天気の今後を見て一喜一憂しながら、それぞれの仕事に出向いていく。
　スノーフィールドの街はまだ、パニックを起こしてはいない。
　ファルデウスは、その結果に概おおむね満足していた。
　大抵の騒ぎはこちらでも揉もみ消けせるし、ある程度大規模なものでもフランチェスカに頼めばある程度は押さえ込める事は確認できている。
「夕べの病院の事件は、どう処理すべきですかね……。アサシンさんも、そろそろガルヴァロッソの暗殺に取り掛かっている筈はずですが……」
　そんな事を考えていると、ファルデウス専用の秘匿通信が入って来た。
　このスノーフィールド内部ではない。彼のバックアップを行っている『真の黒幕』である、ワシントンの特殊な部署からだ。
「……ファルデウスです。如何いかがなさいました？　将軍」
『……ニュースを見たか？』
　将軍と呼んだ重厚な男の声に、ファルデウスは今しがた流していた街のニュースに目を向ける。だが、これといって重要なニュースは見当たらなかったので、街の外の広域番組の方をチェックした。

するとそこには、次期大統領選の有力候補が病死したというニュースが流れている。
「おや……当選確実と言われていたのに、運が悪かったですね。しかし、将軍のセクションとは直接関係ないのでは？」
『……お前は、関わっていないんだな？』
「？　何がでしょう？」
『彼だけではない。昨日の午後だけで、財界の大物や大手マスコミの司会者、大手ロビイスト団体のリーダーに至るまで、三十五人が事故か病気で急死している。それも、すべてホワイトハウスと太いパイプのある者ばかりだ』
「……」
『検死の結果、疑いようもない事故死や病死だ。だからこそ、この偶然に魔ま術じゅつが絡からんでいない筈はずがない、と、一部の人間は考えている。時期が時期だけに、君達の儀式と関連していると疑うのも無理はないだろう』
　疑念は晴れていない、という声色でファルデウスに告げる将軍は、溜ため息いきを深く吐いた後、事務的な口調で話を締めた。
『大統領には、まだ報告していない。何かスノーフィールドの儀式と関わりがあると解わかれば、すぐに私に連絡しろ』

　後に『アメリカの呪のろわれた日』として都市伝説本に記される事となったその一日について、ファルデウスは考える。
　そして、独自にネットで調べ、その三十五人が死んだ時間と場所を地図上で繋つなぎ合あわせた結果━ガルヴァロッソ・スクラディオの本拠地を中心として、そこに近い場所から順番に繋つながっている事が判明した。
　まるで、スクラディオの本拠地から出発した死神が、歩いていて見つけた順にターゲットを殺して回っているかのように。
　ファルデウスは、これで『ハサン・サッバーハは無関係だな』と言い切れる程に大物ではなく、また、見なかった事にできるほど図ず

う々ずうしくもなかった。
　肝心のガルヴァロッソの生死はまだ解わからない。死んでいたとしても、暫しばらくスクラディオの魔ま術じゆつ師し達が隠匿する事は目に見えている。
「ハサンさん……貴方あなたは一体……どこで何をしているんですか……？」
　ファルデウスは、ここに来てようやく気が付いた。
　もはやこの『儀式』はスノーフィールドには留まらず──アメリカ全土へとその呪のろいを広げ始めているのだという事に。
　そして、恐らくフランチェスカは、最初からそうなる事を望んでいたという事にも。
　愕がく然ぜんとするファルデウスに追い打ちをかけるように、ニュースの中のアナウンサー達が慌ただしい声を上げ始める。
『天気予報の続報です。ラスベガス西部に発生した低気圧は、現在急速に勢力を強め、超大型の台風に変化したと観測されました』
「……？」
　テレビに映し出された衛星画像では、直径８００キロメートルを越える超大型の台風が確認できる。
『このような動きは過去に例が無く──』
　　『デス・バレー国立公園では砂さ塵じん嵐あらしが……』
　　　　　　　『予想進路としては、スノーフィールドに一直線に……』
　　『……本当に、一直線に進んでますね……こんなのありえるんですか？』
　　　『まるで台風が意志を持っているかのようですねえ』
　　　　　　　　　『巫山戯ふざけてる場合じゃありませんよ』
　流れ始める。混こん沌とんとした情報の渦。
　ファルデウスは直感でその顚てん末まつに気付き、半分諦めたように天井を仰ぎながら呟つぶやいた。

「これは……誰だ？　どの陣営の仕業だ？」

「一体……何をこの街祭壇に呼び込む気なんだ……？」

×　　　　　　×

スノーフィールド　上空20キロメートル

「さあ、はやくいらっしゃい？」
　プレラーティの工房である超巨大飛行船。
　その気球部分の上に立ちながら、フィリアは遙はるか南西の空を眺めていた。
　丸みがかった地平線の先に見える、地球規模で見ても充分に巨大な雲の塊を見て、フィリアは満足げに頷うなずき続つづける。
「うんうん。どこにも繋つながって無さそうな『枝』から引っ張ってきたけど、まあ、ちょっとの間だけなら、無くても困らないわよね？　あの時代の『私』ならギリギリ権能も使える筈はずだし」
　そして、愛おしいペットを見るように、遙はるか数百キロメートル先の雲の塊に手を翳かざし、相手に直接かたりかける形で言葉を紡つむぐ。
「あなたが着くまでは手を出さないから安心なさい。みんなで、復ふく讐しゆうを果たしましょう？」
　その表情は笑顔だが、人間らしさが完全に欠落している、ある意味バズディロットとは正反対の恐こわさに満ちた表情だった。
　更に、その笑顔に邪悪としか言いようの無い殺意を浮かべながら下を向く。
「……あの礼儀知らずで、恩知らずな二人にね」

×　　　　　　×

フランチェスカの工房

「飛行船の上の人、さっきから怖いんですけどー」
「気にしなくていいよ。彼女が睨にらんでるの僕らじゃ無くて、地上にいるあの二人だし」
　プレラーティの言葉に慰められつつも、フランチェスカはプウ、と頰を膨らませる。
「もー。逆恨みなんかしてないで、さっさとどっかに行ってくれないかなあ……」

「壊れた女神様のデータなんて相手にしてても、ちっとも面白くないってのに！」

×　×

　真下でそんな苦情を言われているとは知らぬまま、フィリアの身体からだに取とり憑ついた『それ』は、まるで自分自身を慈いつくしむかのような声で、遙はるか西にある台風に呼びかけた。
「ここまで来たら、すぐに元の容カタチに戻してあげるから……」

「楽しみにしてなさい、天の牡牛グガランナ！」

next episode ［Fake05］

成なり田た良りょう悟ご
Fakeシリーズの著者近影は色々な革製品、つまりレザー宝具シリーズで統一しようと考えた際、防具ばかりになりそうと思っていたらまさかの革製ドラゴンダガー（制作：５１６０氏）という発想に中学生の頃のワクワクを取り戻す埼玉在住作家。

イラスト / 森もり井いしづき
菜の花を食べると一足早い春を感じますね。

電撃文庫

Fate/strange Fake④

成なり田た良りょう悟ご

発　行　　2017年5月10日

発行者　　塚田正晃
発行所　　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
http://dengekibunko.jp/

※2017年4月8日発行の電撃文庫『Fate/strange Fake④』初版に基づき制作